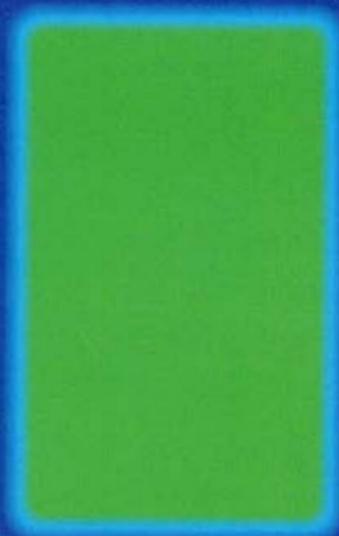


日本への回帰

平成6年 阿蘇合宿レポート

第30集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰
(第三十集)

— 第三十九回学生青年合宿教室（阿蘇）の記録より —

は し が き

かつて党人派の老政治家が吐いた次の如き名(迷?)言は、政界を支配するリアルな現実の一端を語つたものとして名高い。曰く「猿は木から落ちてても猿だが、代議士は選挙に落ちたただの人」。この言に倣つたのか、政党は政権から外れてしまつては存在意義はないとばかりに、自民党は形振りかまはず十ヶ月ぶりに政権に復帰した(昨年六月)。政治力学の原則とはいへ議会の多数派になるために、こともあらうに社会党の党首を内閣首班に担ぐといふ離れ技によつて与党の座を取り戻したのである。議会における数合はせ自体は是非もないが、結成以来、一貫して外国製のイデオロギーに感化され「国の存立」を慮外のことと蔑ろにしてきた社会党と、曲りなりにも「自主憲法の制定」を掲げ続けてきた自民党とが手を結んで連立政権を誕生させたのだから、やはり一驚に値ひすることであつた。しかし、水と油の合体のやうに見えた自社連立政権ではあつたが、必ずしもさうではなかつたといふことが次第に明らかになつてきた。いはゆる「自民党の社会党化」である。新進党(昨年十二月十日結党)

は申すに及ばず、いまや議会における保守勢力の空洞化が白日の下に曝されてゐる。このことはあらぬ期待を捨て去るためにはむしろ歓迎すべきことなのかも知れない。

社会党委員長を担ぎ出して六ヶ月、ついに自民党は「立党以来の党是として」きた「自主憲法の制定すなわち憲法の自主的改正」(新政策綱領、昭和六十年十一月)の旗を降ろすことになつたのである。「時代の変遷に即して現行憲法の改正につき検討を進める」(同前)との文言と、このほど煮詰まつた「二十一世紀に向けた新しい時代にあふさわしい憲法のあり方について、国民とともに幅広く、真摯に論議を進めていきます」(基本問題調査会答申の修正案、昨年十二月)との一節の間に横たはる径庭は、質的にも水と油ほどの開きがある。われらが自主憲法の制定の方向を是とするのは、単に自衛権を明記するためでも、まして単なる再軍備のためでもない。国の確乎たる自立なくしては、やがて父祖に連なる精神文化が蝕れ、ひいては国民個々の福祉も損はれると考へるからである。被占領(独立主権喪失)時代に占領軍当局者が僅か一週間の時間をかけて英文で起草した翻訳「日本国憲法」では国の将来が危ふいと判断するからである。真にconstitution(先人から継承した国の体質・国柄)の名に相應しい憲法を待望するからである。そして「(憲法の「戦争の放棄」の項目は)他国からの強制ではなく、

日本人の自発的選択として保持されてきた」（「湾岸戦争に対する文学者の声明」とか、「世界に先がけたこの憲法を世界各国に輸出しよう」（土井たか子衆院議長）などといふ独善的な自己欺瞞を一掃したいと念願するからである。

東京オリンピックの開催（昭和三十九年）は高度経済成長の真最中のことであつたが、その頃、ある欧米人は左のやうに「日本の繁栄」を評した。

「東京のもつ爆発的なエネルギーの躍動は、ニューヨークはおろか、ロサンジェルスにも、西ベルリンにも、世界中どこをさがしても見られない。何百というビル・デパート・ホテル・劇場の新築……」 「だが、このような目ざましい発展にもかかわらず、今日の日本人は心理的に哲学的に根なし草のようにさえ見える。過去と全く結びつかず、未来に對しても無関心で、まるで現在に酔っぱらっているみたいだ」 「日本は魂を失っている。その意味で、鉄骨は天空にそびえ、ネオンは夜空に輝こうとも、何かしらいたましいものがある」（ノーマン・カズンズ）

「魂をなくした日本の繁栄」と題された右の文章が書かれてから、三十年の歳月が流れた。この間、さらにわが国は繁栄し経済力は伸びて大きくなつた。しかしながら、同時に「根な

し草」的状況も一層、深刻になつてゐる。いま政界の表舞台から「自主憲法の制定」といふ看板が消えようとしてゐるのは、現在に酔つぱらつてゐるわが国の現状を象徴してゐる。

昨年、二人の閣僚が隣国の政治的意向を汲むあまり当然のことのやうに辞任した。それは、まさに国の後先を考へるよりも政権の維持といふ党派の保身を優先させたいがための方策でしかなかつた。まもなく「ポツダム宣言の受諾から滿五十年」を迎へるが、現在に酔ふあまりに、過去（先人）を冒瀆し、従つてまた将来（子孫）に対する今日の責任をも放擲するが如き愚行が罷り通つてゐる。此度の連立政権の発足に際しても、社会党のかねてからの主張であつた「過去の戦争を反省し、未来の平和への決意を表明する国会決議の採択」が合意されてゐる。「反省」とか「未来の平和への決意」とか一見、殊勝なことを言つてゐるやうだが、「いまの自分たち」の手がいかにか汚れてゐないかを言ひ募るために父祖を引き合ひに出し先人を貶しめてゐるにすぎない。もの言はぬ先輩国民に成り代つて一言弁すべき後世の者が、逆に外に向つて佞言を呈しようとしてゐるのだ。そのさもしい心裡は正視するに耐へない。と同時に、敗戦以来、嘗々とつみ重ねてきた自国の外交的努力（講和条約の締結など）を一顧だにしないといふ恐るべき驕慢と背中合はせの「反省」なのである。本来であればかうした国

内の歪みを指摘するのがマス・メディアの使命のはずであるが、実際のところその主流は国外勢力の呼び込み屋に墮するといふ異常なスクランダラスな展開を見せてゐる。

このやうな時代状況の中で、わが「日本人と日本文化」の精華と真価を問ひ尋ねて、われらは昨夏も研修を営んだ。そして「日本と日本人」が国際社会における価値ある構成員として自立的に他国と伍する日の近からんこと願つた。その研修の記録がこの冊子である。行間にこめたわれらの微意をお汲みとりいただければまことに幸甚である。

最後に当たり、小堀桂一郎先生、徳岡孝夫先生には御講義要旨の掲載をお許しいただいたばかりでなく、御懇切なる御加筆を賜つたことに深甚なる感謝を申し上げたい。

平成七年一月十五日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日（八月六日）

運命の大東亜戦争

第二日（八月七日）

国際情勢をどう見るか——マスコミを信じるべきか——

新聞は病んでゐる！——「肉眼」を削り貫かれた新聞——

第三日（八月八日）

一神教的価値観と日本人——日本における超越者の思想の系譜——

第四日（八月九日）

近・現代（一八四四—一九九四）百五十年間の日本の歩みの中で

天皇と大部分の日本国民は、どのやうな思ひで相對して来たか

（社）国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎

小堀桂一郎

山内 健生

徳岡 孝夫

絹田 洋一

大阪府立交野高校教諭

ジャーナリスト

講話

若き友らへ語りかける言葉——物を観る眼——

..... (社) 国民文化研究会常務理事兼事務局長

長内俊平..... 135

短歌入門

短歌創作導入講義

..... 福岡県立水産高校教諭

菅原亨二..... 151

創作短歌全体批評

..... 福岡市立奈多小学校教諭

是松秀文..... 167

青年の言葉

今、地域の学校に戻るとき.....

..... 熊本県芦北町立佐敷小学校教諭

蓑田誠一..... 183

もつと幸福になる三つの秘訣

..... (株) 福武書店人財組織部勤務

大島伸一..... 191

世界の現実と日本人としての生き方

..... 大成建設国際事業本部推進部企画室長

山口秀範..... 199

一年の歩み

..... 神奈川県立津久井高校教諭

大日方学..... 209

合宿教室のあらまし

..... 関西学院大学文学部三年

竹岡淳..... 219

合宿詠草

243

あとがき



講

義

運命の大東亜戦争

大阪府立交野高等学校教諭

絹田洋一



大親峰を望む

現在の日本の異様な状況

戦争に引きずり込んだのは誰か

「大東亜戦争」を抹殺した「神道指令」

インドネシアの場合——共に戦った独立戦争

中国と朝鮮の場合——ソ連の謀略と火薬庫・朝鮮

「極東国際軍事裁判」の欺瞞とパール判決

現在の日本の異様な状況

「日本の常識は世界の非常識」といふ言葉をよく聞きます。日本人にとつては何でもない当然の事が、外国では非常識な事になるといふ事があります。特に外交問題、国際政治問題といった、日本と外国とが直接関はる様な場面でこの傾向が顕著に表はれる様です。

例へば四年前の湾岸戦争の時、イラクがクウェートに侵攻すると各国は機敏に反応し、直ちに軍隊を派遣してサウジ防衛にあたりました。更に国連安全保障理事会で決議し、イラク制裁のために約四十カ国が軍隊を送つて中東の治安を回復します。この時日本政府の対応は非常に遅かつた。四週間後に漸く政府の対応が発表されましたが、内容は十億ドルの資金援助、民間の航空機と船舶で食料等の輸送にあたるといふものでした。「そんな危険な所に誰が行くのか」と又問題になりましたが、当然この様な中途半端な対応で済むはずもなく、結局百三十億ドル—一兆八千億円といふ莫大な金を拠出します。それでも各国が砂漠で血と汗を流してゐる時に日本は金で済ませようとしたのですから、日本に対する評価は低かつた。又この時湾岸戦争に反対する人達がデモ行進をしながら「日本の若者の血を流させるな」と叫んでゐるのをテレビで見て啞然としました。正に「一国平和主義」です。自分の国さへ平和

であればいい。罪のない人達が領土を侵され、命を奪はれても知つた事ではない。他の国の若者が血を流せばよい。一体、日本はなぜこの様な身勝手な国になつてしまつたのでせうか。外交面で言ひますと、日本の歴代首相が韓国等に謝罪を繰り返してゐます。これも世界から見れば異様でせう。悪い事をしたから謝罪は当然だと言ふ人もゐますが、数百年間にわたつて広大な地域で苛烈な植民地支配を行なつた欧米諸国が、旧植民地に謝罪したといふ話はありません。しかも日本は戦後補償には熱心に取り組んできました。昭和四十年、韓国に五億ドルを支払つて日韓基本条約を締結、その中に「全ての請求権についていかなる主張もできない」と明記され、補償問題は完全に決着したのです。中国とも四十七年の日中共同声明で「戦争賠償を放棄する」とし、決着しました。それでも歴代首相は謝罪を繰り返すこれは非常に不思議な事です。そのため最近、莫大な賠償請求をする人も出てきました。

教育面でも異様です。国旗、国歌をまるで忌まはしいものを遠ざける様に学校から締め出してゐる所が多い。こんな国は日本以外にはないでせう。国旗、国歌に反対する人達は「思想、信条の自由に反する」「軍国主義の復活につながる」等と言ひますが、これはをかしい。国旗、国歌に親しんで健全な愛国心を養ふことは大切な事で、当然どの国もやつてゐます。「日の丸は戦争の象徴だ」と言つて否定するのであれば、国旗を揚げられる国はほとんどなくなつてしまひます。欧米は勿論、北朝鮮も昭和二十五年に韓国に侵攻して「朝鮮戦争」を起



こし、同胞五百万人の血を流しました。中国も同年チベットに武力侵攻して多数の犠牲者を出し、その後三十年間に約百二十万人を処刑と拷問によつて殺してゐます。国際アムネスティは最近「中国の激しい人権抑圧によつて、チベットは巨大な強制収容所と化した」と発表してゐる位です。戦争と結びつけて国旗、国歌を否定するのは全く無意味なのです。

戦争に引きずり込んだのは誰か

日本はこの様に政治、教育等様々な面で異様な状況にある訳ですが、なぜこんなふうになつてしまつたのか。原因は大東亜戦争の敗戦後六年余続いた「占領政策」にあると思ひます。日本を占領統治した連合軍は日本を侵略者と断じ、徹底した宣伝と検閲を行なひました。その結果日本人は病的な程の戦争過

敏症に陥り、国連軍参加や国旗等、戦争に関はる事全てに拒絶反応を起こす様になつてしまつたのです。しかし「日本＝侵略者」といふ図式を鵜呑みにしてよいのでせうか。戦争には相手があり、戦争に至る長い過程があります。そしてその間多くの人々が関はつてゐる訳です。双方にそれぞれ問題があつたと考へて当然でせう。そこで日本ではあまり言及されない、米側の問題点について見ていきたいと思ひます。

日米の関係は日露戦争までは親密でした。米英はロシアとの對抗上、日本を援助したのです。しかし日露戦争後、日本がロシアから満州の鉄道等の利権を獲得すると、ハワイを併合し、フィリピンを植民地化して太平洋に勢力を拡大してきた米国は、中国進出を凶つて満州の鉄道を買収しようとしてゐます。これを日本が拒否したため、日米関係が悪化し始めたのです。米国はこの後、日本人移民排斥、ワシントン会議（日本の海軍力制限）、日中紛争時の中国援助等の日本抑制策を続け、更に通商航海条約破棄、対日石油禁輸と、日本に対する経済的締めつけを強化します。特に石油禁輸は日本にとつて致命的でした。当時日本の石油自給率は一割で、約七割を米国からの輸入に頼つてゐましたから、輸出を停止されると日本経済は崩壊します。日本は大きな衝撃を受け、屈服するか戦ふか、戦ふなら石油の備蓄がある内に一刻も早くといふ議論も起こる。この時ルーズベルト大統領は「石油を止めたら日本は戦争に訴へるだらう」と言つてゐます。日本を追い詰めてしまふ事が分つてゐながら、周囲の反対を

押し切つて石油輸出を止めたのです。一方日本は何とか米国との関係を修復して戦争を回避しようと、昭和十六年に野村大使を派遣し「日米交渉」を開始します。日本側は様々な提案をして譲歩を重ねますが、米国はそれを拒否する。近衛首相は遂に「大統領と一対一で話し合ふしかない」と首脳会談を提案しますが、これも事実上拒絶される。それで「開戦やむなし」の声が強まり、九月六日の御前会議で「十月上旬までに交渉がまとまらない場合は開戦」と決定したのです。しかしその御前会議で昭和天皇の異例の御発言がありました。

「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ (明治天皇御製)

自分は平常この御製を拝誦して、大帝の平和を念ぜられたご精神に習ひたいと思つてゐる。それにもかかはらず、このやうな事態に立ち至つたのは、誠に遺憾に堪へない。天皇が平和を希望してをられるのは明らかです。そこで近衛はその夜グルー米大使を訪れ、「戦争回避の手段は首脳会談しかない」と訴へます。グルーはその熱意に動かされ、会談の実現を切望すると打電しましたが、米本国は無視します。クレギー英大使も英本国に「この最高の機会を逸するのは愚策と確信する」と打電しますが無駄でした。この様に日本が戦争回避のために懸命の努力をしたにもかかわらず、米国はそれに応じなかつた。なぜ米国は話し合ひを拒否したのか。その真意は何か。米国の外交責任者、ハル國務長官の言葉です。

「七月二十四日」(日米交渉は)第二幕もいづれ失敗に終る運命にあつた。…米国側の主

目的は、防衛準備のために少しでも時間を稼ぐことであつた」

「八月二日」日本人を阻止するものは力以外にはないようだ。：米国の当面の目的をいくらかでも助けるために日本人の言葉を信用しているように見せかけるつもりだ」

日米交渉はあくまでも見せかけだと言ひ、既に開戦を決意してゐる様な言葉です。そして十一月二十五日の戦争関係閣僚会議の様子が、スチムソン陸軍長官の日記に記されてゐます。

「大統領は『次の月曜日（十二月一日）ごろに攻撃される可能性がある』と指摘し：当面の問題は、我々があまり大きな危険にさらされる事なしに、いかにして日本側に最初の攻撃の火蓋を切らせる様な立場に彼らを追い込むか、という事であつた」

どの様に日本を挑発したら先に手を出してくれるかを話し合つてゐたといふのです。日本の努力とは裏腹に、米国は何とかして戦争に持ち込まうとしてゐた事になります。ではなぜ日本に先に手を出させる必要があつたのか。スチムソンは戦後、議会でかう証言してゐます。

「最初に攻撃させるといふ事は危険ではあつたが、我々は米国民からの完全な支持を得るために、日本人自身が最初に攻撃したのであり、そこで侵略者が誰であるかを何人にとつても疑う余地のないようにしておく事が望ましい、という事をよく承知していた」

米国では大戦介入に反対の世論が強く、大統領も参戦しない事を公約して当選しました。ところがドイツの攻勢で窮地に立たされたチャーチル英首相から強く参戦を要請され、大統領

は承諾します。それで日本が先に攻撃してくれば、米国民は憤慨して参戦を納得するはずだと考へたのです。閣僚会議翌日の二十六日、米国は日本に交渉を断念させるため「ハル・ノート」といふ、日本が到底受容できない過酷な条件を列挙した通告を提示してきました。

「提案(『ハル・ノート』)は：はかない希望をつないで交渉を続行しようとした我々の誠実な努力であつた。(日本がこの提案を『最後通牒』だと言ふのは)うその口実を使つて国民をだまし、軍事的侵略を支持させようとする日本一流のやり方であつた」

ハルは『回想記』で交渉を続ける気だつたと弁明してゐますが、翌二十七日の『スチムソン日記』の中に引用されたハルの次の言葉は、この弁明がうそである事を証明してゐます。

「私(『ハル』)は問題をすっかりご破算にしたよ。私はもう日米交渉から手を引いたよ。これからは君(『スチムソン』)とノックス(海軍長官)君、つまり陸海軍の出る幕だ」

米国には交渉続行の意志はありませんでした。国民を騙して戦争に引きずり込んだのは、むしろ米国だつたのです。外国(ドイツ)の教科書はその経緯をありのままに書いてゐます。

「米国の輸出禁止の圧力の下に、日本の経済力は短期間に崩壊の危機に瀕した。米国が正常な経済関係を取り戻すならば、日本政府は中国地域における戦争を取り止める事を承諾した。しかし米国は、日本が一九三七年以来占領している全地域からの無条件撤退を要求した。国防長官は次の様に書いている。『問題は、日本をいかに操つて最初に火ぶた

を切る立場におくかである』と。日本では遂に：開戦を決定した」

日本の教科書は一方的に日本の非だけを書いてみます。しかし両者に等距離を置き、双方の問題点を公平に取り上げなければ、戦争の本当の姿は見えてこないのではないでせうか。

「大東亜戦争」を抹殺した「神道指令」

今お話しした内容は、皆さんが抱いてをられた大東亜戦争のイメージとは恐らく食ひ違つてゐたと思ひますが、そのイメージを日本人の中に植ゑ付けたのが「占領政策」でした。では次に、現在の戦争のイメージを作り上げ、戦後日本人の精神生活に大きな影響を残した二つの占領政策——「神道指令」と「極東国際軍事裁判」についてお話ししたいと思います。

「神道指令」とは、昭和二十年にGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が発した十三項の禁令からなる覚書で、その第十項が「『大東亜戦争』等の用語の使用を禁止する」といふものでした。「大東亜戦争」といふ呼称は、開戦時に日本政府が正式に決定したものです。これを禁止したのはなぜか。名目上は「軍国主義につながる」といふ事ですが、実際は「日本が戦つた大義名分を内包するこの呼称を抹殺したい」といふ意図があつたと思はれます。では日本の大義名分とは何か。それは「東亜解放」——「アジアの人々を欧米の植民地支配から解放

し、アジアで結束して欧米と対等に並び立つていきたい」といふ理想です。それは名目すぎないと言ふ人もありますが、簡単にさう言ひ切れるのか、考へてみたいと思ひます。

最近のアジアの経済発展は目覚ましく、「東亞解放」等と言つてもピンときません。南アフリカでもアパルトヘイト——人種隔離政策が世界中から非難され、長年の白人支配が終りました。現在、全ての人種は平等だと言つても怒る人は少ないでせう。しかし大東亞戦争以前は、逆に「有色人種は白色人種より劣等だ」といふ考へ方の方が一般的でした。平等どころか、奴隷や家畜として扱はれてゐたのです。さういふ感覚は今の私達には非常に分かりにくいのですが、「中国革命の父」と呼ばれた孫文は、当時の状況を次の様に語つてゐます。

「ヨーロッパの文化は進歩し、兵力も強大で、我がアジアには取り柄がないと考えた。どうしてもアジアはヨーロッパに抵抗できず、永久にヨーロッパの奴隷にならなければならぬ」と考えたのであります。ところが日露戦争が起こると日本はロシアに勝ちました。(スエズ運河でアラビヤ人達が)非常にうれしそうな様子で『お前は日本人か』と問いかけてきました。『これまで我々東洋の有色人種は、いつも西洋民族の圧迫を受けて苦しめられ、浮かび上がれないが、今度日本がロシアを負かしたのだから、東洋の民族が西洋の民族を打ち破つた事になる。だからこんなに愉快になり、喜んでゐるのだ』と言つていました。日本がロシアに勝つて以来、アジアの全民族はヨーロッパを打ち破ることを

考えるようになり：アジア民族の独立という大きな希望が生れたのです」

「有色人種は劣等だ」といふ観念は、白人だけでなく有色人種の側にもあり、諦めの気持ちさへあつた。それが日露戦争によつて覆つたのです。その後世界各地で独立運動が起こり始めると欧米列強は深刻な危機感を持ち、日本人を敵視する思想——「黄禍論」が横行します。「数百年間続いてきた白人による世界支配が覆されるのではないか。日本人は禍の元だ」といふ考へ方です。これも大東亜戦争を誘発する一要因でした。この様な状況を理解しておかなければ、「東亜解放」といふ言葉に込められた切実な意味は理解できないと思ひます。

インドネシアの場合——共に戦つた独立戦争

「東亜解放」の理想についてお話ししましたが、現実はどうだつたのか。ここでインドネシアの場合を見てみたいと思ひます。日本軍の進撃をインドネシアの人達はどう考へてゐるのでせうか。まづブントモ情報大臣、次がアラムシャ副首相の言葉です。

「我々アジア・アフリカの有色民族は、ヨーロッパ人に対して何度となく独立戦争を試みたが全部失敗した。インドネシアの場合は三十五年間も失敗が続いた。それなのに日本軍が米、英、蘭、仏を我々の面前で徹底的に打ちのめしてくれた。白人の弱体と醜態ぶ

りを見てアジア人全部が自信を持ち、独立は近いと知った。：そもそも大東亞戦争は我々の戦争であり、我々がやらねばならなかった。そして実は我々の力でやりたかった。それなのに日本にだけ担当させ、少ししかお手伝いできず、誠に申し訳なかった」

「オランダ二五〇年間は、植民地政治特有の搾取と弾圧の連続であった。それは非常に苛酷なもので：幾度か屍山血河の闘争を試みたが、スパイ網と武力と法律によって圧倒され、壊滅されてしまった。それを日本軍がたちまちオランダの鉄鎖を断ち切ってくれた。インドネシア人が欣喜雀躍し、感謝感激したのは当然である。私は日本軍の小さな欠点を論う代わりに、大きい長所を挙げてみたい。：第二は、日本の軍政が良かった。：第三は軍事訓練と武器の供与である。：第四は日本軍が降伏した後も、多数の有志将校が独立戦争に参加してくれた事である。経験豊かで、しかも勇猛果敢な日本軍将兵の参加が、いかばかり独立戦争を我々に有利な方向に導いたか計り知れない。数百年来インドネシアに住む数百万の中国人の大部分が、オランダ側に加担してインドネシア人に銃を向けたが、日本人義勇兵は全部が全部インドネシア側に味方してくれた」

オランダは愚民政策をとつてインドネシア人を文盲とし、中国人華僑を使つて支配してゐましたが、日露戦争後に独立運動が起こり、多くの運動家が来日します。やがて大東亞戦争が始まるとインドネシア人は日本軍に協力し、わづか九日間でオランダ軍を撃退できました。

日本は特に教育に力を入れ、各種の大学とPETA（義勇軍）を創設します。ところが独立予定日の直前に日本が敗れ、再びオランダ軍に占領される。インドネシアの人々は独立の機会は今しかない、PETAを中心に立ち上がりました。この時日本軍は武装解除され、帰国するばかりになつてみましたが、粗末な武器で優勢なオランダ軍に立ち向かつてゐる彼等を見捨てて帰れなくなつてしまひます。それで日本軍將兵約二千人がインドネシアに留まつて共に独立戦争を戦ひ、その内四百人が戦死したのです。これ程多くの人が、他国の独立のために何の代償もなく命懸けで戦つたのは、恐らく世界史上でも稀な事せう。インドネシアは四年後、遂に悲願の独立を勝ち取ります。「東亜解放」の理想は単なる名目ではなく、現実に実行されました。だからこそGHQは「大東亜戦争」といふ呼称を禁じたのです。「連合国」解放者、日本「侵略者」とするために、又戦後も植民地支配を継続していくために、日本の大義名分——「東亜解放」の理想を抹殺する必要があつたのです。

中国と朝鮮の場合——ソ連の謀略と火薬庫・朝鮮

東南アジアでの日本の功績は大きいかもしれないが、中国、朝鮮での行為は侵略ではないかと思はれる方も多いでせう。しかしこの問題もさう単純ではありません。ここでは満州事

変と支那事変、そして朝鮮問題について考へるためのポイントを二、三挙げておきます。

満州事変で日本軍は満州を制圧し、満州国が建国されます。これは中国に対する侵略なのか。侵略とする前提は満州が中国領土である事ですが、歴史的に満州人と中国人は別の民族であり、別の国家を形成してきました。高句麗、渤海、金、清等は満州人の国家で、強盛だった金、清は中国を支配します。この清の支配に対して革命を起こした孫文らのスローガンが「滅満興漢」——満州人による漢人支配打倒といふ民族自決主義でした。ところが孫文は革命後、満州ばかりかチベット、ウイグル、モンゴルまでも中国領土だと主張し、清からの独立を宣言してゐた他の民族を支配したのです。清朝最後の皇帝溥儀を執政とする満州国建国は、中国軍閥張学良の暴政に苦しんでゐた満州の人々にとつて念願の独立達成だったのです。

支那事変は、北京郊外の盧溝橋で何者かが日本軍に発砲、停戦協定成立後も発砲が続き、更に日本人居留民二百六十人が惨殺された通州事件等を契機に戦火が拡大したものです。発砲したのは誰かといふ点が重要ですが、中国共産党説が有力です。当時中国は孫文の後継者蒋介石の国民党が統一してゐましたが、ソ連のコミンテルン（世界共産化を図る組織）の支部である中国共産党が国民党に対抗し、内戦状態でした。しかし共産党は壊滅寸前となり、劣勢挽回のためソ連のスターリン書記長は、コミンテルン大会で次の様な演説を行なひます。

「ドイツと日本を暴走させよ、しかしそのほこ先を祖国ロシアへ向けさせてはならない。ドイツのほこ先はフランスと英国へ、日本のほこ先は蒋介石の中国へ向けさせよ。そして戦力を消耗したドイツと日本の前に最終的には米国を参戦させて立ちほだからせよ。日独の敗北は必至だ。そこでドイツと日本が荒らし回つて荒廃した地域、つまり日独砕氷船が割つて歩いた跡と、疲弊した日独両国をそっくり共産主義陣営にいたたくのだ」

日中を戦はせて共倒れにさせ、共産化しようといふ凄じい謀略です。翌年これが実行されます。蒋介石が西安で張学良に監禁され、共産党がその生死を握ります。共産党の毛沢東は蔣を殺すつもりでしたが、スターリンは「蔣を生かして日本と戦はせよ」と指示し、釈放された蔣は「国共合作・抗日統一戦線」の方針に転換したのです。その半年後に盧溝橋事件が起きると日本は直ちに蔣と停戦協定を結びますが、コミンテルンは次の様な指令を出します。

「一、あくまで局地解決を避け、事態を日本との全面的衝突に導かなければならぬ。二、右の目的の貫徹のためあらゆる手段を利用し（局地解決を図る）要人を抹殺せよ」

戦ふ意志がない日中両国を無理にでも戦はせよ、といふ命令です。かうして見ますと、盧溝橋で発砲し、挑発した犯人も推察できるでせう。この後日中間の紛争は泥沼化し、歴史はスターリンの筋書き通りに運んでいく訳ですが、その背後に、自国の勢力拡大のために他国を戦はせようとした、ソ連の卑劣な謀略があつた事を知つておいていただきたいと思ひます。

次に朝鮮ですが、実は朝鮮の側にも問題があつたのです。韓国の朴正熙大統領の言葉です。「わが五千年の歴史は、一言でいって退嬰と粗雑と沈滞の連鎖史であつたといえる。第一に我々の歴史は他人に押され、それに寄りかかつて生きてきた歴史である。侵略は我々が招き入れたようなものとなっている。第二に、我々の党争に関する事である。これは世界でも稀な程小児病的で醜いものである。李朝は結局この党派争いに明け暮れている内、亡国の悲運を味わう事になった。第三に我々は自主、主体意識が不足していた」

中国の革命家で孫文の同志だつた陳天華書記は、朝鮮について厳しく評してゐます。

「自ら亡国の歴史を歩みながら、人が亡ぼすと怨む事ができるだろうか。：朝鮮が亡びたのは朝鮮自ら亡びたにすぎないのであつて、日本がこれを亡ぼし得たのではない」

朝鮮は極めて多くの党派に分裂し、諸大国と結んで党争を繰り返し、親日派と親清派の党争は日清戦争にまでつながつていきます。そして日清戦争後はロシアの保護下に入り、日露戦争緒戦で日本が勝つと、ロシアから日本に乗り換へてその保護下に入る。この様に自主自立の意志が乏しく、常に諸大国に依存する姿勢は諸国間の軋轢を生み、東アジアの火薬庫となつてゐたのです。米英両国は朝鮮をどう見てゐたのか。ルーズベルト米大統領の言葉です。

「将来の禍根を絶滅させるには(日本による韓国の)保護化あるのみ。それが韓国の安寧と東洋平和のため最良の策なるべし」

米英両国は東アジアの政局安定のため、日本による韓国保護化を積極的に支持したのです。当時の冷厳な国際情勢の下では、韓国併合はやむを得ない一面があつたのではないでせうか。

「極東国際軍事裁判」の欺瞞とパール判決

敗戦の翌年、連合国の判事によつて「極東国際軍事裁判（『東京裁判』）」が開廷されます。法廷は起訴された二十八人全員を有罪とし、東条英機ら七人が処刑されました。この判決で「日本の一部の軍国主義者が国民を無謀な侵略戦争に引き込み、アジア諸国に甚大な損害を与へた」とし、徹底した検閲で裁判に対する批判を一切禁じて「日本『侵略者』」のイメージを定着させたのです。しかしこの裁判は欺瞞に満ちたものでした。例へばヒトラーと手を結んでポーランドを分割し、バルト三国、フィンランドを侵略したソ連が、日本に侵略されたと同様に日本を裁いたのです。日ソ中立条約を破つて満州に侵攻し、北方領土まで奪つたのはソ連ですから、被告と原告が逆転してゐるといふ茶番です。これらの欺瞞を鋭く指摘されたのがインド代表判事のパール博士でした。ネール首相の信任を得て東京に派遣された博士は、被告全員を無罪とする膨大な判決文を発表されます。法廷はこれを少数意見として黙殺しましたが、この公正無比な判決は世界の賞賛を浴び、後に博士は国連の国際司法委員会議

長に選任されます。博士が指摘された問題点を挙げてみませう。「戦争犯罪」について――

「『老若男女を問わず殺戮し、一本の木でも一軒の家でも立っている事を許してはならない』(第一次大戦中のドイツ皇帝の書簡)これは彼の残酷な政策を示したものであり戦争を短期に終らせるためのこの無差別殺人の政策は、一つの犯罪であると考えられたのである。太平洋戦争においてはこの原子爆弾使用の決定が、第一次世界大戦中におけるドイツ皇帝の指令、及び第二次世界大戦中におけるナチス指導者達の指令に近似した唯一のものである。この様なものを現在の被告の所為には見出しえないのである」

原爆の使用は明らかに無差別大量殺戮です。従つて米大統領の原爆投下命令こそ、この戦争中最大の戦争犯罪だったのです。しかしこの裁判では敗戦国の犯罪だけを裁き、戦勝国の犯罪は無視しました。これでは法が公平に適用されたとは言へず、宣伝のための「興行的」裁判、「正義の名を借りた報復」と言はざるを得ません。博士の指摘は連合国にとつて最も痛い所を突いてゐたため、この判決文の公刊は禁止されます。次に「侵略戦争」について――

「西洋諸国が今日東半球の諸領土において所有している権益は：武力を以てする暴力行為によつて獲得されたものであり：侵略者という言葉は本質的にカメレオンのものである。あり、単に敗北した側の指導者たちを意味するだけのものかもしれないのである」

この裁判は昭和三年以降の十七年間に限定して日本を裁きました。それ以前に遡ると、欧米

列強が何百年間も続けてゐる植民地支配、この明白な侵略行為が含まれてしまひ、連合国も都合が悪かつたのです。しかし博士の祖国インドは二百年間英国の圧政に苦しんできました。それが日本の進撃を契機に悲願の独立を達成した訳ですから、その日本を英国が侵略行為で裁くのは道理に合はない、といふお気持ちがあつたのではないかと思はれます。ところが博士はある人から「日本に同情的な判決をいただき感謝に耐へない」と言はれた時、「日本に同情したと考へられるならそれは誤解だ。私は真実を真実として認め、私の信ずる正しき法を適用したにすぎない」と答へられました。自分はあくまでも真実と法に基づいて判決を下したと言はれるのです。最後に、博士が昭和二十七年に來日し、講演された時の言葉です。

「私は日本の今後の国民生活、ことに精神生活の面において、東京裁判の内容とその影響というものが、非常に大きな作用をなすものと考えている」「彼らは、日本が侵略戦争を行なつたという事を歴史にとどめる事によって自分らのアジア侵略の正当性を誇示すると同時に、日本の十七年間の一切を罪悪と烙印する事が目的であつたに違いない。…この私の歴史を読めば、欧米こそアジア侵略の張本人であるという事が分かるはずだ。それなのにあなた方は自分らの子弟に『日本は犯罪を犯したのだ、日本は侵略の暴挙を敢えてしたのだ』と教えている。満州事変から大東亜戦争に至る真実の歴史を、どうか私の判決文を通して充分研究していただきたい。日本の子弟が歪められた罪悪感を背負つ

て、卑屈、退廃に流されていくのを、私は平然と見過ごす訳にはいかない。彼らの宣伝の欺瞞を払拭し、誤った歴史を書き変えねばならない」

欺瞞に満ちたこの裁判によつて間違つた罪悪感を持ち、卑屈になつてはならない。眞実の歴史を学び、日本人として誇りを持つて生きて欲しい。博士の願ひは果たして実現されたでせうか。残念ながら「東京裁判史観」の呪縛は今なほ強く、マスコミや政界、教育界を席卷してゐます。「あの戦争は侵略戦争であつた」といふ細川発言は正にそれですし、又戦後五十年の来年、国会で「謝罪決議」を行なはうといふ動きがある程です。どの国でも最高の敬意が払はれる戦死者を、日本では侵略者として貶めようとしてゐるのです。日本が健全な精神を取り戻し、本然の姿に立ち戻るためには占領政策によつて歪められた歴史を正す事がどうしても必要です。大東亜戦争といふ壮大な悲劇は「軍国主義が負けて民主主義が勝つた」等といふ空疎な観念で片付けられるものではありません。巧妙な欺瞞と先入観に惑はされず私達の父祖が辿つた苦難の道を、改めて自分の目で確かめていつていただきたいと思ひます

国際情勢をどう見るか

― マスコミを信じるべきか ―

ジャーナリスト

徳岡孝夫



阿蘇の刈干し

はじめに―金日成の死について―

嘘で固めた国家

マスコミを信じるべきか

言論の自由とは

日本のマスコミの現状

新聞記者と新聞社員

〈質疑応答〉

はじめに—金日成の死について—

お早うございます。徳岡です。いつもなら寝てゐる時間ですので、寝言のやうな話をするかも知れませんが、その時は大いに笑つて下さい。講義要旨を準備しましたが、その前に、この七月八日に金日成が死ぬといふ大ニュースがありましたので、その死について、また北朝鮮といふ体制について申しておきたいと思ひます。

金日成が死んで、北朝鮮二二〇〇万の人民、少なくともピョンヤン(平壤)に現れた人民が、天を仰ぎ、地を叩き、胸掻きむしつて「アイゴ」と叫んでゐた様子を皆さんもご存じだと思ひます。息子の金正日が後を継いだとして、果して何日、何ヶ月、何年保つのか、今アジア最大の問題です。専門家がいろんな説を発表してゐますが、葬式に出てきた政治家の序列が一位から一五〇位まで決まつてゐる国といふのは珍しいのではないでせうか。一四九位と一五〇位の人間の序列をどうつけるのか、はなはだ異様に感じます。共産主義国ではこのやうなことが起るのですから、全く不思議です。

ともあれ、「金正日は保つのか?」といふ問ひに対しては全然分らないといふのが正直な所です。新聞は「不透明」と書いて誤魔化してゐますが、要するに「分らない」といふこと

です。そのやうな中で、最近日本人の間に何となく「金日成は相当偉い男だつた」といふ意識が広まつてゐるやうです。相当ニュースを読んでゐる人達までが、「強国アメリカを手玉にとつて交渉してゐたんだからすごい男だ」と言ふ。全然違ふといふのが私の見方です。

今日の東アジアの状態は、飛行機がハイジャックされたときの状態に非常に良く似てゐる。若い皆さんは記憶が薄いでせうが、一九七〇年代にはハイジャックがしばしば起りました。いちばん良くやつたのはパレスチナゲリラです。最近はいスラエルとの間で交渉が成立して少なくなりましたが、二〇年前には日常茶飯事でした。今日の搭乗口の探知ゲートもその苦い経験によつて開発されたのです。ともかく、北朝鮮の少数の指導者がハイジャック犯人となつて、東アジアの十数億の人民が乗る「飛行機」を乗つ取つてゐる情景を想像して下さい。飛行機は滑走路に降りてゐる。そして無電で犯人とこちらの警察庁長官、あるいは軍の司令官が交渉してゐる。「おい、核を渡せ、そして乗客を開放しろ」「冗談ぢやない、俺は核なんか持つてゐない。とにかく俺の要求を聞け」。人質に取られてゐるのは十二億の中国人、一億二千万の日本人、数千万のロシアの沿海州に住んでゐる人達、三千数百万の韓国人。

この状態を解決するにはどうしたらいいか。一つは強行解決。夜陰に紛れて特殊部隊を入れて、人質に「伏せろ！」と言つて、二、三分のうちに犯人を全部撃ち殺してしまふか、捕まへてしまふ。イスラエルがこれをよくやりました。もうひとつは、のんびりと交渉し、犯



人が折れてくるのを待つ。その間は、こちらからサ
ンドイッチなどを差し入れて、犯人や人質に食べさ
せるのです。今アメリカが考へてゐる経済制裁とい
ふのは、このサンドイッチを止めようといふわけ
です。さうすれば北朝鮮は腹が減つてきて降参するだ
らう。その時に攻めていくか、話し合ひのテーブル
につかせればいいぢやないか。しかし、北朝鮮は「経
済制裁は宣戦布告とみなす」と言つてゐる。だから
サンドイッチを止めることも出来ない。

更に困つたことには、北朝鮮が何を要求してゐる
かがはつきり分らないのです。どうも日本やアメリ
カに国として認めてもらふことを一番望んでゐるら
しいが、それならもう少し普通の態度や言動を取ら
ないといけないと思ふのですがそれもしない。何を
要求してゐるのか分らない犯人と交渉するのは至難
の技です。もう一つ困るのは彼らが核を持つてゐる

ことです。ノドン一号、射程距離が一〇〇〇キロですから、この阿蘇にも届きます。我々はこのにのんびり座つてゐますが、実は明日をも知れぬ身かも知れないのです。これを忘れてはいけません。金日成は偉大でも何でもない。テロリストでした。恐怖(テラー)によって人を支配して来たのです。

嘘で固めた国家

昭和二十五(一九五〇)年の六月、戦争が終はつてやうやく少しご飯が食べられるやうになつた頃、朝鮮戦争が起りました。北朝鮮はこの戦争を「南が始めた」と四〇年も言ひ続けてきましたが、金日成が始めたことはつきりしてゐる。この戦争を指導した北朝鮮の副参謀長は、後にソ連(今のロシア)に亡命してそのことをはつきり言つてゐる。また、ロシアの機密文書が公開されて、戦争が始まる前に金日成がスターリンに許可を求め協力を要請したことも分つてゐます。

この時アメリカ軍は韓国にゐませんでした。油断してゐたのです。戦争が終はつて五年、在日米軍は日本の女の子と遊んでばかりゐて骨抜きになつてゐた。北朝鮮が攻めてきたといふので慌てて韓国に派兵しましたが、あつと言ふ間に釜山まで追ひ詰められました。我々

はその頃学生でしたから、戦争に駆りだされると思つたものです。「やつと戦争が一つ終はつて命を拾つたと思つたのに、またか」と思つて、身の安全をはかるためにはどうしたらいいか、仲間内で真剣に議論しました。ソ連軍に入らうといふのが結論でした。そして戦争が始まつたらアメリカ軍に投降しよう、アメリカ軍なら人道的に取り扱つてくれるから生きていける、逆にアメリカ軍についてゐて向うに捕まつたら絶対生命はない、と我々は経験的に知つてゐました。

当時六〇万の日本兵がシベリアに抑留されてゐました。南方からは兵隊も一般人もどんどん帰つて来た。しかしシベリアから帰つてきた人はみんなひどい話をした。舞鶴に着くやいなやたちまち赤旗の歌を合唱してゐることも聞いてゐた。だから学生としては自衛上、北朝鮮やソ連軍の方について、すぐに降参しようと思へたわけです。

もう少しで金日成は朝鮮半島を完全に手に入れるところでしたが、マッカーサーがそれを阻止しました。マッカーサーはトルーマン宛に「我に今何個師団かの兵を直ちに寄越せ。その兵を受けたら、直ちに仁川(インチョン、ソウルの西の港)に上陸し、そこを鉄のハンマーに釜山を鉄床にして、北朝鮮を徹底的に叩きのめすであらう」と言つたのです。マッカーサーらしい芝居がかつたセリフですが、ズバリ当つた。北朝鮮軍は鴨緑江を越えて中国まで逃げた。しかし、中国軍が大挙参戦してきて収拾がつかなくなり、今の三八度線で休戦ラ

インが出来ました。あれは平和ラインではありません。今戦争を休んでゐるだけなのです。これは絶対に忘れてはいけません。戦争は継続中なのです。これが金日成のやつた戦争です。何百万人も死にました。

七〇年代には、三八度線を挟んだ一五キロづつの非武装地帯（デミリタライズド・ゾーン、DMZ）に数箇所にわたつて北朝鮮がトンネルを掘り、いざといふときに韓国に進撃するための準備をしました。当時日本にゐたニューヨークタイムズやワシントンポストの記者は、これは恐らく韓国のやらせだらうと言つてゐましたが、実際に現地を見た後で聞くと、「間違ひない。土を掘つてゐるノミの跡が全部北から南に向かつてついでゐた。何キロ進んでもついでゐた」と言ひました。だから、休戦ラインを作つて、板門店（パンナムジョン）で色々取り決めようと提案しながら、一方ではトンネルを掘つて一斉に韓国政府を転覆させようとしてゐたのです。休戦ラインからソウルまで四十数キロです。戦車ならあつといふ間です。百キロの速度が出る戦車などザラです。僕はベトナム戦争に従軍してゐて戦車でヒッチハイクしたことがありますからよく知つてゐます。

それから一九八三年にラングーン事件がありました。これは韓国の全斗煥大統領がビルマ（今のミャンマー）のアウン・サン（ビルマ建国の父）を祀つた廟にお参りに行く直前に、その廟を爆破した事件です。これは北朝鮮のゲリラの仕業でした。ゲリラは何人か死にましたが、

生き残った一人にビルマ政府が尋問したところ「全斗煥は死んだか？」と聞いた。「死んだ」と教へると（実は死んでなかったのですが）、「さうか」とニッコリ笑つて自分は北朝鮮の工作員であると全部白状して絞首刑になつたのです。この事件を契機にビルマは北朝鮮と国交を断ちました。北朝鮮は「韓国がやつた自作自演のドラマだ」と言つてゐますが、とんでもない。証拠や状況からみて明らかに北朝鮮がやつたことです。

一九八七年には大韓航空機爆破事件が起りました。インド洋上空でコリアン・エアラインズを爆破したのが北朝鮮であることは、その爆薬を仕掛けたキム・ヒョンヒ（金賢姫）が語つたので明らかです。彼女の家がピョンヤンにあるといふことも日本の記者が確認してゐます。彼女に日本語を教へたり・ウネ（李恩恵）も日本人であることが判明してゐるが、北朝鮮はそれを認めず、この事件も韓国がやつた事だと言つてゐます。

つまり、金日成といふ人の体制は完全に嘘で固めた体制でした。さういふ国家を全体主義国家（トータルタリアニズム）と言ひ、それを一人で治めてゐる男を独裁者（ディクテーター）と言ふのです。そして彼は恐怖（テロ、テラー）によつて民衆を治めるのです。もし自分で何か考へてゐる者、あるいはけしからん事を考へてゐる奴がゐたら、証拠なんてなくても、たちまち引つ張つていつて強制収容所に入れる。つまり国民に自分で考へることを許さない。俺が考へてやると独裁者は言ふのです。北朝鮮のことを書いたものによく「一人の人間が全

てのことを指導できる筈がない」などといふ記述が出てきますが、それは我々の悪い癖で、彼らの全体主義の論理に従ふとそれは可能なのです。太陽の如く輝き給ふ首領様が全てを考へてくださる、我々は何も考へる必要はない。何かけしからん事を考へたら親子兄弟、親戚まで全部やられる状態であることが時々亡命者の口から、あるいは北朝鮮の外交から分ります。ですから金日成の巨大な金色の銅像もいつか倒されるでせうが、あの像の前で泣き喚いてゐる人達は、金日成がゐなければ今よりどんなに幸せであつたか分らないんですよ。でもそれが分らないほど洗脳されてしまつてゐるのです。この人たちにいくら言つても仕様がないでせう。馬の耳に念仏です。

さて、北朝鮮がこれからどうなるか。あまりはつきりとは申せませんが、一つ参考にする例がある。金日成が死んだ四日後、「人民日報」に面白い記事が出ました。中国政府がわざと出したんぢやないかと思ふほどです。中国陝西省の西安（昔の長安）のお城の外に始皇帝の墓、始皇陵がある。始皇帝といふ人は紀元前三世紀に生きた想像を絶する王様で、今人工衛星から見える唯一の人工建造物といはれる万里長城を築き、徐福に不老長寿の薬を探させ、満州、東北地方から南はベトナムの北まで支那全体を統一した英雄です。始皇帝は永遠を望んだ。不老長寿が駄目でも自分の子孫が永遠に続くやうに念じ、行政組織を固めて自分の子孫・曾孫と順番に皇帝になるやうに決め、名前も二世、三世とするやうに命じ永久に秦の王

室が続くやうにした。

二世皇帝は胡亥と言ひますが、彼は自分の兄弟姉妹を全部殺したのです。射殺したり、斧で頭をかち割つたり、八つ裂きにして殺した。今度西安の墓から見つかつた遺骨はその銅印からどうも始皇帝の息子や娘らしいが、頭蓋骨に矢尻が突き刺さつたり、下顎がずれてゐる遺骨があつた。扼殺されたのですね。男五人、女二人の遺骨がバラバラになつて墓の中に散乱してゐたといふから、死んだ当時は八つ裂きにされて放りこまれたのでせう。かうして胡亥は即位しましたが、たつた四年しか保ちませんでした。私は中国人が「金日成の将来もかくの如し」と言ひたいのぢやないかと思つて、大いにこの記事に興味を持ちました。別に親族の争ひでなくても、必ず指導部のなかに争ひが起る、遅かれ早かれ。

マスコミを信じるべきか

本題の「マスコミを信じるべきか」といふことについては、「信じるべきでない」といふのが私の結論です。

ある新聞がアザミ珊瑚事件といふのを惹き起しました。八重山列島の海にその新聞社のカメラマンが潜つて、カメラのストロボで「YK」といふイニシャルを珊瑚に彫つてそれを撮

影してバーンと一面に載せた。これはやらせがバレた珍しい例です。削つたばかりのカスが周りにいっぱい付いてゐたし、近所のダイバーの連中が現場を見てゐたから分つたのです。しかし他の場合、まづ嘘はバレない。でも、あの時の問題はカメラマンよりも嘘の写真を元にして原稿を書いた記者の方にあるのです。かういふ原稿でした。

「日本人は落書にかけては今や世界に冠たる民族かも知れない。だけどこれは将来の人達が見ても八〇年代日本の記念碑になるに違ひない。精神の貧しさの、荒んだ心の」

これは嘘の写真を元にして日本人を叱つてゐるのです。冗談も休み休みしてくれと言ひたい。お前こそ嘘を言ひながら、何が日本人の精神の貧困だ。こちらの方が問題なんです。

まづ最初に覚えておかないといけないのは、マスメディアといふのは、「何があつたか」を報道するのではなく、「何があつて欲しいか」を報道するものだといふことです。水中カメラを持つて潜つてみた。海は澄んでゐる。ところが本土から来たダイバーが、何百年も経たないと形成されないほどの珊瑚にイニシャルを書いてゐるらしい。それを写真に撮つてやらう。でもいくら探しても落書はなかつた。そこで自ら珊瑚に傷つけて捏造したわけです。これがマスコミの常套手段です。全然珍しくない。

私が毎日新聞に入つて間もない頃一九五〇年代の前半に、ヘルシンキで冬季オリンピックピクがありまして。日本の選手も出場して、その時のジャンプの写真が電送で送られてきた。し

かしその写真を見ると、黒い空を背景に白い霧がボヤッとあるだけなんです。その頃新聞社には絵描きさんといふ人がいました。インクを用ゐて筆に唾をつけて写真にススツと線を引く。すると新聞になつたときに物凄くはつきりした写真になるのです。その絵描きさんがこの写真を見てこれでは駄目だといふので手を入れてスキー選手らしい格好にしたのです。ついでにスキーの選手だからストックを持ってゐるに違ひないと考へて、両手にストックを持たせた。出来た夕刊を運動部の奴が見て、ギャツと言つた時にはもう手遅れです。ストックを持つたままジャンプしてゐる写真が載つた。これが新聞の基本的な姿勢です。何が起きたかよりも、何が起るべきかを載せるんです。これは我々がマスコミに接するとき絶対に絶対忘れてはならないことです。つまり眞実は後回しなのです。

言論の自由とは

私は新聞記者になつて七年目にやうやく念願かなつてフルブライトの試験に合格しました。大阪で三人しか通らないのですから大変でした。そしてアメリカのニューヨーク州の北の小さな大学へ行つたのです。

その時に新聞学概論といふ講義を取りました。講義の担当者はマーファイ先生でした。最初

の授業でしたから、私は緊張して名札も付けて最前列に座つた。先生は黒い手帳を広げて出席を取つた。どう応へていいかさへ知りませんでしたから、イエスとかヒアとか皆が言ふのを真似して応へました。二十数人のクラスでした。マーフィ先生は黒い出席簿を閉ぢ、ボンと机の上において我々の方を向き、「What is the freedom of the press?」（言論の自由とは何か?）と聞いたのです。僕はびつくりしました。講義の最初を質問で始めるやうな先生は日本にはゐない。「何が起るんだらう?」と、僕はボヤーンと見てゐました。先生は質問の後、僕等の方をじつと見て、教卓に腰掛けたのです。日本人にとつて教卓は神聖なものですから、これにも驚いた。しばらく先生は僕等を見て、それからポケットに手を入れて小銭を出して勘定したり、歩いて教室の後まで行つて、窓から外の景色をちよつと見る。何をしてゐるんだらうとしばらく考へて、やつと分つた。我々に考へる時間を与へてゐたのです。ああ、さうかと思つて僕も考へました。

するとしばらくして外の景色を見てゐた先生が教壇に戻つて、もう一度出席簿を取り上げて「名前の一番覚えにくい人から言つてもらはうか。ミスター・トクオカ」と言つたのです。僕のゐた日本の大学にも留学生は一人か二人はゐたのですが、みんなお客さんでした。さういふ人達にまともに質問したりは絶対しなかつた。聴講生扱ひだったので。

さうしたなかで指名を受けたのでびつくりして立ち上がり、何から申し上げてよいやら英

語は下手でしたが、ともかく一所懸命に思ふことを言つたのです。「ベリーグッド。今の発言に補足はありませんか？」次はナイジェリアから来た学生が当てられた。後は全員アメリカ人だつたと思ひますが、九十分の授業の間ずーつと当てていつた。そして驚く勿れ、この第一時間目の講義の結論は、「言論は自由である。しかし満員の映画館のなかで、火事だ！と叫ぶ自由は誰にもない」といふことでした。つまり「無責任な言論は駄目だ」といふことです。

私は九〇分の講義が終はつて、よろよろと教室の中からよろめき出るやうな頭をガーンとやられたやうな感動を覚えました。なぜならアメリカといふ国は自由を座標軸にして成り立つてゐる国です。ニューヨークには自由の女神がある。その自由は信教の自由、プロテスタントとカトリックが殺し合ひをしてゐるヨーロッパからの自由でした。その言はば自由の本家のアメリカで、新聞学概論の第一時間目に「責任」が論じられたのです。俺は何をしてゐたんだらうか。新聞社に入つたのに、誰も私に責任とか義務とか自由の限界を教へてくれはしなかつた。ただ名刺刷つて、自転車に乗つて「お前、警察へ行つてこい。何でも聞いてこい。刑事が何か言ふたら、それを書け。本社へ送るかどうかは俺が決めたる」これだけだつた。日本のジャーナリズムの現状は今もそんなに變はつてはゐません。しかしアメリカでは私が大学院で受けたやうな教育を受けた者が新聞記者になつてゐるのです。ですから覚悟が違ふのです。

日本のマスコミの現状

日本のマスコミ、特にテレビは無茶苦茶です。私は民放を報道機関とは思つてゐません。この間のことなんですが、電話が鳴つたので取ると「テレビ朝日ですが、徳岡さんに『驚きもの木』と言ふ番組に出て、三島事件の話をしてもらひたいのですが」と藪から棒に言ふ。「ええつ?」と言つて名を聞かうとしたら、向うは「徳岡さんですわね?」と言ふんです。「はい、さうです」と言ふと急に慌てて、「いや、今日は電話番号を確認するために掛けただけですから、またのちほど」と言つて切つてしまつた。呆氣に取られました。その内だんだん腹が立つてきた。あの時に死んだのは三島由紀夫と森田必勝です。二人とも思ふところがあつて古式に則り切腹し、介錯されて死んだのです。それを「驚きもの木」とはなんだ。腹が立つてきたけれども、向うは名前も言はないし抗議の仕様もない。その内また電話があるから断つてやらうと思つたのです。

すると二カ月ほど経つてまたかかつてきた。「もしもし徳岡さんですか。いやあ実はね、あの企画は一時ボツになつてゐましたけれど、急にやることになつたんで、すぐ協力してほしい」と言ふのです。テレビ朝日から月給もらつてゐる訳ぢやなし、ホイホイ協力できるもん

かと思ひながら断つたのですが、また電話をかけてくるのです。「あの、いつ来てもらへますか?」「いや、今忙しくしてをりますから行けません」「困りましたねえ、それならこちらが取材に行きます」「いや、こちらも忙しく出歩いてゐますので、お目にかかれなれないと思ひます。名古屋へも行かないといけませんので」「さうですか、それなら名古屋に取材に行きます」「いや、名古屋も忙しくしてをりますから」それからもう毎日、朝夕にかかつてくるんです。「是非やつてもらはないと、もうあなた以外にない」と言ふのです。

こんな連中に三島さんの死に方を話すことなど出来ない。私は多忙を繰り返して、「時にあなたはテレビ朝日の何といふ方ですか?」と聞いて、何か問題が起つたときにはテレビ朝日の知り合ひの偉い人に言はうとしたら「いや、実は私はテレビ朝日と契約してゐるプロダクションの者で:」といふ。政治家が悪いことをしたときには必ず秘書がやつたことになり、テレビが悪いことをしたら必ずプロダクションがやつたことになるぐらゐは承知してゐる。ああ成程と思ひ、「さうですか、プロダクションでしたか。残念ながら私は何のご協力も出来ないやうです。諦めて下さい」と言つたところ、相手は結局「さうですか」と応へざるを得ず、これで逃れることが出来たと思つてゐました。

それから一ヵ月ほどして大学の教へ子から電話がかかつてきた。夜の十時です。「先生見たわよ。出演してたわね」「出演?ああ、テレビ朝日か。しかし俺は出てないよ」「分つてるわ」

と教へ子は言ふのです。なぜかと聞いたら「先生が三島由紀夫さんから、市ヶ谷に来てくれといふ電話を受けて、吸つてゐた煙草を灰皿になすりつけて飛び出して行つた姿が映つたもの」「それは俺ぢやないよ、誰かタレントにやらせたんだ」と私は言つたのです。私は紙巻き煙草は吸ひません。パイプです。教へ子はそれを知つてゐますから偽物だと分つたわけですから知らない間に「私」は出演してゐたのですね。

新聞記者と新聞社員

日本ではジャーナリスト志望の若者が非常に多い。なぜか？ 学生のままの気分でやつていけるからです。偉さうな顔して大臣の側へ行つて話を聞けるし、名刺一枚でどんな偉い人でも取材できるし、上役のことをボロくそに言ふことも出来れば、普通の会社のやうに課長なんかから「君の販売実績は上がらんぢやないか」と叱られることもないのです。でも日本には残念ながら「新聞記者」はほとんどゐない、「新聞社員」ばかりです。会社のなかで会社を批判せずに会社を愛して、会社の為に暮らしてゐる人は多いけれども、独立の気概を持つて年取るまで第一線に出て原稿を書いてゐるやうな「新聞記者」はほとんどゐません。

一九七五年四月二十九日、ベトナム戦争最後のサイゴンが陥落する前日、取材しながら私

はアメリカの海兵隊のヘリコプターに乗つて、ベトナム難民と共に脱出しました。ヘリコプターには一度に五十人づつしか乗れない。そこでアメリカの若い海兵隊員が来て我々を五十人づつのグループに分けて「ここで待て」と言ふ。分厚いコンクリートの壕のなかです。外では迫撃砲が着弾する「ヒュー」といふ音がしてゐました。その中にイギリスのデーリーメールの記者ビンセント・マルクローンがゐた。他にアメリカのCBSテレビのクルーが二人、残り四十六人はベトナム難民でした。

マルクローンはその時僕に、日本の敗戦を取材したときのことなどを話しました。三十年前のことです。この時彼は五十七か八で、その後ロンドンに帰つて癌で死にましたが、第一線に三十年間も出て働いてゐる新聞記者がゐるたんですよ、外国には。日本の記者の中ではベトナムの最後を見届けたのは恐らく私が最年長でせう。四十五歳でした。戦争屋(コンバットリポーター)と言はれてゐましたが、これが一番面白いのです。人が死ぬところが面白いといつたら語弊がありますが、そこには人間ののつびきならない真実があるのです。例へば二人で並んで歩いてゐて、一人は破片に当つて死んでも、もう一人は無傷といふことが現にあります。神様がゐるとしか思へないことがあるのです。そして肅然となる。それが前線ではつきりと分るが、この平和な社会では分らない。だから僕はいつも前線に惹きつけられて、志願して行つたのです。

何時間も蒸し暑い壕の中で待つて、いよいよ我々が脱出する番になつたときに、難民の一人のお爺さんが綺麗なフランス語で「私は走れない」と言つたのです。相当なインテリだつたと思ひます、海兵隊員は担架を探したが、そんなものない。もうベトナム人は市街に迫つてゐるし、迫撃砲弾も飛び交つてゐる。一刻を争ふ事態です。困つたお爺ちゃんがるなあと私は思つたのです。

ところがその時にマルクローンは「I'll walk him. I will walk him.」(俺と一緒に歩いてやらう)と言つたんです。つひに我々の番が来て、海兵隊員が「走れえ！」と言つたときに、私は走つて身体中汗まみれになつて、ズボンなんかくつついて破れさうだつた。大型ヘリコプターの後から乗らうとしたときに、後へ引つ繰り返つて、それでもタイプライターだけは離さないで起き上がつて乗り込みました。そして後を振り向いたのです。するとヘリコプターの噴き出すジェットエンジンの陽炎のなかに、杖をついたお爺さんの手を取つたピンセント・マルクローンがゆつくり歩いてくるんです。もちろん間に合ひました。彼らが乗ると同時にヘリコプターは離陸して、民家の屋根の上をバウンドするやうに飛び発ちました。誰かがズドンとバズーカでも撃つたら、いつぺんに我々は死んでゐたところです。海へ出たときに後にゐたベトナム人が「あれを見ろ」と言つたので下を見ると、無数の小舟が見えました。人が溢れるほど乗つて沖へ沖へと脱出してゐました。皆、共産主義体制から逃げてゐ

たのです。ポート・ビールの第一波でした。マルクローンはその時一人静かにスコッチ・ウィスキーを開けて脱出の祝杯を挙げてみました。そして勤務中の兵隊に「ちよつと飲め」と勧め、相手が飲むのを見て満足気でした。さういふ記者が前線にはゐたのです。

日本の場合には「新聞社員」に過ぎません。四十歳になつたら原稿なんてもう書かない。人の原稿を直したり、人事管理をしたり、経営に参加したり、編集局長などになると、もうほとんど原稿なんか見もしない、経営者です。それでジャーナリストと言へますか。

何年か前の夏の高校野球で、ある高校が集団食中毒にかかつたことがある。試合も勿論ボロ負けに負けた。その時何人かの記者が宿舎へ取材に行つたら、主催してゐる新聞社の女の子が頑張つてゐて「これはうちの主催事業ですから、取材はお断りします」と追ひ返したといふのです。かういふ女性記者に、いつペンマーフィ先生の講義に出てもらひたいと思ひます。言論の自由、報道の自由、そしてそれに伴ふ義務が全く欠けてゐる。日本のジャーナリズムは間違つてゐる方へ進んでゐるとしか思へません。

最後に、日本のマスコミのなかで絶対に信用していいものを三つだけ挙げます。一つは株の欄です。新日鉄の株が昨日より三円上つた。これは絶対間違ひない。しかし株価予測は間違ひだらけです。二つ目に野球のインニングスコア。これも間違ひない。しかし巨人が勝つたときと負けたときの新聞をくらべて見ると、ジャイアンツが負けたときの読売は悲壯なあ

り得ない奇跡によつて負けたやうに書いてゐるけれど、そんなことはない、弱いから負けただけですね。三つ目はラジオ第二放送の気象通報です。石巻では北東の風で晴、これも間違ひない。ただ天気予報は間違ひだらけなのはご存じの通りです。いずれにせよ信用できるものはその程度しかないのです。

このやうな間違ひだらけのマスコミにどう対処すればいいのか。大人の知恵をつける以外に方法はありません。ラジオもテレビも明日は天気だと伝えてゐるが、あの山にあんな風にモヤがかかつてゐると、俺の経験から言へば雨かも知れない、と思ふのが大人の判断です。要は世間智によつてマスコミの報道をパラフレーズして解釈してみるといふことが大事なのです。子供は「だつてテレビが言つてたもん」で通用するでせう。しかし大人はさうであつてはいけません。これが心得です。

質疑応答

《問》 マスコミの中に「元号を使はない」といふ裏の協定のやうなものがあるのでせうか。

《答》 これは皇室の記事に敬語を使はなくなつたことと関連してゐると思ひます。「天皇が田

植ゑをした」と表現します。調べてみると二十年前には同じ新聞社が敬語をつかつてゐる。その間に憲法が変つた訳でもないのに。夏の高校野球の開会の挨拶も西暦で言つてゐます。

国際問題は別として、自国の元号で表すのが当然だと思ひます。私が住んでゐたタイでは仏暦を使つてゐました。でも排他的ではない。民族の誇りなのです。その誇りを捨てて、世界中が使つてゐるから我々もといふ傾向は、戦前の日本のインテリが国際共産主義運動に深く共鳴したのと同じ心理ぢやないでせうか。幻です。

《問》金日成が亡くなる十日ぐらゐる前に、大分の地方紙に平壤の広場で金日成に反対運動した将校十数名が家族の前で死刑になつたといふ記事が出ました。しかしテレビも大新聞も雑誌もこれを取り上げないのが残念なのですが。

《答》私はその処刑のニュースは知りませんでした。なぜニュースにならなかつたかといふと、毎日当たり前のやうに行なはれてゐるからぢやないでせうか。ひどいものです、あの全体主義がやつたことは。ただ、一番危険なのは我々が全体主義を敵だと認識してゐないことです。

ホワイトハウスでイスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長が握手したときがあ

りました。去年のことです。その時にラビンが挨拶で述べた言葉のなかに寸鉄人を刺すやうな一句があった。「平和には必ず敵がある」といふ言葉です。この世のなかは小学校のホームルームぢやないのです。平和を守らうとしたら、一方でそれを許さない敵があることをしつかり認識しておかなければいけない。敵とは全体主義です。しかし、日本は全体主義にべつたり擦り寄るところがあります。中国に対してもさうです。

昭和五十五年五月二十七日のある新聞の夕刊の記事にかういふのがありました。

「風の渡る素晴らしい五月の空の下、中国華国鋒首相は二十七日、ゆつたりとした足取りで羽田空港に降り立った。人民服の随員らが続くが、夫人たちの姿はない。一行たちも迎える側も肩肘張ったところのないさり気なさとかく自然な和やかさが漂う。長い



歳月と両国の多くの人々の苦勞の積み重ねがようやく生み出したさきり気なさである。タラップに姿を見せた薄いグレーの人民服姿の華首相は一瞬立ち止まり、青空を背に歓迎の人達にゆっくりと手を振った。「春の海のように」と大平首相が讚えた穏やかな笑みが顔いっぱい広がる」

飛行機からゆつくり降りてきて手を振つて笑つただけの話を、よくもこれだけ褒められるものです。しかもこれは嘘ぢやないのです。嘘ぢやないけれど読者によつぽど偉い人だといふ印象を与へる。注意しないといけません。華国鋒といふのは公安部長だった。警察と秘密警察スパイの元締めだった。それが毛沢東の跡を継いだからといって日本のある新聞はこんなにもヨイシヨシしたのです。

全体主義者であるイラクのサダム・フセインは、クエートを取つて「これはイラクの二十番目の州だ」と言ひ張つた。それならどうしてイラクはクエートに大使館を置いてみたのかと言ひたい。無茶苦茶ですよ。

しかし、あれだけハイテク兵器が活躍した戦争でも地上戦をしなければ終らなかつた。あの湾岸戦争の現場を私は昭和三十九年に車で通つたことがあります。砂嵐でひどい目にあつた。地上最低の戦場です。だから朝鮮半島で同じやうなことが起つたら、やはり最後には地上戦があるのぢやないでせうか。

このやうな世界的なならず者、平和の敵を懲らしめるために、世界で最低の貧乏国バンクラデシュでさへ歩兵と工兵二千人をサウジアラビアに派遣しました。セネガル、これも貧乏ですが兵五百人。ニジェールは兵四八〇人。オランダはフリゲート艦二隻と駆逐艦一隻。ドイツは空軍機十八機をトルコに、またイギリス軍に爆弾を提供した。デンマークは船団護送用の高速艇一隻。ノルウェーは沿岸警備隊をデンマークと協力して派遣し、ガスマスクや空対空ミサイルを提供した。ポーランドは野戦病院部隊と病院船。チェコは兵二百人。ホンジュラスは兵百五十人を送つてゐます。日本は百三十億ドルの錢だけだった。当時社会党は村山富市さんの発案で牛歩戦術とか議員辞職とかで抵抗しました。そのとき「我々は平和勢力だから」と言つたのです。しかし平和には必ず敵がある。敵を抑へるためには我々も平和を守るために死ぬほどの意志と覚悟が必要になる場合があるのです。

ただ、日本は戦争が終はつた後で掃海部隊を派遣しました。これは非常に役立つたことを、私は海員組合の新聞を読んで知りました。

何もしないで置いて平和なときに「平和だ、平和だ」と言ふほど気楽なことはありません。平和憲法を守つて、武装を放棄したから繁栄が築けたといふ人は意外に多い。日本が武装を放棄して存在した日なんてマッカーサーが厚木に降り立つた日から現在まで一日もない。ずーっと日米安保条約によつて守られてゐるのです。それを知らないで、あるいは知らんふ

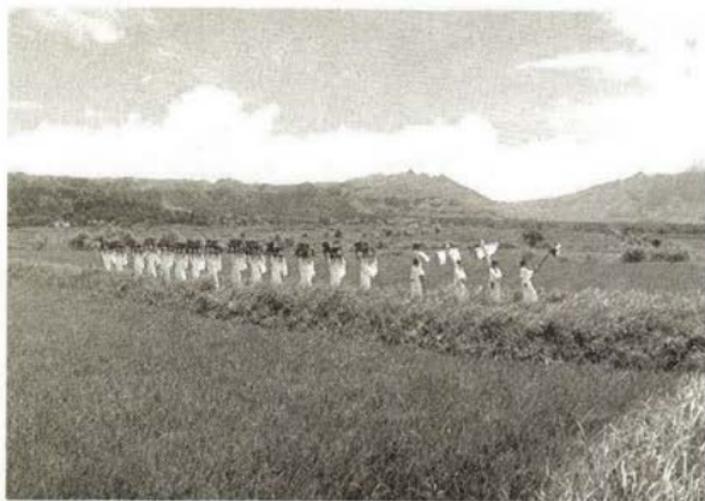
りをして「我々は平和を愛して戦争を放棄したからこの繁栄があつた」とは、をこがましいにも程があります。

新聞は病んでゐる！

—「肉眼」を^く削り貫^ぬかれた新聞—

神奈川県立厚木南高等学校教諭

山内健生



おんだ祭り（阿蘇神社）

毎日新聞が仕掛けた永野法相辞任

「途方もない」南京事件

大新聞が真相を究明しようとしなない理由

「戦争責罪周知徹底計画」と新聞

誤報を切掛けにフリーパスとなった「侵略」と「大虐殺」

毎日新聞が仕掛けた永野法相辞任

去る五月（平成六年）、発足したばかりの羽田内閣の永野茂門法相が自らの発言の責任をとつて辞任するといふ出来事がありました。それは五月四日付の毎日新聞の一面中段に「南京大虐殺 でっち上げ」といふ見出しで報じられたインタビュの記事からでした。見出しは横書きで縦組に直したら五段抜きに相当するほどの大きさでしたが、見出しに比べて記事が四十九行と短いのが印象的でした。

「永野茂門法相は三日までに、毎日新聞との会見に応じ……」で始まるこの記事は、実は六日前の四月二十八日に行はれた単独インタビュにもとづくもので、不思議なことに、直後には報道されませんでした。そして、翌五月五日付の紙面（二面）には「アジアの隣国 反発」の記事が載つてゐて、それと並んで「永野法相発言の要旨」が掲載されるといふ奇妙な展開を見せました。

その発言要旨を読むと、例へば「私は南京事件というのは、あれ、でっち上げだと思う。（略）いずれにせよ、そういうことは戦争に伴う悪であり、これは『絶対悪い』というのはその通りだ。それを侵略的行為と言うなら、それはまあ言えるが、日本は、そこを日本領土に

しようとしたものでもないし……」云々とあつて、前日付の大きな見出しから受ける印象とは大分違つてゐました。

一週間近い報道の遅れといひ、センサーショナル？な見出しといひ、またその翌日になつて比較的詳しい発言内容を報道するやり方といひ、どことなく不自然な作為的な臭ひが感じられたのですが、この合宿教室に招聘した徳岡孝夫先生（元・毎日新聞論説委員）が「講義資料」の中に「毎日新聞が仕掛けた永野茂門法相の辞任」とお書きになつてゐるのを拝見して、やはり報道界の内情に通じたお方にはお見通しだったんだなあと納得させられました。それと同時にあらためて新聞に対する怒りと、失望を覚えた次第でした。言論の自由を弄んで情報を操作するとは、本当に「新聞は病んでゐる！」としか言ひやうがありません。

「途方もない」南京事件

ここで「南京事件」について詳述する余裕はありません。ただ、いかにわが国の新聞が歪んでゐるかを明らかにするために必要な諸点について少しお話をいたします。（詳しくは田中正明著『南京事件の総括』謙光社、阿羅健一著『聞き書き・南京事件』図書出版社、鈴木明著『南京大虐殺』のまぼろし』文春文庫などをぜひお読みください）。



昭和十二年十二月十三日、南京市を攻略占領したわが日本軍が、その後の六週間にわたり「三十四万人」の一般人・捕虜を殺害したといふことを、その約九年後に中華民国（国民党政府）側から指摘されたことから問題化した途方もない事件が「南京事件」です。即ち、昭和二十一年八月二十九日、わが国の戦争指導者を裁かうとして開かれてゐた極東国際軍事裁判（東京裁判）の法廷に一通の報告書が提出されたのです。題して「南京地方法院檢察処敵人罪行調査報告書」といふもので、昭和二十年十一月から翌年二月までの間、国民党政府が蒐集した証言をまとめたものでした（極東国際軍事裁判が「法の支配」を冒瀆した復讐劇にすぎないことは、R・H・マイニア著「勝者の裁き」福村出版、清瀬一郎著「秘録東京裁判」中公文庫、富士信夫著「私の見た東京裁判（上）（下）」講談社学術文庫などで述べられています。今日の世界で東京

裁判の法的正当性を認める国際法学者はまづをりません。

この報告書の中には兵士や老若男女など「五万七千四百十八人」が殺されるのを目撃したといふ一警官の証言も入つてゐました。足を砲弾で負傷した一個人が計数の機器も使はずに万単位の人数を一桁の端数まで数へ上げたといふのですから驚くべきことです。一日二十四時間は千四百四十分ですが、秒に直すと八万六千四百秒となります。「五万七千四百十八」を一秒ごとにカウントすると正味十六時間かかります。「五万七千四百十八人」が餓死・凍死に追ひ込まれ、あるいは機銃で掃射され石油で焼かれるのを、一体、何日かかつて目撃し数へ上げたのでせうか。

六週間で「三十四万人」ですから、一日平均で八千人強となりますが、大人しく殺されるのをまつてゐたのでせうか。南京陥落後、一般住民の避難区に逃げ込んで奪つた平服を着用してゐた兵や便衣兵（あらかじめ平服を着て一般人を装つてゐる）の摘出は当然に行はれませんでした。それをしないことには落ち落ち街へも出られません。あるいはその巻き添へを喰つた住民もゐたと思はれますが、（便衣兵は戦時国際法違反）、日本側に「大虐殺」を敢行する理由も暇も余力もありません。

一体全体、「三十四万」もの遺体をどう始末したのでせうか。紅卍字会・崇善堂といふ二つの慈善団体が「十五万五千三百余体」を埋葬したと前記の報告書に記され、（前者・四万三千七

十一体、後者・十一万二千三百六十六体)この数字がそのまま東京裁判の判決に採用されたのですが、その後の研究調査によつて後者は葬儀や埋葬事業に携はつてゐないことが明らかになりましたし、前者のあげる数字についても研究者は信憑性を欠くものと指摘してゐます。

そもそも南京は当時の中華民国の首都でしたから欧米人もゐました。さらに、首都の攻防といふことで国際的にも注視されてゐました。

一般住民を保護するために設定された安全区(避難区、約三・八平方キロ、南京総面積の八分の二)を管理した十五人のメンバーから成る国際委員会(ドイツ三人、イギリス四人、アメリカ七人、デンマーク一人)のジョン・H・D・ラーベ委員長(ドイツ)は「砲兵隊が安全区を攻撃しなかつた美拳」と「民間人の援護に対する将来の計画につき連絡がとり得るやうになつたこと」について感謝の書簡を送つて来てゐたのです(十二月十四日付)。また南京陥落から三ヵ月後の昭和十三年三月二十七日なされた国際連盟決議は、「シナ独立と領土保全のための英雄的な奮闘にたいしてシナに同情の意を表する」として「毒ガスの使用」を牽制する文言はあつても、南京については全く触れてゐません。また同年七月七日の支那事変一周年の日に発せられた蒋介石の「友好国への声明」と題する文書には「日本人の残酷さ」を例示して「広東における空襲」を挙げてはゐますが、ここにも南京が出て来ません。

右の国際連盟決議と蒋介石声明を翻訳した東中野修道亜大教授は、当時の各種の外国語史

料をも検証した結果、「南京大虐殺は作られた事件である」と結論づけてみます（「作られた事件・南京大虐殺」、「文武新論」二十二号〜二十八号連載）。

宣戦布告のないまま、日支間で実際的な交戦状態が続き、人口百万（平時）の南京市が戦闘区域に入ったのですから、今日の平和的感覚では直ちに理解できがたいこともあつたと思はれます。不幸にして、そこが生命の遣り取りをする戦闘地域に入つてゐたといふことを忘れてはならないでせう。しかも、南京防衛軍の唐生智司令官は降伏勧告に応ぜずに秘かに遁走し、そのため南京市は無政府状態におかれ指揮官を失つた兵員は避難区の住民の中に潜り込んだりしてゐたのです。

しかし、「六週間に三十四万人を殺害した」といふことは物理的にもあり得ないことです。（この数字はその後の共産党政府にも受け継がれ、今日では「三十万人」「四十万人」「五十万人」「数十万人」などと一定してゐないが、脹む傾向にある。）当時の南京の人口は二十万人にまで減少してゐました。そして陥落の一月後には逆に二十五万人に増加してゐるのです。血腥い地獄のやうな虐殺が横行してゐる街に住民が帰還することなどどう考へてもあり得るはずがありません。

東京裁判の判決を見ますと、ある箇所では犠牲者を「十二万七千人」としてゐるかと思ふと、「十万人以上」となつてゐる所もあり、さらに「二十万人以上」と記してゐる場合もある

といった具合で、杜撰な軍事裁判に似付かほしいといふべきでせうが、南京事件の責任を問はれた中支那派遣軍司令官の松井石根大將は「部下の監視を怠つたため『十万人以上』の犠牲者を出すことになつた」として絞首刑に処せられたのです。ただ、ここで意を留めるべきは、あの復讐劇に等しい軍事裁判（東京裁判）においてさへ「南京事件は計画的・組織的なものでない」（上官の監督不行き届き）としたことです。

大新聞が真相を究明しようとしぬ理由

要するに今日「三十四万人」説には毎日新聞でさへ懐疑的です。永野法相の辞任に向けて火を点けた五月四日付の毎日新聞の記事の中にも「中国側発表の『三十万人以上』に対して、組織的虐殺を否定する説もある」とあつて、いかにも客観性を装つてゐます。しかし、カッコ抜きで「南京大虐殺」を次のやうに紹介してゐるから始末が悪いのです。——南京大虐殺は一九三七年十二月、旧日本軍が当時の中国の首都・南京を攻略、占領した際、市民や捕虜を大量に虐殺した事件——。「大量」とは一体、何人でせうか。卑怯にも自らは具体的な数字を挙げずに逃げてゐますが、「三十万人以上」の主張に結局は異を唱へてゐませんから、読者に向かつては「三十万人以上」を肯定する結果になつてゐます。ここが新聞の巧妙なと

ころです。

ちなみに永野法相発言に関する三大紙の社説（五月七日付）を抜き書きしてみませう。

毎日新聞「…まして南京大虐殺にいたっては、原因・態様に諸説はあるものの…まずは

羽田首相に問いたい。…南京大虐殺は認めるのかどうか。」

朝日新聞「…南京事件は…中国の人たちが大勢虐殺された事件である。…犠牲者の数についてはいろいろな説があるにしても、旧日本軍による大虐殺があったことは、否定しようのない史実だ。」

読売新聞「…確かに、いわゆる南京大虐殺については、犠牲者数や組織的行為だったかをめぐって諸説があるし、論争もある。だが、残虐行為があったことは事実だ」

私はこれらの社説を読んでゐて怪訝な思ひに襲はれました。各紙とも「諸説」「いろいろな説」があるとしながら、どうして自ら真相究明に立ち上がらないのだらうかといふことでした。自国の閣僚の首が跳ぶかも知れない事態に対して（この際は自ら辞任劇を演出して自虐的快

感に酔つてゐた？、「諸説があるから、この機会に徹底した検証を試みるべきだ」となるのが自然の話の流れのほうですが、「諸説があるものの、大虐殺・残虐行為があつたことは事実だ」とは論理的にもおかしいことです。言論機関としては自殺行為にも等しい漫画的な社説です。これらの社説には或る躊躇^{ためら}ひがあるやうに私には思はれるのです。各紙は「三十四万人」を信じてはゐないと思ひます。近い将来、南京事件は「戦時国際法違反の便衣兵および平服を奪つて非戦闘員を装つた敗残兵」と「一般住民」とが混住する結果になつた都市での戦闘に付随して発生した不幸な出来事であつたといふことが明らかになるでせう（もうなつてゐます）。ながく南京事件を研究してゐる板倉由明氏は「決して特殊な事件や『史上かつてない』事件などではない、といふことです」と述べてゐます（『徹底検証・南京事件の真実』日本政策研究センター）。いま「諸説」があるとしておくことで、将来の、「南京大虐殺」が政治宣伝であつたといふことが行きわたつた際の、免罪符になるわけです。

しかし、自ら真相の究明に当たらうとはしません。真相を究明せよともいひません。それを言つてしまふと、これまでの自らの一面的報道を否定せざるを得なくなるからです。とくに朝日新聞と毎日新聞はこの十年余りの間、幾度となく「南京大虐殺」を裏づける供述書・目撃談・写真などを入手したとして大きく報道し、その都度、研究者や軍関係者からその虚構性が明らかにされてきましたが、無責任にも紙面の方は報道のしつ放しといふ状態です。

「訂正」記事を出したにしても当初の記事のスペースよりは遥かに短いものですし、全国版で大々的に報道しておきながら「訂正」は異を唱へた関係者が住む地方版に載せるといった策さへ弄するといふことです。

参考までに付け加へますと、作家であり衆議院議員でもある石原慎太郎氏が一九九〇年、アメリカ誌『プレーボーイ』のインタビュウの中で、南京事件は作り話で疑はしいと述べたところ、在米シナ人の強い抗議を受け、訴訟に持ち込むとまていはれたことがありました。氏はそれに応へて「いい機会だから両国政府に資金を出させて調査のための委員会をつくつて検証しよう」と提案したところ、それつきり抗議が途絶えたといふことです。(『南京大虐殺』の虚構・歴史の改竄を排す、「諸君」七月号)。

南京事件をめぐる真相の究明、徹底検証でわが国が失ふものは何もありません。しかしながら、首都・南京を攻略・占領したことはシナ人の自尊心をかなり傷つけたことと思ひます。作戦的に南京にまで兵を進めたことは良策だったのかどうかは、よくよく考へてみるべき課題ですが、そのことと「三十四万人」殺害の事実検証とは別問題です。当時、参謀本部は制令線を引いて南京までは追撃しない方針だったのですが、停戦協定が踏みにじられるなど現地派遣軍の高ぶつた気持ちと新聞各紙が醸成した「行け、行け」の国内の雰囲気押し切られて、南京へと兵を進めたのです。朝日新聞や毎日新聞(東京日日新聞)が一番戦意昂揚に貢

献したはずで、当時の紙面には陥落後の南京で「日支親善」の輪が広がつてゐることは写真入りで大々的に報道してゐますが、「虐殺」を臭はすやうな記事は見当たりません。戦争中は大いに戦意の昂揚を説き、敗戦後は戦争の悲惨さを強調するといふのが、わが国の新聞ですね。先学は「戦争の時に戦争を語り平和の時に平和を語ることほど易しいことはない」といひましたが、その時々で身過ぎ世過ぎのしやすい途を選んでゐるといふことです。一番、安易な道歩んでゐるわけです。

「南京大虐殺」について諸説があるといひながら、その真相の究明に立ち上がらうとしないのも、この延長上に位置づけられます。とくに各紙は北京への特派員駐在を認めてもらふために、いまの共産党政府の顔色を伺ひながら記事を書いてゐますから、「三十四万人」説を覆へすやうなことには腰が重くなるのです（産経新聞が「真相を究明せよ」と主張してゐるのは北京から特派員を追放されたまま復歸してゐないからでせう。昭和四十年代前半、特派員を追放されたへ朝日新聞を除く各紙はその後、「詫び」!?を入れて北京に復歸し、朝日新聞だけが追放されることなく特派員を駐在させ続けて今日に至つてゐます）。

「戦争責罪周知徹底計画」と新聞

ここでさらに留意すべきことは、「戦争の悲惨さ」を強調するといつても全ての戦争について同様に報道してゐるわけではなく、自国の過去については異常なまでに「過失」を論あげつらはうとしてゐることです。

完璧ならざる人間の過去の営みを倫理道德の立場から批判することは容易なことです。「かくすべし」「かくあるべし」とする倫理道德の目で、「かく行つた」人間の歴史を組上に上げることは、まことに幼稚で傲慢なことで、それこそ人間の至らなさを示すものですが、それでも各国のこれまでの戦争について、その悲惨さを強調するならまだしも、自国のそれについてのみ、時代状況も国際関係も抜きにして、いかにも罪深いことをしてきたかの如くに悲惨な現象面をピックアップしてきました。その結果、わが国の所謂世論は諸外国では全く通用しないほどに独善的な観念に染め上げられてしまひました。例を挙げませう。「徴兵制」の三文字から、日本人一般が思ひ描くイメージとわが国以外の国の人達が抱く観念とは、そこそ月とスッポンほどにも開きがあるといふことです。

わが国では旧時代の全く無価値の時代錯誤的「苦役」で、国民の自由を束縛する遺物であ

つて、排斥すべきもの以外の何ものでもないとするのが、最大公約数でせう。徴兵制を前向きに評価する意見などにもありません(例へば昭和五十五年八月の閣議決定。平成六年十一月三日発表の読売新聞「憲法改正案」)。しかし、他の国では、わが国と正反対で、一時的には国民の自由を拘束するけれども、それは当然の代償であり、厳粛なる今日的義務として徴兵制を肯定する意見がどう見ても多いのです。アメリカのやうに徴兵制を停止してゐる場合であっても、「苦役」扱ひすることなど絶対にあり得ません。

また、ある小説家は若き日に「防大生はほくらの世代にとつて恥辱である」と書きましたが、自国の軍隊を軽蔑・揶揄することが自己の良心の証であるかのような錯覚的觀念が大手を振つて罷り通る国は、やはりわが国の他にはありません。

同じことを他国がやるのは構はないが、自国はやつてはいけない。現に世界各地で軍事衝突がくり返されてゐますし、国連のPKO部隊が襲撃に対して発砲して双方に死傷者が出たなどと新聞は淡々と報道してゐます。しかし、もしPKO部隊に派遣されてゐる自衛隊が襲はれることがあつたとして、その際にわが方は発砲してはいけない、日本だけは軍事力を使つてはならない、それは世論が許さない、憲法違反だ、直ちに撤退せよ、などと大新聞が書き立てるだらうことは目に見えてゐます。わが国の新聞が戦争に伴ふ悲惨さや、過失面を、それも自国のことについてののみ、ことさらに強調するやうになつたのは、その時々で自ら演

出・醸成した時流に阿^おねるマス・メディアの無責任体質から来てゐるといふだけでは真相を把握することは無理でせう。そこには敗戦後の被占領期（主権喪失期）に敷かれた巧妙なる占領軍による情報統制の残滓が色濃く影を落としてゐるからです。

「大東亜戦争」といふ用語の使用が占領軍命令で禁止された（昭和二十年十二月十五日、日本政府への覚書）ことが象徴的に物語つてゐるやうに、敗戦後、わが国の報道・出版界は厳しい検閲体制の下に組み込まれ、「占領軍側から見た真実」に反する情報はニュースや刊行物から除外されました。例へば検閲にひつかかつて削除する場合も「訂正ハ常ニ必ず製作ノ組直シヲ以テナスベク、絶対ニ削除箇所インキニテ抹消シ、余白トシテ残シ、或ハソノ他ノ方法ヲ以テナスベカラズ」といつた具合で、検閲の存在自体を読者にわからないやうに訂正せよといふことになつてゐたのです（日本における太平洋陸軍民間検閲基本計画」第二次改訂版に基づく出版社への通達）。この結果、「被検閲者は、検閲者に接触した瞬間に検閲の存在を秘匿する義務を課せられて、否応なく闇を成立させている価値観を共有させられてしまふ」、そして「検閲の存在をあくまで秘匿し尽くすという默契に関するかぎり、被検閲者はたちどころに検閲者との緊密な協力関係に組み入れられてしまふ」「一種の共犯関係」に入つてしまつたのです（江藤淳著「閉ざされた言語空間——占領軍の検閲と戦後日本——」文春文庫）。

かうした占領軍の検閲の狙ひは「いわば日本人にわれとわが眼を剝^くり貫^かせ、肉眼のかわ

りにアメリカ製の義眼を嵌め込むことであつた」のです(前掲書)。そして、もつと大きくは占領軍最高司令官——参謀長——副参謀長ラインの下にあつて、検閲を担当した「民間情報教育局」が展開したWar Guilt Information Programに拠るものでした。このプログラムを文芸評論家(慶大教授)の江藤淳氏は「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画」と訳してゐますし、明星大教授(東大名誉教授)の小堀桂一郎氏は「戦争責罪周知徹底計画」と訳してゐます。「南京大虐殺」は採り上げても、広島・長崎への原爆投下、京浜・阪神・中京地区をはじめ全国の九八市に及んだ無差別爆撃等々の連合国(米国)側の蛮行を見逃した「東京裁判」も、このプログラムの範疇に入るのである。

そして、占領軍による検閲の存在を秘匿するといふ「共犯関係」は今も続いてゐます。新聞は自らが検閲下におかれたことを公言したことはなく、太平洋戦争を語ることはあつても大東亜戦争を語ることもありません。「占領軍から見た真実」を語るには「太平洋戦争」がまことに相応しいはずですが、日本人の目(肉眼)でわれわれの父や祖父の時代を回顧し語る時に、「太平洋戦争」では極めて不適切です。「太平洋戦争」に登場する日本人は敗れるべくして敗れた滑稽で、あはれな連合国軍の引き立て役にすぎません。連合国軍の前に立ちはだかつた「不正義の人間集団」になつてしまひます。

現在のやうに新聞が「太平洋戦争」なる用語で自国の戦争を語つてゐる限りは、自ら「南

「京事件」の真相究明に立ち上がることはないでせう。

誤報を切掛けにフリーパスとなつた「侵略」と「大虐殺」

新聞が躊躇^{ためら}ひがちに「諸説がある」などと将来を見通して逃げ口上を用意してゐる中で、「いろいろな説がある」では教材になりませんから、教科書の場合は断定的な筆運びになつてゐます。例へば次の如くです。

〈日中戦争〉：戦線はただちに華北から上海へも飛び火し、日本軍は国民政府の首都であつた南京を占領した^②。

（欄外注）「^②南京占領にあつて日本軍は、非戦闘員を含めて多数の中国人を殺害し、略奪・放火・暴行をおこなつた。この蛮行は南京大虐殺として国際的に非難をうけた。また戦後の極東軍事裁判では、事件の被害者数を二十万以上として、その責任をきびしく追及された」（『精選日本史B』第一学習社）

〈日本軍の南京占領〉…この間に大量の捕虜や市民を虐殺したのをはじめ、婦女への暴行・放火・略奪など残虐行為をくりかえした(南京大虐殺)③。

(欄外注)「③南京大虐殺は、南京にとどまっていた外国人によってはやくから海外では知られ、『南京アトロシィーズ』として世界の非難をあびたが、当時日本国民にはいっさい知らされなかった」(『世界史A』一橋出版)

南京事件がおしなべて教科書に登場するやうになつたのは、昭和五十七年の教科書騒動「検定結果誤報事件」以降のことです。この騒ぎは、その年の教科書検定において申請本に記述されてゐた「侵略」の字句を全て「進出」に書き換えさせたところが国の新聞・テレビ・ラジオが一斉に報道したこと(六月二十六日)から始まりました。一ヶ月後に、中華人民共和国政府が「最近、日本の新聞が文部省の歴史教科書検定について多く報道した。これから判断すると、検定の過程で、日本軍国主義が中国を侵略した事実について改竄が行われている」云々の抗議書を提出してきたのですが(続いて韓国政府も)、これが全くの誤報だったので(細川発言にみられるやうに「侵略」なる語が国内で、しかも自国の行為についてのみ安易に使はれてゐますが、「侵略」の定義がなされなのまま、東京裁判では aggressive war を「侵略戦争」と訳しました。aggression は「挑発を受けなく攻撃」 unprovoked attack の意で、日本語では「進出」「侵攻」

「先攻」とするのが正しい訳であると青学大教授の佐藤和男氏は指摘してゐます。そこでは違法性の有無——犯罪性ではない——が問題とされるといふことです（『憲法九条・侵略戦争・東京裁判』原書房）。

しかし、当時のマス・メディアは悪いのは文部省の検定である！とばかりに挙つて自国政府を攻撃したため、それにたぢろいだ鈴木内閣は「アジアの近隣諸国との友好親善を進める上で、これらの批判に十分耳を傾け：検定基準を改める」旨を官房長官談話で明らかにして（八月二十六日）、それまで南京事件を教科書に記述する際は必ず「混乱の中で発生した事件」である旨を書き添へるやう執筆者側に求めてきたのですが、これも注文をつけないといふことになりました。その結果が右の二例に見られるやうな一面的な記述が罷り通ることになったのです（「侵略」についても検定意見をつけないこととなりました）。この騒動の中で遅ればせながら誤報を明確に認めたのは産経新聞のみでした（九月七日付）。一面左上に「読者に深くお詫びします」「侵略―進出の書き替えは無かった」といふ五段抜きの見出しの訂正記事が揚げられました。この訂正記事によつて官房長官談話以降も何の彼のと言つてゐた中華人民共和國政府は沈黙したのでした。

朝日新聞のごときは九年後の社説の中においてさへ「アジア諸国の（対日）不信の底には：教科書検定で侵略を進出などと言ひ換えさせたりしたこと」があるからだ（平成三年十一月

四日付)などと書いてゐます。もつとも、産経新聞の訂正記事から十日余り後の昭和五十七年九月十九日、朝日新聞は「『侵略↓進出』今回はなし」といふ訂正記事らしきものを「読者と朝日新聞」欄に掲げました。しかし、そのトーンは「問題は文部省の検定姿勢に」といふもので自己の誤報責任を棚上げにして逆に文部省を批判してゐます。自らが誤報したことの責任を感じてゐませんから、読者に広く誤報の事実が伝はるはずありません。第一、連日にわたる誤報に費やされた字数・紙面とただ一回の「訂正記事らしきもの」に割かれたスペース(一七〇行余)とは比べものになりません。

いくら誤報から始まつたとはいつても、対外的に約束したために、翌昭和五十八年六月、北京とソウルのわが国大使館の担当者は、それぞれの外務当局に向いて此度の検定はかうなりましたと通告してゐるのです。自国民の使ふ教科書内容をそれに先立つて外国政府に説明して「了解」を得てゐるわけです。相互に通告し合ふのならまだしも、わが国だけが一方的に他国の意向を窺ふやうな事になつてしまつたのです。現在も続いてゐるかどうかはわかりませんが、一回であつてもさういふ事実があつたといふことはまことに屈辱的で残念なことです。この誤報騒ぎ以降、わが文部省は歴史教科書の自主編成が出来なくなつてゐるといふのが事の真相です。

このやうにわが政府の失態は目を覆ふばかりですが、これらを厳正に批判すべき新聞がま

た輪を掛けて墮落してゐるのです。アメリカ合衆国建国の父でのちに第三代大統領となつたジェファースンが「新聞のない政府と政府のない新聞とどちらを選ぶかといへば、間違ひなく後者を選ぶ」と語つたことは有名な話です。新聞といふ「自由なメディア」によつて政治の誤りなきを期すといふことでせうが、わが国の新聞が「自由なメディア」からかけ離れた存在となつてゐることは以上で少しはおわかりいただけたことと思ひます（産経新聞が少し趣を異にしてゐますが）。

○
平成七年はポツダム宣言の受諾から五十年となります。いま国内に、戦後これまでわが国は戦争の後始末をきちんとして来なかつたかのごとき誤つた観念が広がりがつてあります。これも朝日新聞や毎日新聞がこの数年間ドイツ（全く次元を異にする）に比べてわが国は道義的に劣るなどと意図的にキャンペーンをくり返してきた結果です。発行部数一〇〇〇万部突破を誇る読売新聞も目立たないやうですが、その後追ひの記事（解説）を掲げて誤解の拡大に一役買つてゐます。

戦争は相手国との平和条約によつて法的に終結します。わが国は連合五十五ヶ国の全てと条約（国交回復協定を含む）を結び、相互の合意のうへで必要な場合は賠償金を支払つて来ました。だからこそ、第二次世界大戦の末期に連合側側の国際組織として発足した国際連合

への加盟が満場一致で認められたのです(昭和三十一年十二月十八日)。

むろん戦後の国際政治の微妙な変遷の狭間で零こぼれたままの問題が全くないとはいひませんが(例へば、国交がないために請求権に関する協定が結ばれてゐない台湾の「元日本軍人軍属」への軍事郵便貯金の払ひ戻し)、わが国に対して、表向き「戦争中」のことについて申し入れの出来る国は一国もありません。しかしながら、朝日新聞や毎日新聞などのミスリードによつて、これまでの外交的経緯を一切無視するかのやうな国会決議でも通らうものなら、では具体的にどうしてくれますかとさらに攻め込まれることは必定です。すでに朝日新聞や毎日新聞は呼び込み役を買つてゐますね。「新聞は病んでゐる!」と私が判断するのは誇張でも大袈裟でもないのです。

新聞が「義眼」にサヨナラして血の通ふ「肉眼」を取り戻す日はいつなのでせうか。

一 神教的価値観と日本人

— 日本における超越者の思想の系譜 —

明星大学教授・東京大学名誉教授

小堀桂一郎



阿蘇神社

明治・大正期における個人主義思想の確立

——福澤、漱石、鷗外、和辻を通して——

敗戦による価値観の動揺

一 神教を持つアングロサクソンの強さ

文化防衛

「天」の思想

〈質疑応答〉

明治・大正期における個人主義思想の確立

——福澤、漱石、鷗外、和辻を通して——

去年参加した方はご記憶だらうと思ひますけれども、村松剛先生も何度かこの合宿にお出でになり、昨年もご出講なさいました。個人的にも親しく敬愛してゐた方ですが、ご承知のやうに、本年大変残念にもお亡くなりになりました。

その村松先生が筑波大学の退官記念講義として、「自己本位のこと」といふ表題で講義をされたのであります。それが村松先生の遺著になりました『西欧との対決』といふ書物に収録されてをります。

現代人の三島由紀夫さん、明治時代からは漱石、鷗外のやうな作家達を取り上げて論じた一書の標題が、『西欧との対決』といふ題名になつたといふことがそもそも暗示的であります。その中の、「自己本位のこと」について、これを導入部に使はせていただかうと思ひます。夏目漱石に有名な『私の個人主義』といふ講演の文章があります。漱石四十九歳で最晩年の作ですね。これは大正四年三月に学習院で講義されました。この『私の個人主義』は、漱石全集の中でも、講演の部分で最も有名なものの一つだらうと思ひます。

この漱石の『私の個人主義』は前半と後半に分かれてをり、村松先生は特に、前半の部分の「自己本位」といふところを取り上げてお話になつてをります。お読みになつた方には解説不要かと思ひますけれども、漱石は英文学者として、元来、自分は漢学の素養を積んで、かうしたものゝが文学だと思つてゐた。ところが英文学の研究に進んでみると、自分がこれまで考へてゐた文学とはまるで違つたものにぶつかつてしまふ。そしてはるばるロンドンまで出かけて行つて英文学の研究に勤しんだけれども、英文学の世界に深く入れれば入るほど文学といふものが分からなくなつてしまふといふことを述べてゐます。

特に、文学研究の際、どの作品がいかに優れてゐるか、どの作品はどこがいけないのか、といったやうな価値評価の尺度をどこに置くか、といふことについて英文学の伝統には一応はスタンダードがあると考へられる。しかし、それでは、外国人として、特に漢学の素養を積んできた漱石が英文学を評価する際に、ただ、専ら本国の英文学者の設けてゐる価値によつて判断するより仕方がないのか。それでは日本人の文学研究はいつまで経つても絶対にイギリス人の文学研究に適ふはずがないのだ、といふことに思ひ至るわけです。そして、これではいくら力を費やしても無駄だ、いつたい自分の文学の研究の基準をどこに置いたらいいのか、といふことをロンドンで深く考へるのです。その部分を漱石の『私の個人主義』から直接読んでみますと、



「私は下宿の一間の中で考へました。つまらないと思ひました。いくら書物を読んでも腹のたしにはならないのだと諦めました。同時に、何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるよりほかに、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。今までは、全く他人本位で、根のない萍のやうに、そこいらをでたらめに漂つてゐたから駄目であつたといふことに漸く気がついたのです。私のここに他人本位といふのは、自分の酒を人に飲んで貰つて、後からその品評を聴いて、それを理が非でもさうだとしてしまふ、いはゆる人真似を指すのです。」

と言つてをります。そして漱石はさういふ苦悩を経たあげく、ロンドンで神経衰弱にかつた。「もう夏目は帰国させるほかない」と、同じ時期にロンドンに滞在してゐた同僚が文部省に電報を打つた、といふエピソードも知られてゐます。

漱石は文学研究における自己本位といふことを発見したのであります。英文学の研究伝統に対して、自己本位といふ立場を主張することは、日本の文化伝統を身に付けたままで――漱石個人に即して言へば、少年時代から身につけてゐた漢学の素養を生かしたままで――その知識と感性を以て英文学に相對する、どこまでも自分の感性、自分の判断力で考へることだといふことに気が付いたと言つてゐるわけです。

これは文学研究者としての漱石の自伝的な回想として大変重要な部分です。本来の個人主義の問題は、講演の後半において展開されますが、これが実に立派な個人主義論になつてをります。

ところで個人の尊嚴の概念が、国民倫理や国民思想の大きなテーマとなつたきつかけは、恐らく明治五年に出版された福澤諭吉の『学問のすすめ』だらうと思ひます。昔は誰でも読んだもので、日本人の思想史における貴重な記録です。この『学問のすすめ』の冒頭は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」といふ有名なテーゼで始まります。福澤が説いたのは「生まれながらの人間には貴賤上下の區別は無いはずである。その由つて来るとこ

ろは、結局、学問するかしないかにあるのだ」といふことです。そして「一身独立して一国独立す」といふこれも大変有名な言葉ですが、これは「国民の一人一人が独立の人格を確立して、そのとき初めて国民全体が構成する国家といふものも独立を遂げることができる」といふ主張です。

つまり、この場合、個人と国家が極めて健康な形でつながつてをります。個人の存在と国家の存立との間に乖離がない。福澤の説く個人主義は、当時の「富国強兵」とか「殖産興業」といふ時代の標語とよく調和してをります。「国民に独立の気概が乏しければ、国民が国に背き国を売る危険の度合ひが益々多いのだ」と説いてをります。この福澤の説を裏返して言へば、「国民の自主独立の気概が旺盛であれば、それだけ国家に対する忠誠心もまた強固になるはずである」といふ、やや楽天的に響く公式であります。

これよりかなり遅れて、明治二十三年に教育勅語が出ますが、福澤の晩年に至つて彼の考へは「教育勅語の主旨に悖るものだ」といふ非難を浴びたことがあります。明治といふ時代は、国民が丸となつて、国際社会の重圧に対して結束しなくてはならない、さういふ非常に難しい時代でした。そのやうな時代の中でひたすら個人の独立を説くことは、「国家の大いなる方針に悖るものではないか」といふやうな非難を浴びたのです。

福澤も、多少そのことを気にしたと思ひますが、明治三十三年、これは丁度一九〇〇年で

一九世紀の最後の年ですが、福澤の思想を弟子達が纏めた『修身要領』を出して、その中で、やはり『学問のすすめ』以来の一貫した個人主義を揚言してゐます。その冒頭に、「心身の独立を全うし、自らの身を尊ぶ」と書き、これが自ら身を修める「修身」つまり教育を受けることの基本にあるのだといふこと述べてゐます。

それでは、個人と国家との関係をどう考へるのか。「福澤は少し個人を主張し過ぎるのではないか」といふ疑惑の声に答へまして、その『修身要領』のやや後の方に三箇条に互り個人と国家について以下のやうに述べてゐます。難しい文章ですが、一応読んでみませう。

「国あればかならず政府あり、政府は政令を行ひ、軍備を設け、一国の男女を保護して、其の身体、生命、財産、名誉、自由を侵害せしめざるを任務と為す。是を以て国民は軍事に服し国費を負担するの義務あり」（第二十二條）

といふ風に、結局、「軍事と国費」といふのですから、兵役の義務と納税の義務を説いてゐます。第二十三條では、

「軍事に服し国費を負担すれば、国の立法に参与し国費の用途を監督するは、国民の権利に

して又其義務なり」

といふことで、これは注目すべき事だと思ひます。納税者としての国民はただ税金を払ひさへすればいいといふ訳ではない。国家が自分たちの納めた税金をどのやうに使ふか、国民として監視する義務があると言つてをり、これは現代では更に重い意味を帯びてくる立派な見解です。税金といふものは、納めるだけで、それを国家がどう使はうと、一旦納めてしまへば我々はもう知つたことではないといふのが、どうも現在の日本ではないかと思ひます。次いで第二十四条では、

「日本国民は男女を問はず、国の独立自尊を維持するがためには、生命財産を賭して敵国と戦ふの義務あるを忘るべからず」

と指摘し、再度兵役の義務として「国民は国家を守る義務あり」といつた項目を特に立ててゐるわけです。明治三十三年にこれが出版され、漱石は同じ年にイギリスに留学します。従つて漱石がイギリスに留学して「自己本位の立場に立たなければ」と苦惱してゐた時に、日本における個人主義の思想はある程度 of 思想的訓練を経て、単なる自我の謳歌ではない、社

会的な要求に十分耐へられるやうな健全で強固な思想に成長してゐたと言つてよいと思ひます。

また村松さんは漱石の弟子の一人でありました和辻哲郎を取り上げてをります。漱石の『草枕』に大変有名な書き出しがあります。「人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒両隣りにちらちらする唯の人である」といふところですが、要するに、この世間といふのは人の作つた世であると言ふのです。この説を基盤として和辻さんは、「人間の学としての倫理学」といふ学問を建設された。一言で言ひますと、「人間は、人と人との間柄といふものがあつて初めて人間になるのであつて、人間の行為の善悪であるとか、或いは義務と責任とか道徳の問題とかは、すべて孤立した個人の意識に発する問題ではなくて、人と人との間柄に発する問題なのだ、これこそが倫理の問題なのである」と考へられて、そこに和辻さんは倫理学の基礎を置きました。

もう一人、自己本位の立場を貫いた近代人として、村松さんは鷗外を挙げてゐます。鷗外の場合の自己本位といふのは、「自然科学者、衛生学者としての職業倫理によつて培はれたものだ」と論じてをられます。

村松さんは言及されてをりませんが、鷗外の大正期の歴史小説を見ていきますと、明治天皇が亡くなられて、乃木將軍が後を追つて殉死されます。その殉死の問題に触発されて『興

津弥五右衛門の遺書』、それから『阿部一族』といふ殉死小説を立て続けに書きます。それからもう一つ、『佐橋甚五郎』といふ徳川時代の青年にしては珍しく自我の強い青年を主人公に取り上げて、この三つの作品を纏めて『意地』と題する書物を出してゐます。さらに続けて、武士町人を問はず近世史上の人物を主人公にしていくつか小説を書いてをりますが、題名だけ挙げておきますと、『ちいさんばあさん』、『安井夫人』、『最後の一句』などがあり大変著名です。

これらの作品の中に出てくる人物は、漱石が『私の個人主義』の中で使つてゐる公式を借りて申しますと、自分の個性を自由に發展させていく過程に幸福を見い出すといふ生き方が一方にあるとすれば、他方には是を抑制しようとする方向に働く社会的環境がある、その二つの力の拮抗・緊張に自己を投入して生きた人々だと考へてよろしいでせう。

およそ自我に対する他者といふ存在のあるかぎり、結局、人間はこの二つの極の間で揺れ動いてをり、晩年の鷗外の場合は、個性の自由な發展を自ら抑制する、これまでの文脈で言ひますと、自分の個人主義的な幸福の実現を断念するといふ方向に行動する人物を描いてゐるわけです。抑制することも自らの自由意志による選択である以上、個人主義的な生き方の立派な貫徹なのであります。

自我の自由な展開と伸張は、福澤以来個人主義の理念を約束する幸福の実現ではありません

が、そんなに簡単に幸福に繋がつてゐるわけではない。自我を抑制するところにもまた立派な生き方があるのだといふことも鷗外は知り尽くしてゐたやうです。鷗外の晩年の歴史小説に至つて、日本における個人主義の問題は非常に深みを増したと思ひます。

このやうに、福澤、漱石、鷗外、和辻などの代表的な人物を取り上げて検討すると、近代日本の個人主義倫理はすでに立派に樹立されてゐたと見ることが出来ます。日本人が日本人の立場から見事に個人主義の倫理を完成したのであり、福澤或いは漱石がイギリス人を模範として「近代的個人主義の確立」といふ課題に果敢に取り組み、生涯をかけて苦闘してきた、その努力は見事に結実したと言へるのです。

明治時代の「富国強兵」や「殖産興業」といふやうな標語は大変抽象的ですが、具体的に申せば、立憲君主制に基づく近代的な国民国家を建設することであり、安政の不平等条約を改正して国際社会における一等国の仲間入りをするものでした。この開国期の、明治維新以来の国家的な課題は外形上立派に果たされました。また、内面上の課題である「近代的個人主義の倫理」も外形的な近代化の達成と共に国民的規模において確立してゐたと思はれます。つまり、だいたい大正期に入つた頃には、近代化の課題は内外両面から見事に達成されたのだといふふうに見えてゐたわけです。

敗戦による価値観の動揺

ところが、大東亜戦争終結後に意外な展開が出てきます。ポツダム宣言を受諾することによつて極東国際軍事裁判が開かれます。連合国の裁判官達は、日本の戦時中の国政指導者達の「共同謀議による侵略行為」といふ一種の仮説を立て、その線に沿つてA級被告を裁かうとしました。けれども、その犯罪を追及していく過程で、誰がこの戦争を計画して実践に移したのか、どうもその責任の所在がはつきり見えて来ない、といふことが起こりました。

また、BC級被告の捕虜虐待といふ犯罪についても、責任の所在問題が出てきたのです。極東国際軍事裁判所条令に「人道に反する犯罪」といふのがあり、連合国側は「ある一つの行為が人道に反するか否かの判断は、個人においてつくはずだ」といふ論理で犯罪を追及したのです。しかし、捕虜虐待といへども彼らは公務員として上官の命令に忠実に従つたのであり、その命令に反抗は出来なかつた。もしその上官の命令に反抗すれば、抗命罪が成立し、日本の国内法における犯罪者になつたであらうといふジレンマが露あらはに見えてきたのです。このやうにして、戦争犯罪裁判法廷は日本と欧米の文化や道徳体系の真つ向からの対決といふ様相を呈したのです。

連合側はあくまでも個人の責任倫理を論拠に被告を追及します。その際、「人間の判断に於いて人間の生命を奪ふ権利はない、それをあへてするのは神の權威に対する人間の侵害である」といふ大變宗教的な議論を法廷に持ち込むわけです。「人間個人の存在といふのは唯一の神の意志によつて規定されてゐる。その人間を生かしたり殺したりする責任は元々一なる神に対して負ふものであり、人間が是を判断することは出来ない」と考へるわけです。つまり、個人の道徳的な進退の最終的な責任は誰に、如何なるものによつて基礎づけたいかといふ問題なのです。

恰度ちやうど東京裁判が結審したのとほぼ同じ頃、昭和二十三年の十一月に、ルース・ベネディクトといふアメリカの文化人類学者が『菊と刀』といふ本を著してゐて、それが翻訳紹介されました。この本は学者たちの厳しい批判をよそに、一般の読書人の間に広範な反響を引き起こしたのです。その反響の中で最も目に付いたのは、「罪の文化と恥の文化」といふ図式的な概念規定の提示でした。キリスト教徒であるアメリカ人の道徳規準は元來「罪の文化」に発したものであると規定し、一方日本人のそれは「恥の文化」に発してゐる。つまり日本人にはお互ひの間でそれがどう見えるかといふことが道徳の規準になつてゐる。恥の文化に住む人々には究極的に自分の罪をどうするか、どうしたら罪を贖へるかについてその儀式がないといふのです。

戦後日本に乗り込んできたアメリカ系の宣教師たちは、「日本人は神を知らぬ。だから究極的な個人の責任感が欠如してゐる」といふ論理で攻勢をかけて参りました。そこで再び、「真の個人主義は唯一なる神の存在が保証となつて初めて個人主義足り得るのではないか」といふ論題が生じたのです。唯一のゴッドの存在を欠いたところに究極的な個人の責任倫理は成立しない、つまり個人主義は成立しないのではないか、といふ疑問が突きつけられたのです。

この問題に關しましては、先ほど私達は、明治から大正期における福澤から漱石、鷗外、和辻さん達の言葉を通して見事な個人主義道德の自立の歴史を見てきました。「ゴッドの存在を持たぬが故に個人の責任倫理が確立できない」とか、「ゴッド無きが故に個人主義が育成しない」などと云ふことはありません。私は日本の個人主義は立派に成立してゐると考へます。戦後の和辻さんに『日本倫理思想史』といふ大変重厚で立派な研究がありますが、そのすべでは、日本の精神伝統についての深い自信を前提としてゐるものであります。和辻さんにとつては「ゴッドがなければ個人主義はない」といふやうな議論は相手にするに足りないと思はれたのではないかと推察いたします。

一 神教を持つアングロサクソンの強さ

しかし、自分たちの持つてゐる文化や道德の力、或いはそれへの自信が私達に持つてゐるかといふ問題になると、これまで学生時代から西欧の文化や文学を研究してきた一人として、どうしても一神教的価値観の持つ強さが気になります。キリスト教文化圏の国民はどうしてあのやうに強いのかといふ問題です。このことを我々はどう受けとめたらいいのか。

分かり易く言ひますと、アヘン戦争から大東亜戦争を経て、つい先年の湾岸戦争に至るまで、一ベトナム戦争は唯一の例外ですが一多国籍的な規模の戦争に於いて勝利者の地位を占めたのは常にアングロサクソンを中心とするキリスト教文化圏の国家です。ルネッサンス以来、近代の世界において世界の歴史に何らかの大きな変動をもたらす原動力となつたのは常にキリスト教国の国民でした。二十世紀になつて初めて非キリスト教国である日本が世界史的な変動の震源地になりました。しかし、ご承知のやうに、初めて日本が世界史を動かすやうなイニシアチブを取つたやうに見えましたが、結局そのイニシアチブを貫徹することができなくて途中で挫折してしまひました。その原因を突き詰めると、日本人の精神的倫理的な力の根源に、超越的な創造と支配の原理、簡単に言へばゴッドへの信仰ですが、その信仰が

なかつたからではないかと考へざるを得ないわけです。

このやうに私の研究者としての関心は、「日本人の歴史の中にキリスト教やユダヤ教文化におけるゴッドのやうな超越者は果たして存在したのだらうか」といふ問ひとなつて出てくるわけです。この問ひに率直に答へますと、日本人の心の中にゴッドといふもの、あるいはゴッドのアナロジーに当たるものが存在したことはかつてございません。

十六世紀の半ばにポルトガル、スペインそしてイタリアを中心とするカトリック教徒達が日本へ渡来し、「この宇宙にはデウス—英語でいふゴッド—といふ根源的な一者が存在し、これがすべての価値の究極の原理である。そのデウスの存在を信ぜよ」と日本人に説きました。彼らは十六世紀の半ばから十七世紀の前半の「鎖国令」に至るまで約九十年間に亙り日本人にデウスの存在を理解させようとしたけれども、日本人は受容せず、彼らの試みは徒勞に終りました。それまで世界中どこへ行つても常に勝利者であり続けたキリスト教徒が、日本において初めて全面的な敗北を喫して撤退したのです。九十年の布教の歴史を以てこの国にやや根を張りかけてみたゴッドの影響力はここで根絶されてしまふのです。これほど徹底的な大敗北はキリスト教成立以来千五百年の歴史において初めてのことであつたし、その後の五百年においても一度も生じてゐない。つまり、一六三九年、ポルトガル人が全面撤退し、彼等が日本来航を最終的に断念した幕府の政策、後世これを「鎖国令」と呼んでゐますが、こ

の日本の鎖国体制の完成はキリスト教史上空前絶後の大敗北になるわけです。

さて、さうした文脈で考へますと、昭和二十年の大東亜戦争の敗北を機会に、再び先ほど申しましたアメリカを中心とする欧米世界からの文化的な大攻勢が日本に押し寄せてきます。四百年前にカトリック教が大敗北を喫したわけですが、その仇をプロテスタントのアングロサクソン種族がカトリックに代つて大いなる復讐を遂げたのではないか、と私には思へるのです。我々は四百年昔の恨みを晴らされたのだと理解したくなります。

そこでまた新たな疑問が生じてきます。四百年前の昔に一神教的価値観が襲つてきたその時、彼らの大攻勢に対して我が日本人は、つひに屈服することなく戦ひ抜いたのです。日本人は文化防衛に立派に成功し、伝統的価値観を守り抜いたのです。ところが二十世紀の後半に再び一神教的価値観の攻勢に日本人は直面します。それ以来約五十年、我々は戦ひ続けてゐますが、この度の文化防衛の戦ひは、どうやら我々に旗色が悪いやうな気がします。

文化防衛

現在、既に国は開かれた状態になつてをりますから、十七世紀の場合のやうに鎖国をして、全面的に排除撃退するといふ対応をとるわけにはいきません。キリシタンの世紀においても、

日本は外来文化に対して全面的な排除を貫いたわけではありません。一神教文化の進入がもたらした数々の文化項目があります。特に自然科学の方にですが、天文学、暦学、医学、薬学といった分野で、或いは人文科学の分野においてもラテン語を中心とする外国語、すなわち文法学、論理学、また南蛮美術、美術工芸などにおいて非常に多くの外来の文物を取り入れ、それによつて日本の文化は多彩に、豊かになつてきたわけです。

そこで、文化防衛といふことですが、この文化防衛に勝利するとはどういふことかと言ひますと、それは受けた攻勢とか刺激によつて自らはより多様になり内容も豊かになる。しかし、文化の根本的な性格には傷を受けない。つまり、自らの本質を傷つけることなく外来の要素を吸収し、かへつて自分が豊かになるといふ過程が認められれば、それは文化防衛上の勝利であると思ひます。

これに対して、文化防衛における敗北とはどういふことか。これは、外来文化の影響が文化の根底にまで及び、そのために伝統的な価値観が膨らみと多様性を帯びるといふよりは、むしろ変質し動揺して無秩序を来してしまふ。いはゆる民族のアイデンティティに崩壊の危機が生じる。外来の要素の吸収によつて消化不良を起こし、豊かになるといふよりは混乱と無秩序が生ずること、これが敗北であらうと思ひます。

さうしますと、この戦後五十年の歴史において、我々が辿りつつあるのは、この文化防衛

闘争での敗北の過程ではないかといふ気がしてきます。まだ敗北と決定したわけではありませんが、どうも旗色が悪いやうです。つまり私ども日本人は、一神教的価値観からの再度の挑戦に直面して、次第に自らの伝統的な価値観を攪乱され、やがて自らの自己同一性にも様々な傷を受けていくといふ敗北の過程を経験しつつあるのではないか。四百年昔の我が祖先が敢然と耐へ抜いた試練に、後世の我々が耐へられない、さうした弱さを露呈しつつあるやうに見えます。

「天」の思想

どうしてかういふことになつたのかについて説明はいくつも考へられますが、それより現実に今後どうしたら文化防衛の実を上げることができるか、といふことを考へることの方が重要であります。そこで、我々に一神教的な価値観からの攻勢に有効に対抗できるやうなものがあるかどうか、それを探すやうな心持ちで我が民族の精神の歴史を顧みることになるわけです。

さて、この課題に対するヒントを与へてくれるのが、やはり福澤諭吉です。福澤は『学問のすすめ』の第一篇の冒頭で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」

と書きました。では「云へり」といふが、いつたい誰がさう言つたのか。それはたぶんどこか横文字の原典にあつたに違ひない。その原典では、「デウス」か「ゴッド」といふ言葉が置かれてゐたはずです。福澤は明治五年といふあの時点で「神は人の上に人を造らず」と書いたら、これは到底日本人の受容できるテーゼにはならないといふことをよく知つてゐました。勿論「ゴッド」といふ言葉を出すわけにもいかないし、その「ゴッド」を「神」と書けば大変な混乱が起こり、この「神」とは天照大神のことかなどといふことになりかねなかつた。従つて主語として「天」といふ言葉を置いたので。

福澤論吉とほぼ同時代に西郷隆盛がゐます。この西郷さんに『西郷南洲遺訓』といふ書があります。明治三年に、福澤が『学問のすすめ』を書いたよりも少し前のことですが、庄内藩主（庄内は現在の山形県の北西部）の酒井忠篤といふ方が、西郷の名声を慕つて鹿児島にわざわざ何人かの藩士を従へてやつてきました。西郷南洲をしばば訪問して教へを請ふのです。その時の座談を筆記して『西郷南洲遺訓』といふ立派な書物ができました。その冒頭に「大政を為すは天道を行ふものなれば、此かとも私を差し挟みては済まぬもの也」と言つてゐます。この場合、庄内侯は政治の要諦を伺ふために来たのですから、西郷さんは「国の政の大本は天の道にあり」と言つたわけですが、実はこれが単なる政治学の議論ではなく、西郷さんの話は次第に道徳論になつて行きます。その三箇条ほどを拾つてみますと、第九条にか

う書かれてゐます。

「道は天地自然の物なれば、西洋と雖も決して別無し」

天地自然の道といふものがあり、この道は西洋であらうと東洋であらうと共通である、と言つてゐます。これはいはゆる自然法思想です。そして、その「道」について第二十一条に次のやうに述べてゐます。

「道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終
始せよ」

「敬天愛人」は有名な言葉です。天を敬し人を愛するといふのです。「身を修する」は身を修める意で、修身です。「克己」は、己に克つといふことです。道とはさういふものだといふわけです。さらに第二十四条がやはり大事だと思ひます。

「道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も

我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也」

これは福澤の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」といふ思想とまことに似てをります。

さてこの後、本来ならば表題に掲げました「日本における超越者の思想の系譜」について多少歴史的な概観をお話する予定でしたが、申しわけないことに私の時間配分の不手際からもう残り時間がありませんので、概略だけを簡単にお話しておきます。

そもそも超越者といふやうな概念は、日本にも古代からあるのです。これも和辻さんが指摘したこととかなり有名になった話であります。「日本人は日本の神々の最高の神を天照大神だと思つてゐる。これをギリシャ神話に例へてみるなら、オリンピアの神々の主神に当たる。しかし『古事記』を読んでみると、その天照大神も実は神々を祀つてをられるのではないか」といふのです。

天照大神は崇神天皇の代以来伊勢の皇大神宮に祀られてゐます。だから我々は、何となく天照大神は日本人が祀る神だと思つてゐる。しかし『古事記』をよく読んでみると、この天照大神といふ神様は日の神です、太陽神に仕へる祭祀の巫女であります。天照大神がさらにその上の神を祀つてゐるわけです。これは古事記の、例の素戔嗚尊が乱暴を働く場面を読ん

でみるとすぐにわかります。天照大神自身が田圃を作つたり機を織つたりして、新嘗祭をなさつてゐる。何を祀つてゐるのかといふと、太陽神の「天の神」であります。「古事記」によれば天之御中主神が一番最初に生まれた神なのです。しかし、天照大神が祀る神はその唯一最高神としての天之御中主神ではなく、「天の神」なのです。結局、「天」なのであります。ここに、超越者の系譜の出発点があるわけです。この「天」を日本人は神話の時代から祀つてきました。天照大神の時代は、いはゆる弥生文化の初期のことなのか、あるいは縄文期に遡るのか見当がつきませんが、考証によると、神武天皇が即位されてから二千六百五十年、少なくとも『古事記』や『日本書紀』が成立したときから千五百年経ちます。この間日本人は「天」といふものを自分たちの上にあるもの、そしてやはり自分たちの道德の根源として



意識してゐたことは間違ひありません。

ただ、その千五百年の歴史の間に儒教や仏教が渡来したりして、なかなか「天」といふのも一筋には行つてをりません。日本人の道德の規準には様々な波乱があつたわけです。しかし、その超越者の系譜は千五百年を生き抜き、そして明治の初年に福澤や西郷南洲といふ方がハツと気づいて「天」といふ言葉を出してきた。これはやはり『古事記』の昔以来、日本人の上には「天」といふものがあるのではなからうか、といふやうに考へるわけです。

最後に、「日本人として天といふものをどう考へるか」といふことを皆さんに課題として投げかけることにして、私の講義を終らせて頂きます。

質疑応答

〈問〉先生は「西洋の一神教的価値観に対抗するためには、日本も超越的なものを持たなければならぬ」といふやうに仰しやいました。このことについて日本の唯一の超越的な概念として「天」といふものを挙げられたと私は解釈したのですが、天といふのは果たして特定できるもの、実在として捉へられるものなのか、その点についてお聞かせ下さい。

△答▽まづ第一に、「一神教的価値観に対抗するためには、日本も超越的なものを持たなければならぬ」とは申し上げてをりません。持たねばならないのかもしれないかもしれませんが、持たないで済むならこれに越したことはありません。これはこれまで通りの伝統的な日本人の極めて穏やかな相対主義的な世界観ですね、「彼は彼、我は我」といふことで済めば、それに越したことはないのです。

一つ例を挙げて申しますと、北畠親房といふ人に『神皇正統記』といふ著書がございまして、これは一応日本の歴史なのですが、他の如何なる歴史書とも違つて天地開闢の昔から説き始めてゐるのです。『水鏡』といふ書物にこれに近いものがありますが、それに出てくる天地開闢の話は仏教的世界創造観を紹介してゐるに過ぎません。これに先立つ日本の最も重要な歴史哲学に慈円大僧正の『愚管抄』といふ書物がありますが、これも神武天皇の時から始まつてゐて、天地開闢といふことには一切触れてゐない。親房だけが天地開闢の昔から説き始めたのです。

天竺では世界の始まりをかう考へてゐる、支那では世界の始まりは儒教の書物にかう述べてゐる。日本の神話ではかういふ風に説明してゐるといふやうに並列的に記述されてゐるのです。当時はこの三国が日本人にとつての世界ですから、三国の例を挙げて紹介すればそれで全世界の創造観を説明したことになります。肝腎なことは、親房が、三つのうちどれが正

しいかといふ事は一言も言つてゐない、といふ点です。三国は、それぞれ三つの世界観を持つてゐてそれで宜しいとする態度をはつきり出してゐるのです。

これはやはり日本人的な態度だらうと思ふのです。ですから、後にキリスト教的な世界観、つまり創世記に代表される「この世界はどうして出来たのか、ゴッドの創造による」といふ説明が入つてきた時に、「キリスト教徒はさう考へるだらうさ」で済むのです。日本人の知識の中の世界説明が一つ増えただけなのです。日本人にとつてはそれで済むのですが、彼らキリスト教徒にとつては自分たちのそれ以外に世界創造観があるといふことは我慢できないのです。あると認めれば、「キリスト教的な世界観が唯一の正しい説明である」といふ立場が成り立たないことになりますから。

現に日本人はさういふ究極的な一者といふ存在を考へないままできたのです。従つて「天」といふ考へ方が「デウス」に対抗しうるものであるかどうか、敢へて対抗させようとすればかなり性格の違つたものになるはずでありますし、必ずしも対抗させる必要のない状況が一番望ましいのです。しかし対決しなければならぬとすれば、我々も一応はこれらの問題を考へておかねばならない、といふことです。大変微妙なところをご理解下さい。

この「天」の思想は、時代を追つて分析して参りますと、なかなか面白いことが出てきます。やはりキリスト教の影響も受けざるを得ないのでですね。「唯一最高といふものがあるんだ」

と言はれると「我々だつてさういふものは知つてゐたんだ」と「強がり」を言はざるを得なくなるわけです。その日本人の「強がり」が始まつたのがキリシタンの世紀であります。その「強がり」が始まると同時に、日本人の「天」についての考へもやや変質せざるを得ません。「あれもよし、これもよし」といふ相対主義の中に安住してはゐられない。つまり戦闘的になつてしまふのです。さういふ戦闘的な世界観を持たずに済むといふのが日本人の幸せだつたのです。しかし、その幸せはすでに失はれた幸せであつて、もはや取り戻すことが出来ないかもしれない。さういふ状況になつて来てゐます。

近・現代（二八四四～一九九四）

一五〇年間の日本の歩みの中で
天皇と大部分の日本国民は、
どのやうな思ひで相對して来たか

国民文化研究会・理事長

元 亜細亜大学教授

小田村寅二郎



宿舎から望む阿蘇

現代日本を覆ふ歴史観

幕末における天皇と国民——孝明天皇の大御心

幕末の志士——吉田松陰

明治維新——『五箇條の御誓文』

「大日本帝國憲法」と「教育勅語」

我々の進みゆくべき道

現代日本を覆ふ歴史観

一昨日、山内健生さんが講義なさった時の資料の中に『諸君!』七月号に掲載された文芸評論家・江藤淳氏の「(十二歳)の宰相たち」からの文章が抜粋されてみました。

「歴史をぶった切って、一九四五年八月十五日以前の歴史は全部悪い歴史だということにする。大昔のことはともかくとして、明治以来の日本の近代史にはバツテンをつけて帳消しにしてしまう。そんなことが出来るわけがない。記憶としても、現実としても出来ないけれども、それがあたかも出来るかのように、謝罪する、謝罪して、サバサバして、出直したらいいというような議論がある。これは「戦後民主主義」的ファンダリズムの議論である。」

要するに、戦前のことは明治の初めにさかのぼってバツテンをつけてしまふといふやうな風潮が教育界にも政界にも充滿してゐるのです。現在の内閣は、国会において過去の侵略行為の謝罪をする、さういふ決議をするといふやうな差し迫つた時代に来てをります。この謝罪決議が実際に行はれれば、われわれの子孫に対して大変な禍根を残してしまふのです。

これは真に私どもにとりまして、私自身にとりまして、何といふ残念なことか、この残念さをどうしたら若い方々にお伝へできるだらうかと考へますと、それは、具体的に天皇と国民がどういふ気持ちで相對してきたかといふ課題を押し進めていくしか方法がないと思ふのです。

この天皇と国民の具体的な気持ちの行き来を課題として講義を進めていきますが、話を聴かれる前に心に留めていたゞきたいことが一つあります。それは、日本で言はれてきた「神（かみ）」は、西洋で言ふ「GOD（ゴッド）」とはかなり違つたものであることです。全知全能を意味する「ゴッド」と、在りし日に立派であつた人を死後「かみ」に祀つてきた日本の「神」を混同しては、日本の過去は理解できないのです。明治天皇の御製に、明治二十五年（御年五十一歳）、楠木正成を祀つた湊川神社みなとがはにおいてになつたときにお詠みになつたお歌があります。

湊川懐古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

敵を防いで、後醍醐天皇のために楠木正成は戦死するのですが、その楠木正成は我々の祖



先なのですが、今は湊川神社のご祭神として、「神」となつて世を守つて下さつてゐる。これは端的に、日本の「神」が「ゴッド」と違ふといふことを明確にお示しいたゞいた御製であると思ひます。

幕末における天皇と国民

— 孝明天皇の大御心 おほみこころ

日本の近代化が進んできた一五〇年間を三つに分けますと、初めの五〇年間は、弘化元年（一八四四年）から日清戦争が勃発した明治二七年（一八九四年）まで。次の五〇年間は、大東亜戦争が終結する昭和二〇年（一九四五年）までです。そして、それから今日までが五〇年経つてゐるといふことです。この講義では、時間がありませんので初めの五〇年と次の五〇年について触れていくことにならうと思ひます。

一八四四年、すなはち一五〇年前の弘化元年はど

ういふ年かといふと、様々な外国の船が日本に来る、その前触れとなつた年です。オランダの国から使節が来て、国書を幕府に呈し開国を勧める。この使節の来日から、開国すべきか鎖国を続けるべきか、外国の船が来たら撃退すべきか受け入れるべきかといふ議論が紛々として日本中に展開します。

それから四年後の嘉永元年、孝明天皇の時代になりますと、外国船が頻繁に日本にやつて来る。この年は同時に、ヨーロッパでマルクス・エンゲルスが『共産党宣言』を出してゐる年でもあります。それから五年を経た嘉永六年、アメリカのペリーが浦賀に来ます。また、ロシアからはプチャーチンが長崎に来航します。吉田松陰は、初めこのプチャーチンの艦船に乗り込まうとしましたが出航に間に合はず失敗、翌年の安政元年、ペリーの船に乗り込まうとしましたが乗船を拒否され、自首して牢に繋がれます。

安政六年、幕府は横浜・長崎・函館の三港を開いて、ロシア・フランス・オランダ・アメリカ・イギリスに貿易の許可をします。そして、この年に「安政の大獄」があり、吉田松陰、橋本左内ほか大勢の勤皇の志士たちが獄門に晒されることになりました。さらに元治元年には、禁門の変（蛤御門の変）があり、幕府が第一次長州征伐出陣を命じます。これは明治維新一八六八年よりも四年ほど前のことになります。

そこで、明治の時代に移ります前に、孝明天皇とそのもとにおける当時の日本人との心の

交流がどのやうなものであつたかを具体的に文献で勉強したいと思ひます。この孝明天皇といふお方は、たくさんの御製を残してをられます。文久三年(一八六三年)からの御製をあげてありますので、この歌の中から孝明天皇のお気持ちを汲んでみて下さい。

(文久三年 — 一八六三 — 御年二十三歳)

此の春は花うぐひすも捨てにけりわがなす業ぞ國民の事

薄氷

愚かなる心は寒し薄氷あやうきのみに世をわたる身や

寄弓述懐

梓弓まゆみつき弓年をへず治まれる世に引きかへさなむ

日日日日の書につけても國民のやすき文字こそ見まくほしけれ

一・二首目の歌は、春は花見等をなさる慣例だったのでせうが、この文久三年の春は、お正月のゆつくりとした気持ちにはとてもなれない。日本の国民がどうなつていくのか判らない。非常な国難が到来してゐるが、自分は大変愚かな人物なものだから、この時局を乗り切

つていけるかどうか心配である、といふ御製です。

三・四首目の歌では、どうにかして平安な時代にしたい。毎日の状況を知らせてくれる書を見るにつけても、国民が安らかに生活してゐるといふ文字を見たいものだ、願はれてゐます。外国の船が次々に来て開港を迫る、大砲を持つてゐますからいつ打ち込まれるかわからない、さういふ国民の日々の不安を思はれて、お心を傷めていらつしやるのです。

(年月未詳の御製)

すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ國民
戈ほことりてまもれ宮人みやびとここのへのみはしのさくら風そよぐなり
あぢきなやまたあぢきなや蘆原あしはらのたのむかひなき武蔵野の原

初めのお歌には、濁にごつた水に自分が沈んでも構はないが、この日本国民を濁してしまつてはならない。外国人を日本に上陸させるやうなことをしては申し訳がない、といふお気持ち
が表はれてゐます。そして、最後のお歌では、江戸幕府はもう全然頼りにならなくなつた、
これでは日本の国は守れさうもない、といふ悲痛なお気持ちで世を送つていらつしやつた孝
明天皇がしのばれてきます。

次に、孝明天皇の『御述懐一帖』を読んでいきます。これは、このときの時局の推移を孝明天皇がご自分で書き留められて近臣に示された文章なのです。著名な言論人・歴史家で、『近世日本国民史』百冊を著述した徳富蘇峰は、この『御述懐一帖』に目を留めて、明治維新が成つたのは、雄藩の力である、あるいは志士の力であると言ふけれども、この孝明天皇を措いて明治維新の本当の功績者はゐない、といふことを断言してゐるのです。それは、この文章を読めば分かつてきます。これを読んで徳富蘇峰は非常な感動を受けたのです。全文を読む時間がありますので、その一部分をあげてをきます。

「往年三社に奉幣ほうへいせし以來、神州の汚穢をわいを洒掃さいさうせんことを、朝夕禱請たうせいして、又法樂をも今に至り猶之なほを行ふ。庶幾こひねがはくは、以て前の志願を全うして、之を終へんと。」

かつて伊勢神宮・石清水八幡・加茂神社に奉幣使を遣はして以來、神州日本の汚れを打ち払ふことを、朝に夕べにご祖先の神にお祈りをして、また法樂―神様をお慰めする踊りを今に至るまで奉納してゐる。願はくは、先の志願―戎虜じゆりよが國體を汚すことなく、国民が安心して生活を送ることができるとやうに、外国の勢力を打ち払ひたいと。

「去年元を改め天下と共に更始す。皇妹既に尚し公武實に一和す。此時におよんで、既往は咎めざるの教へに由り、天下に大赦し、三大臣の幽閉を免じ、列藩臣の禁錮を赦し、有志の士の連座せる者を放んことを、速に幕府に告げて、以て此舉を行はしめよ。是れ朕の深く欲する所なり。」

去年、元号を文久と改め、天下のものすべてを更新した。自分の妹である和宮内親王は幕府のもとに嫁し、公武は實に一和したはずである。この時に当つて、過ぎ去つたことは咎めないといふ教へにより、天下に大赦の命令を下して、天皇の側近の三大臣の蟄居を免じ、安政の大獄で捕へられた列藩の臣、また連座して捕へられた同志の士たちを牢から放つことを速やかに幕府に告げて実行させよ。これは自分が強く願ふことなのだ。

「爾後天下心を合せ力を一にし、十年の内を限り、武備充實せしめ、断然として夷虜に諭すに利害を以てし、一切に之を謝絶し、若し聴かずば速やかに膺懲之師を擧、海内の全力を以て、入りては守り、出ては制せば、豈神州の元氣を恢復せんに難きこと有んや。」

ここには全ての国民が心を一つにして、この難局に当たらうといふお気持ち表はれてゐる

ます。孝明天皇は十年といふ一つの区切りをつけてこの問題の解決に臨まれてゐるのです。

「若し然しからずして惟ただに因循姑息舊套いんじゆんこそくきゆうとうに從て改めず、海内疲弊かいだいの極、卒つひには戎虜じゆうりよの術中に陥り、坐しながら膝ひざを犬羊けんやうに屈し、殷鑑いんかん遠からず印度の覆轍ふくてつを踏ふま、朕實ちんに何を以てか先皇在天の神靈に謝せんや。若し幕府十年内を限りて、朕が命に従ひ、膺懲ようちやうの師しを作さずんば、朕實に斷然として、神武天皇・神功皇后の遺蹤いしように則り、公卿百官くきやうと天下の牧伯ぼくはく (諸侯) を帥ひきめて親征せんとす。卿等けいら其斯意それこのを體して以て朕ちんに報ほうぜんことを計はかれ。」

孝明天皇は、京都にをられて何のお力もお持ちにならないけれども、たいへん勉強されて「殷鑑いんかん遠からず印度の覆轍ふくてつを踏ふま」といふやうに、印度がイギリスに征服されたことを知つていらつしやるのです。そして、印度と同じやうに日本が外国に征服されて、外国の属領になつてしまふことになつたら、どうしてご祖先様の御靈にお応へすることができなのだらうかと憂慮され、もし幕府が自分の命に背そむいて、十年の間に敵を払ふ軍を挙げないのならば、自分が日本中の將軍たちを率ゐて親征するのだと、決然とした意を表されてゐるのです。

本当に、たいへんな文章です。かういふ素晴らしい文章が歴史の中に埋もれてゐるのはとても残念なことではありませんか。この文章を読めば、孝明天皇といふお方がどういふお心

を以て日々を過ごしていらつしやつたかが分かるのです。

初めに紹介したやうな御製は、自然に漏れていきますから、日本中に伝はつていきます。そして、このやうな御製を見聞きすることによつて、国民が感動の渦に入つていくのです。「君民一体」とは、まさにそこに實在の環境として存在し、また、實在し得た十分の根拠があるのです。

幕末の志士 — 吉田松陰

次に、幕末の志士たちが、孝明天皇の大御心に対応してどのやうに生きていつたのかを吉田松陰を代表として、その姿を見ていきたいと思ひます。

前に触れましたが、長崎に寄港したロシアのプチャーチン率ゐる軍艦に乗り込まうとし、江戸から急遽、京都を経て長崎に行きますが、出港に間に合はず乗り損ねてしまひます。

その時に松陰は、京都の御所を遥拝し、詩を作つてゐます。その詩に、

聞説今皇聖明德　　聞くならく今皇聖明の徳、

敬天憐民発至誠　　天を敬ひ民を憐む至誠より発したまふ。

鶏鳴乃起親齋戒

鶏鳴乃起きて親ら齋戒し、

下攘^ニ妖氣一致太平^上

妖氣を攘つて太平を致さんことを祈りたまふ。

從來英皇不世出

從來英皇不世出、

悠悠失^レ機今公卿

悠悠機を失す今の公卿。

「今の天皇様、孝明天皇は、素晴らしい徳のある方だと伺つてゐる。天を敬ひ民を憐れみ、その徳は真心から発していらつしやる。そして、天皇様は、鶏が鳴くとともに朝早く起きられ、みづから齋戒沐浴をされ、この日本を覆うてゐる妖氣を払つて、日本に平和がくることをお祈り下さつてゐるのだ」と。「從來英皇不世出」といふのは、上に立つ天皇といふ方はずしも常に立派な方であるとは限らないと思ふが、今の天皇様は得難い方がなつていらつしやるといふ意味です。ところが、「悠悠機を失す今の公卿」―天皇の側近に仕へてゐる公卿たちには誠に力がなくてだめだ、といふことを松陰は詩の中で嘆いてゐるのです。

次に、吉田松陰の「対策一道」^{たいさくいちどう}（安政五年―一八五八―二十九歳）を読んでいきます。これは松陰が山口の毛利藩の殿様に出した意見書で、外国の強硬な要求に対し、どのやうな対応

をすればよいのかを幕府から下問された時の応対を想定して書いたものです。その中から、アメリカに対する幕府の対応を想定した箇所を読んでいきます。

「然りと雖も、空言は遂に以て驕虜を懲すべからず。宜しく今日より策を決し、上は祖宗の遺法に遵ひ、下は徳川の旧軌を尋ね、遠謀雄略を以て事と為すべし。凡そ皇國の士民たる者、公武に拘らず、貴賤を問はず、推薦拔擢して軍帥船司と為し、大艦を打造して船軍を習練し、東北にしては蝦夷・唐太、西南にしては琉球・対馬、憧々往来して虚日あることなく、通漕捕鯨以て操舟を習ひ海勢を曉り、然る後往いて朝鮮・満州及び清國を問ひ、然る後、廣東・カルパ・喜望峯・豪斯多辣理、皆館を設け將士を置き、以て四方の事を探聴し、且つ互市の利を征る。此の事三年を過ぎずして略ぼ辨ぜん。」

どのやうな応対を考へようと、空言では奢り高ぶつた敵はどうにもならないだらう。海外への発展を目指してゐた「祖宗の遺法」と、まだ鎖国をしてゐなかつた徳川時代の初めに習ひ、日本の外交は遠謀雄略でいくべきである。皇國の士民ならば、優秀な人材は、公武にかかはらず、貴賤にかかはらずに拔擢して軍帥船司とし、大艦を造つて北から南までの海の上を毎日のやうに日本の舟が行き来する習慣をつけ、また鯨を捕りにゆくなどして操舟を習ひ

海の地勢を知るのだ。それから朝鮮・滿州・清國を訪ね、また廣東・カルカッタ・喜望峰・オーストラリアを貿易上の拠点として館を設営して將士を置き、世界中の情報を得るやうにする。かつ「互市の利」——貿易の利を取るのだ。三年あればこれだけのことができるといふのです。

「然る後往いて加里蒲爾尼亞を問ひ、以て前年の使ひに酬ひ、以て和親の約を結ぶ。果して能く是くの如くならば、國威奮興、材俊振起、決して國體を失ふに至らず、又空言以て驕虜を懲するの不可なるに至らざるなり。然れども前の論は以て墨夷を却くべし、而るに後の論拳がらざれば何を以て國本を強くせん。國本強からざれば、虜患何れの時にして止まんや。後の論は以て國本を強くすべし、而るに鎖國を以て謀と為し、航海互市を以て古に非ずと為して衆咻して之を攻むれば、後の論何を以て拳がらんや。然らば則ち天下の事は吾が公自ら任ずるに非ずんば、断然として遂に為すべからざるなり。吾れ驚劣なりと雖も平生書を読み、皇室を重んじ、夷虜を憤ること、具さに明問の及ぶ所の如し。今日の事、言何ぞ之れを盡さん。聊か其の百一(百分の一)を對ふること右の如し。」

この後にカリフォルニアを訪ね、前年に日本に来て開港を勧めてくれた挨拶をすれば良い。

そこで和親貿易に関する条約を結ぶのだ。果たしてよくこのやうにいくならば、国威は挙がり、優秀な人物も立上がり、決して國體を失ふやうな事はない。また外交の交渉によつても外国勢力を退けることができるやうになる。しかしながら、前の論——外国勢力を退かせるための交渉戦術——によつてアメリカを退かせることはできるだらうが、後の論——今自分が述べた具体的な策——が挙がらないならば、何を以て國本を強くすることができたらうか。鎖國を防備の方策とし、航海互市を皆が批判するならば、どうして具体的な建設策が挙がるだらうか。従つて、即ち天下のことは私の殿様——毛利公が自分で決意するのでなければ、断然として実行することはできないのです、とかういふ文章を松陰は殿様に出したのです。

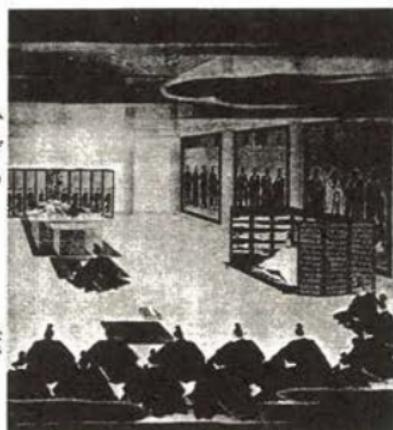
先程読みました『御述懐一帖』では、孝明天皇がインドのことまでご存じであり、國を守る事にどんなに心を砕いてをられたかがしのばれてきました。そしてまた、國民の代表として吉田松陰を挙げましたが、松陰の考へを「開國」といふ抽象的な言葉で片付けてしまふのではなく、日本の國の海外進出について具体的にどう考へてゐたかを理解しなければならぬのです。孝明天皇のお心とそこが結び付き、日本の國を守る力になるのですから。

かういふことを知つて、幕末における天皇と大部分の日本國民が、國の運命を守るためにどんなに心を砕いたかといふことを胸に止めていただきたいと思います。

明治維新―『五箇條の御誓文』

それでは次に、明治維新に入つていきますが、明治元年（一八六八年）三月十四日に明治天皇は、『五箇條の御誓文』をお出しになりました。この「御誓文」といふのは明治天皇が誰に對して誓はれた文なのか、皆さんご存じでせうか。たいていの方は、これは明治天皇が明治の初めに国民に對してお誓ひになつたと思はれるでせうが、資料の絵を見て下さい。

真ん中に座つてゐる三条實美が『五箇條の御誓文』を朗読し、その向うに御神体の櫛が屏風の前に立つてゐます。右側の屏風の囲ひの中に座つてをられるのが明治天皇です。神様の前で、明治天皇の御誓ひの文が三条實美によつて読まれてゐるのです。すなはち『五箇條の御誓文』といふのは、明治天皇が御祖先の御靈に捧げられた御誓ひの文なのです。



『五箇條の御誓文』

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
 一 官武一途庶民ニ至ル迄 各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦
 ザラシメン事ヲ要ス
 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

我國未曾有ノ變革ヲ為ントシ 朕 躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ
 萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

第三では、役人も武士も一般の庶民も、全ての人がある自分の志を遂げて、生きがひのある気持ちで世の中を送ることが必要であると書かれてゐます。「人心ヲシテ倦ザラシメン」といふのは、人の心をして生きてゐるのが嫌になるといふやうなことがないやうにする必要があると言はれてゐるのです。

また、最後の二行が大変大事です。「躬ヲ以テ」とは、命懸けでといふことです。「命懸け

で自分は、国民に先だつて五つのことを天地神明に誓つた。どうか、この旨趣に基づいて国民諸君は協力してくれないか。」といふことで『五箇條の御誓文』は出されたのです。

同じ日に、明治天皇は国民に対して、お手紙の形で一つの文章をお出しになりました。それが『明治維新の宸翰』です。その文中に、

「今般、朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日之事、朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古、列祖の盡させ給ひし跡を履み治蹟を勤めてこそ、始めて、天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし。」

とあります。さきの「御誓文」の第三と同じ意味の事がこの手紙の中に出てくるのです。一人でも持つて生まれた人間の本分と志を生かすことができないう時は、それは全て自分の罪である。だから、今日、このやうに五箇條を決め、国民と共に進みゆくにあたり、まづ朕自らが身骨を勞し、心と志を苦しめ、艱難の先に立つていかなければならないのだ。と、さういふ決意を表明なさつたのがこのお手紙なのです。

また、『五箇條の御誓文』に対して、公卿諸侯以下が奉つた「奉對誓約書」も残されてゐます。公卿の全署名者数は、七六七人であつたといひます。

「奉對誓約書」

「勅意宏遠、誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務、永世之基礎、此他ニ出可ラズ。臣等謹テ
勸旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ、黽勉（励みつとめる、の意）従事、冀クハ以テ宸襟（天皇のおほみこ
ころ）ヲ安ジ奉ラン。」

「天皇のお心は、非常に広く遠く深いものである。誠にもつて感銘に堪へません。明治維
新にあたり、これからの日本国の永世の基礎として、この五箇條を定める他に勝るものはあ
りません。自分等は謹んで天皇様のお心を上に頂いて、決死の覚悟で励み勤め、大御心をお
休めするやうにいたしたいと存じます。」と。

このやうに、明治の初めにおいて、祖宗の神々に向ひ、天皇は心を肅然として正され、そ
のお心を以て国民に向はれたのです。また国民もその天皇のお心を体して、己の本分を尽く
さうと努めたのです。このことをよく理解していただきたいと思ひます。

「大日本帝國憲法」と「教育勅語」

最後に、私が皆さんに最も申し上げたい問題として、「大日本帝國憲法」と「教育勅語」を取り上げたいと思ひます。まづ、「帝國憲法」ですが、皆さんが教はつてきた戦後教育の中では、この「帝國憲法」は、上から押しつけられた憲法である、と教へられてきたのではないでせうか。これも、先程の「五箇條の御誓文」についての理解と同様たいへんな誤解が多いのです。明治天皇がこの憲法を作られた時に、今でいふ憲法の前文にあたるものが三つ載せられました。それが、「御告文」・「勅語」・「上諭」です。

「大日本帝國憲法及び皇室典範制定の御告文」(明治二十二年——一八八九——二月十一日)

皇朕すめらわレ謹つしミ畏かしこミ

皇祖

皇宗こうそうノ神靈しんれいニ誥つゲ白まをサク。皇朕すめらわレ天壤てんじやう無窮むきゆうノ宏謨こうぼニ循したがヒ、惟神かむなノ寶祚ほうそヲ承繼しょうけいシ、舊圖きゆうとヲ保持ほシテ敢あテ失墜しつたいスルコト無シ。顧かへりミルニ、世局せいきうノ進運しんうんニ膺あリ人文じんぶんノ發達はつたつニ隨したがヒ、宜よろク

皇祖

皇宗こうそうノ遺訓いくんヲ明徴めいちゆうニシ、典憲てんけんヲ成立てんせいシ、條章じョウヲ昭示しやうしシ、内ハ以テ子孫しよんノ率由そつゆスル所ト為シ外ハ以テ臣民しんみん翼贊よくさんノ道みちヲ廣ひろメ、永遠えいゑんニ遵行じゆんぎやうセシメ、益々えきえき國家こくがノ丕基ひきヲ鞏固きやうこニシ、八洲はつしゆ民生みんせいノ慶福けいふくヲ増進ぞうしんスベシ。茲こゝニ皇室典範及憲法ヲ制定ス。惟おもフニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ胎シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス。

(後略)

「皇祖」といふのは、一番初めの御祖先、すなはち天照大神を指します。「皇宗」といふのは、その次の御祖先から自分のお父様の前の代の天皇までのことです。よつて、「皇祖皇宗」と言へば、天皇家における全ての御祖先のことを指すのです。

この御祖先の神靈に申し上げることに、「皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ、惟神ノ寶祚ヲ承繼シ」——自分は御祖先の志を継いで、日本の天皇としてここに立つてゐるつもりである。」

「皇室典範及憲法ヲ制定ス。惟フニ此レ皆皇祖皇宗ノ後裔ニ胎シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス。」——皇室典範と憲法を制定したが、思ふにこれは全て御祖先が子孫に残された統治の洪範を成文化したただけであります。」と。

次に、「勅語」を読みます。

「大日本帝國憲法發布の勅語」(明治二十二年——一八九九——二月十一日)

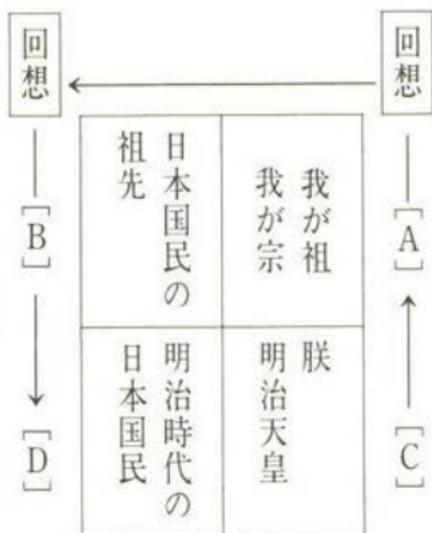
(前略)

惟おしフニ、我せが祖そ我そが宗そうハ、我せが臣しん民みん祖そ先せんノ協きょう力りき輔ほ翼よくニ倚より、我せが帝てい國こくヲ肇ちやう造ぞうシ、以もテ無む窮きゆう
ニ垂たレタリ。此こレ我せが神しん聖せいナル祖そ宗そうノ威い徳とくト、竝ならびニ臣しん民みんノ忠ちゆう實じつ勇ゆう武ぶニシテ、國こくヲ愛あいシ公こうニ
殉したヒ、以もテ此こノ光こう輝けいアル國こく史しノ成せい跡せきヲ胎たシタルナリ。

天皇家の祖先と、その当時の、今、自分の目の前にゐる国民の祖先とが協力して築いたのが日本の国である。今、立派な歴史を持つ日本がここにあるのは、自分たちの力ではない。それは、自分の御祖先の立派な威徳と、国民の祖先が忠実勇武であつて、国を愛し公に従つたからこそ、この光輝ある国の歴史を残してくれたのだ、と。

そこで、次からが「勅語」の内容になるのです。

朕ちん、我せが臣しん民みんハ、即すなはチ祖そ宗そうノ忠ちゆう良りやうナル臣しん民みんノ子こ孫そんナルヲ回くわい想しやうシ、其そのノ朕ちんガ意いヲ奉ほう體たいシ
朕ちんガ事じヲ獎しょう順じゆんシ、相あひ與よニ和わ衷ちゆう協きょう同どうシ、益えき、我せが帝てい國こくノ光こう榮えいヲ中ちゆう外げいニ宣せん揚やうシ、祖そ宗そうノ遺い業ぎやう
ヲ永えい久きうニ鞏きやう固こナラシムルノ希望きやうぼうヲ同どうジクシ、此こノ負ふ擔たんヲ分わかツニ堪たフルコトヲ疑ぎハザルナリ。



「自分は、自分の目の前にある臣民は、即ち自分の祖先の忠良なる臣民の子孫であることを回想し」——ここで私が書いた図を見て下さい。自分の目の前にある「D」は、「A」に仕へた「B」の子孫と把握する。それが「回想シ」といふお言葉です。これは、自分の目の前にある日本の国民は、私が勝手にどうかうしていいといふ国民ではない、といふ宣言ではありませんか。「自分の大事な祖先に仕へてくれた昔からの臣民の子孫がここにゐる、そのやうに回想して考へてゐる」と、さういふお言葉ではありませんか。

「其ノ朕ガ意ヲ奉體シ……」——今の国民が、自分の意を奉體して、私がすることを手助けして、相共に心の底から和らぎ合つて、力を合はせ、益々、日本帝国の光榮を内と外に宣揚し、祖先の遺業を永久に強固なるものにしよとの希望を同じくし、この負担を分かち持たうとするのである、と。

日教組の先生たちは、「帝国憲法」は、上から押しつけられた憲法だと主張しますが、このやうな貴重な文献を読まずに、また、読んでも理解できずにきたのです。そのやうな状況で

戦後の国民が教育を受けてきたことは、大変な誤りだったのです。年表でも分かりますやうに、日教組が結成されたのは、日本国憲法が施行された翌月、昭和二十二年の六月です。ですから憲法の施行と裏表になつてをり、完全に占領政策の実行部隊の一翼を日教組が担つてゐたのです。

また、「教育勅語」についても、日教組の教師たちは「上から押しつけた道德だ」と主張しますが、これも実際に良く読むと、その最後の二行に、

「斯ノ道ハ實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫(天皇家の御子孫の意)臣民ノ俱ニ遵守スベ
キ所之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

この道は、天皇家の御祖先が残された教へなのであつて、天皇家の子孫、ならびに、国民が共に守るべき所である。これは昔から今に至るまで、どの時代においても間違つてはゐなかつたし、国内のみならず、世界中どこへ持つていつても立派な倫理として通るものである。自分はあるあなたたち臣民と共に片時も離さずに固くこれを守つて、全ての者がその徳を一つにできるやう願ふものである、と。これは上からの押しつけといふやうなものでは全くなく、

明治天皇親^{みづか}らが、まづ我が身にこの皇祖皇宗の遺訓を踏み行はうと決意されてゐるのです。これを、天皇が出した勅語であるから、上からの押し付け道徳であるといふ短絡的な論理で、日本の国をひつくり返されたらたまたまつたものではありません。

我々の進みゆくべき道

今日の村山内閣にしろ、羽田内閣にしろ細川内閣にしろ、自民党の人たちの中にも、いちばん初めに申したやうに、一九四五年から前の日本の歴史は、価値がないものとして否定的です。これは、政界ばかりではなく、マスコミにおいても、また、教育界においても同じ状況で、そのやうな中で、日本の国の、天皇と国民の豊かな、心の躍動した心の行き通ひは、影も形もなくなつていかうとしてゐるのです。

我々は、尊い日本語が崩れていく、敬語はなくなつていく、そして、それは身も蓋もないやむを得ないことだと思ふしかない状況に置かれてゐます。しかし、初めの方でお話した一五〇年の区切りの時が今来てをり、この合宿教室も第三十九回を迎へましたが、第一回の合宿として再出発しようではないかと思ふのです。何年かからうとも、五十年、百年かからうとも、日本の歴史伝統は崩壊しないと確信いたしますし、また、さうあらしめた上でこそ、

日本は世界からの信頼を取り戻す事もできるし、日本の発展にもつながつていく。道はそれしかないのではないかとはいふやうに思ひます。現実的に發展していくためには、まづ、身を固めていかなければならず、それには日本の国の歴史を知るといふことが必要なのです。

天皇と国民が一体となつて生きてきた日本ですし、皆さんが、ご両親とあなた方との關係をお考へになれば、親しさといふものが家庭にあると同じやうに、皇室と国民の間にもあつたし、また、あり続けなければならぬと思つてをります。



講

話

若き友らへ語りかける言葉

―物を観る眼―

国民文化研究会常務理事兼事務局長

長 内 俊 平



阿蘇の草花―ヒゴタイ―

はじめに

自分自身をみつめること

運命を受けとめる勇気

物を観る眼

真心に立ち返る道

防人のうた

はじめに

雛は親鳥が懷の中に玉子を一生懸命抱いてゐる間に孵かへつてきますが、学問も同じことで、一つの明確な疑問を心に抱きますと、それが折りに触れて蘇かへつてきて、何かの機縁によつてハツと答へが浮かんできたり、ほのほのと答へが訪れてくることは皆さんも体験してをられることと思ひます。

私もちやうど諸君たちの年代としごろに、「美しいものはなぜ美しく見えるのだらうか」といふ疑問を持ちました。そしてその疑問は私が四十三歳になるまで二十数年間、折にふれては心に蘇かへり私の心を捉へて離しませんでした。皆さんに、「美しいものはなぜ美しく見えるのですか？」と問ひますと、「それは、あたりまへぢやないですか、美しいから美しく見えるに決まつてゐるぢやないですか」と答へられる人もをりませうけれども、はたしてさうでせうか。

昭和天皇様がお亡くなりになる六年ほど前に、

ふじのみね雲間に見えて富士川の橋わたる今の時のま惜しも

といふ歌を詠まれてをります。東海道線で行く楽しみは、今日は富士山はよくみえるだらうか、といふ期待ですが、昭和天皇様は富士川を渡る折に、雲間に見える富士山に呼び掛け

るやうな思ひで、アツと言ふ間に過ぎ去つていくその一瞬を惜しんでをられるのです。しかし、富士山が見えてきてゐるのに「きれいだなあ」と嘆声を上げることもなく、居眠りをしたり週刊誌を読んだりしてゐる人たちにとつては、富士山はないのと等しいのではないでせうか。さうしますと、美といふものは客觀的に実存するものではなくて、それを「美しい」と感ずる心があるかないかにかかつてゐる、と言へさうに思へてきます。私も、諸君の時代の頃にさういふ答へが一時浮かんできて、「ああ、さうだ」と思つて喜んだことがあります。しかし「お前はさう思ふかも知れないけれども、美しいと感じやうが感じまいが、富士山がそこに厳然としてあるぢやないか、お前はそれをどうするのだ」といふ問ひがすぐ心に返つてきます。さういふ問ひを繰り返してゐる間に二十数年がたちました。

自分自身をみつめること

さうしたある日、私は禪問答の本を読んでをりました。その本には、ある由緒あるお寺の方丈さんが、自分の後継者に誰を選ぼうかと悩んでをつた時に、ある日一人一人のお弟子さんを呼んで問答をするのです。丁度、季節は今頃で風鈴が快い音をたててゐました。

方丈さんは弟子達に「何故風鈴は快い音をたてるのか」と問ひかけました。しかし方丈さ



んの心をとらへる答はなかなか返つて来ませんでした。最後に呼ばれたお弟子さんが「二者寂静じやくじやうなればなり」と答へたところ、そのお弟子さんを後継者に決めた、と書いてあつたのです。

私はそのとき日頃考へてゐる問題にほのほのとしたものが、みえて来た様に思はれました。この場合二者とは、「風鈴と風」とうけとつてもよいでせうし、「風鈴とそれを聞く人」とうけとつてもよいでせう。

それからしばらくして、それは昭和三十九年に桜島で第九回の合宿教室があつた時のことです。鹿児島から桜島に向けて錦江湾をフェリーで渡つてゐたとき、ちやうど夕陽が地平に静かに落ちていく。その発する茜色が空も山も海も真つ赤に染めて、それはそれは美しい景色で、世の中にこんな美しい景色があるかと思ふほどでした。私は惚れ惚れと眺めて

みました。さうしましたら、体の中を電氣が走るやうな異常な感動とともに、二十数年考へてゐた問題の答へが閃いたので。私はあまりの嬉しさに船の中を飛び跳ねました。それほど大きな喜びだつたのです。その答へはといふと、これが残念ながら学校で教へる知識の伝授みたいにはいかないんです。しかし敢へてひと口で言つてみますと、天地自然の中には神々の命が満ち満ちてゐる、いや、一木一草生きとし生けるものすべては神そのものではないのか。その瀾漫する神の命と我が心が火花を散らすやうに感應する時に美といふものが生まれてくるのではないかといふことだつたのです。私の喜びは、例へやうもないものでした。この閃きを以つて私のその問題に対する二十数年の心の遍歴は終りました。なぜかと言ひますと、その閃きから私が気づかされたことは、「問題は自分自身にある」といふことだつたからです。分かりやすく言ひますと、ヴァイオリンの名器はいろいろな妙なる音色を出すといふことですが、弾く人の技量に応じてしかその音色は出て来ない、妙なる音色を出さうとするならば、弾き手が心魂込めて技量を向上させるしか道がない、といふやうなことでせうか。それからといふものは、私の関心は自分自身を見つめるといふことに向かつてゆきました。さういふ話になると思ひ出されるのが、この『パイドロス』といふ本です。これはプラトンが紀元前五百年後半に書いたものですが、その中で、ソクラテスとその友人のパイドロスが、真夏のある晴れわたつた日に、美について、愛についてイリソス川のほとりで語

つてゐる物語りです。パイドロスがソクラテスに向かつて、「あそこぢやないですか、あの若い女神様が水遊びをしてゐたときに、男の神様が来て攫つて行つたといふのは、ソクラテスさん、あなたはさういふ伝説を信じますか」と聞きます。さうするとソクラテスは、「パイドロス君、君は、賢い人たちがしてゐる様に『僕はそんな伝説は信じないよ』と答へたら当世風でいいだらう。しかし、さういふ話は一般の人が信じてゐるやうに信ずることにして私は、デルポイの社の銘が命じてゐる『汝自信を知れ』といふことに考察を向けるのだ。自分自身といふものをまだ知らないでゐて、よそのことに時間をかけてゐる暇は私にはないのだよ」と答へるところがあるので。ソクラテスを例に出して甚だをこがましいことですが、私は桜島でのがあつてから自分自身を見つめるといふことに関心が集中していきました。

運命を受けとめる勇氣

そして、第一に気付かされたことは、自分の運命を勇氣を持つて受けとめることが如何に大事であるかといふことでした。昨日、慰霊祭の説明の折に小柳左門君も話してをりましたけれども、私たちが両親の子どもとして生まれ、日本人として生まれたことは自分の選択を絶した運命でせう。どんなに跪いてみたところで、「もつと立派な両親の子として生まれ

てくればよかつた」とか「フランス人として生まれてくればよかつた」と願つてみたところでそれは稚心(橋本左内「啓発録」)の夢でしかないことにはつきり気付き、その動かし得ぬ運命きだめをしつかり受けとめる勇気をもたなければならぬといふことであります。

皆さんのなかにも人間の基本は「個人」であると思つていらつしやる方もをられませう。「私は個人として独立してゐるのだ。祖父や親とは関係ないのだ」と言ひ張る己自身が、その顔付き、もの言ひ、自分ではそれと、しかと気付いてゐない何気ない仕草まで、祖父母や御両親にそつくりであることに、しかと気付いてをられませうか。

皆さんは、中国残留孤児の方々が、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんに目でも会ひたいと言つて度々日本を訪ねてこられるのをテレビや新聞でご覧になつて知つてゐるでせう。永い間の念願と努力が実つてやつと五十年前に別れたお父さん、お母さんを捜し当てて、身も世もあらず泣き崩れてゐる姿を見て、もらひ泣きしない日本人はゐないのではないでせうか。努力の甲斐もなく、たうとうお父さん、お母さん、肉親を探すことが出来なかつた方々が、一日鎌倉の浜に遊んで、「これが日本の海だ」と言つて引かれるやうにして海の中へ入つていつて足を浸し、海岸の砂に触れては、自分の子どもを撫でるやうに「これが祖国日本の砂だ、砂だ」と言つて泣いてゐる姿を見る時に、誰が断腸の思ひなくして見るこゝとが出来ませうか。自分を異国に置き去りにした親兄弟を恨みもせず、「お父さん、お母さ

んに会ひたい」と言つて来日してゐる姿を見る時に、血のつながりといふものは如何に強いものであるかといふことを、いまさらのやうに知らされるのです。

その方々に比べて一体私たちはどうでせう。お父さん、お母さんが骨身を削つて送つて下さるお金を、そんなにありがたく思はずに「もつと送つてくれればいいのになあ」と思つてゐるやうなことはないでせうか。「お父様、お母様、お金をありがたうございました」と葉書一枚書く労を怠つてはをりませぬか。

さう申し上げる私も、中学校時代に、親父と一緒に歩くのを恥づかしかつたことがあるのです。といふのは、私の親父は小学校の先生でしたので給料はそんなに多くありません。ところが私の兄弟は四人ゐて、年が近いため四人共中学に在学したことがありました。四人の授業料を少ない給料から出すといふことはどんなに苦しかつたかと思ひます。ですから、着てゐる洋服はいつもヨレヨレで、たつた一足しかない革靴の底がいつでも斜めに擦り切れてゐました。さういふ親父と一緒に歩くのを恥づかしかつたことがあるのです。なんといふ親不孝者でありませう。

ですから、今でも毎朝仏壇に手を合はす時は、「父さん、堪忍してください」と、涙を流す日が少なくないのです。さういふ私ですから諸君たちには何も話しをする資格はないのです。しかし、さういふ男だからこそ諸君にお願ひしてゐるのです。父母や祖父父母のしたことは自

分には関係ないやうな顔をして、おぢいちやん、おばあちやん、お父さん、お母さんのやつたことをシャーシャーと外国人に謝るやうな同胞の姿を見ると、私は悲しくてならないと同時に、自分自身を見つめるといふことがどんなに大事かといふことを切に思はされる今日の頃であります。

物を観る眼

副題の「物を観る眼」の「観」といふ字について一寸触れて置きませう。「見」といふ字を使はずに、この「観る」としたのには意味があるのです。

宮本武蔵が書いた『五輪書』のなかに、「観の目強く、見の目弱く」といふ言葉があります。「見」の目といふのは、真剣勝負の時に相手の剣先や足の動きなどの部分的な所に目が行くことです。ところが「観」の目といふのは、その剣先も足先も見えるのだけれども、相手の体全体の動きが見える、さらに心の中まで見える。さういふ目です。ですからひと口に言ふと、「見」というのはわれわれの肉眼で見る、「観」は心で見るといふ違ひがあると言へませうか。さういふ意味合ひで私はこの「観」を使つてゐるのです。

諸君^{あなた}たちは、第一日目から今日までいろいろな先生方のお話を聞き、先輩の話を聞き、友

と語り、そして、大いに得るところがあつたことでせう。しかしそれをひと言に切り詰めてみますと、ものを「観る眼」を養つたといふふうと言へると思ふのです。

しかし、実際は諸君たちにも私にも「観る眼」は昔から備はつてゐるのです。本居宣長さんは、「そもそも道は、もと学問して知ることにあらず。生まれながらの真心なるぞ、道には有ける」(玉勝間)とおつしやつてをられます。「人の行く道といふのはもともと学問しなければわからないものぢやないのだ、生まれたときからちやんと備はつてゐるのだ」と言ふのです。

ところが、その「真心」「幼な心」といふものを私たちは年をとるに従つて曇らせ、塵芥で包んでしまふから、玲瓏たる光が隠れてしまふわけでせう。合宿に来た日を思ひ出して下さい。何も知つてゐないのに、人に笑はれてはいけなと思つて自分の知識をひけらかした体験があるでせう。ところが、「いやあ、俺は何もわからないんだよ」と素直に言つた時に、皆と心がつつていつた体験をおもちでせう。明治天皇様が

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこころは (「心」明治三十七年)

いつはりの世をまだしらぬ幼子がこころや清きかぎりなるらむ (「子」明治四十二年)

と詠んでをられますやうに、飾らうと思はなければほんたうに人の心は美しいのです。

その美しい心を曇らせる、自分を飾らうといふこころや感謝の心の足りないことから起る

さまざまな愚痴などの塵を取り去つてしまへば、諸君の中に備はつてゐる真心が玲瓏として輝き出してくるのです。

昨日、蓑田誠一先生が紹介してくれた恵美子ちゃんといふ小学生の俳句を読んで、本当に感動しました。この子の眼といふのはどんなにすごいものか。

稲刈りの済んだ田んぼはさみしさう

この俳句に触れて私は直ちに今上天皇の、

藁を焼く煙流るる田の続き日は暮れ行けりみちのく陸奥の里

(昭和四十五年「全国身体障害者スポーツ大会のため岩手県を訪れて」)

といふ御製を思ひ出しました。この恵美子ちゃんちゃんの幼な心といふものは、すごいぢやないですか。われわれを動転させるやうなまなこをもつてゐるではありませんか。

真心に立ち返る道

では心の塵や汚れを取り去り、「幼な心」「真心」に立ち返るには、一体どうしたらよいのでせうか。しかしそれは残念ながら教へることはできないのです。それは頭で知るものでなくて、自分の工夫とたゆまぬ努力にまつしかからず。しかし、さうばかり言つてゐた

のではつれないですから、一つだけそのコツらしいものを伝授しておきませう。

それは、「お父さん、お母さん」と大きな声で呼ぶことです。ほら、下宿にをつて夜寝る時、「お父さん、お母さん、けふ一日無事に終りました、おやすみなさい」と言ふでせう。あれです。諸君が何か物事を決しかねてゐる時には、お父さん、お母さんの名前を呼ぶといひのです。悪いことをしようとする時に、お父さんとおふくろさんの名前を呼ぶと、悲しい顔が浮かびます。さうすると、「ああ、親父とおふくろを悲しませてはいけない」と思つてそれをやめるでせう。ソクラテスには、ダイモンといふ神様がついてゐたらしいですね。その神様は、何かをする時には「やれ」「やめろ」といふふうに命令してくれたのださうです。諸君のダイモンはお父さん、お母さんですよ。諸君が「お父さん、お母さん」といふ呼びかけをした時に、幼い頃に抱かれた親の掌の暖かさと一緒に諸君にさつきから言つてゐる物を観る慧眼といふものが蘇つてくるのです。この「慧眼」といふのは、真心の眼で物を観るといふことです。すると、物事の本質が観えてくるのです。

防人のうた

最後に、防人の歌を紹介して話を終ります。防人といふのは、今から一二〇〇年前関東

から、筑紫の岬を守るために出向いた皆さんと同じ年頃の兵士さんたちのことです。皆さんの知つてゐる歌もあるでせう。

忘らむと野行き山行きわれくれどわが父母は忘れせぬかも
母刀あしとじ自も玉にもがもや頂きて角髪みずらのなかにあへまかまくも

二首目の歌の意味は、「お母さんが玉だつたらなあ。さうしたら、みづらの中に入れてお母さんといつも一緒にゐれるのになあ」といふ歌です。次に、

月日つきひやは過ぐはゆけども母父あししが玉の姿は忘れせなふも

「月日はどんどん経つていくけれども、お母さん、お父さんの玉の姿は忘れられないなあ」といふのです。諸君、お父さんお母さんを「玉の姿」と観るやうな青年になつてくださいよ。

時々ときどきの花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来できずけむ

春は春の花、夏は夏の花、秋は秋の花が咲くといふのに、どうしてお母さんといふ花が咲かないのだらうか。もしお母さんといふ花が咲くものであれば、そばに行つて「お母さん」と言つて睦み合ふことが出来るだらうに、といふ意味の歌です。

大きな声で朗誦して、一一〇〇年昔のわれわれの祖先の、諸君と同じ年頃の青年たちの瑞々しい魂に諸君の身を没してください。御静聴ありがとうございました。



短歌入門

短歌創作導入講義

福岡県立水産高等学校教諭

菅原亨

二



参勤交代石畳

はじめに

短歌を作る意味

短歌の作り方

合宿教室で詠まれた短歌の数々

はじめに

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました菅原です。合宿教室が始まりまして、はや三日が過ぎました。この間、各先生方のご講義や、各班での研修などを通して、さまざまな想ひが皆さんの頭の中をよぎつてゐる事と思ひます。この講義の後には、楽しいレクリエーションが待つてゐますが、今暫くお付き合ひ願ひます。

この合宿の大切な目的の一つに参加者全員、短歌を作るといふ事があります。先程ある学生に「午後はレクリエーションですね」と話したら、「いや、短歌がありますから気が重いですよ」と答へが返つてきました。実は私が短歌を作りましたのも、この合宿教室が初めてでした。ですから、短歌など作れるかなと心配で、楽しい筈のレクリエーションも気がそぞろだつたことを覚えてゐます。

この後、レクリエーションに出かけることになつてゐますが、その道中でいろいろな出来事に対して案外無頓着なことが多いものです。例へば、道端に咲いてゐる小さな花や雲や風の動きなどを何気なく見過ごしてしまひやすいものです。しかし、歌を作らうといふ気持ちでゐますと、何か題材を求めて注意して周りを見ようとします。その時は心を動かして見て

るる筈です。そして、何とか短歌にしてみようとして五、七、五、七、七の定型に当てはめるやう頭を悩ませます。さうしてやつとのことで出来た時には何かホッとしたやうな気持ちにさせられます。私自身がさうでした。恐らく、皆さんも同じ思ひをされることでせう。とにかく短歌創作は気が重いと考へずどうぞ楽しんで作つていただきたいと思います。

短歌を作る意味

さて、まづ私が勤務してゐる水産高校の生徒たちが作つた短歌を御紹介してみたいと思ひます。水産高校には、海や魚に関心を持つ生徒でなければ自らは志望して来ません。大半は仕方なく入学したとか不本意入学で入つてくる生徒です。従つて目的意識の希薄な生徒が多く、少しでも嫌なことや厳しいことにぶつかりますと、簡単に「俺、もう学校をやめる」と言ひ出します。さういふ生徒に対して、その都度担任や生徒指導部の先生が家庭訪問をして説得し修学継続を促す指導を根気強く行つてゐます。

しかし、そのやうな生徒も本音は良く思はれたい、認められたい、褒めて貰ひたいと思つてゐるのです。ですから、良い悪いのけじめをしつかりつけて、しかも手厚い指導をして行けばだんだん心を開いて素直な態度に変はつて行きます。

高校
教諭



さうした生徒に対して本校では折々に短歌を作らせる指導をしてゐます。実は、短歌を作らせるやうになつてから十二年ほど経ちます。表面だけで判断すれば問題を抱へてゐると思へるやうな生徒でも、短歌を作らせてみると案外素直な歌を作ります。言葉使ひは幼稚ですけれども、続けて詠ませていくうちにそれなりに歌らしくなつてきます。さういふ次第で生徒の素直な気持ちを引き出したいと云ふ一点で今まで続けてきました。

実は、ここに挙げました歌は、初めの頃から昨年までの歌を混ぜて紹介してゐますが、これらの歌を見てゐて大切な事に気づかされたのです。それは、十二年前の生徒の学力と現在の生徒の学力の差は段違ひにあるけれども、詠んでゐる歌を見ますと少しも差が見受けられないと云ふことです。学力の差が短歌の優劣につながるといふことは一切ありません。

さうしますと、人の気持ちなり、人の心の動きと云ふものは、何も社会的なものにより區別されるのではなく、その人が本当に素直に感じたことを歌に表現することで広やかな心の世界が生まれるのではないかと思ひます。

まづ出港の歌です。

父母の見送り受けて少しだけ不安で恐い乗船実習

普段は親の言ふことを満足に聞かない生徒ではあつても、この時ばかりは親の姿を有難く感じる。同時にこれからの航海に不安もよぎる。さういふ歌です。

初めての長い航海ドキドキと胸が高鳴りいざ出発だ

不安と期待が入り混ちつた気持ちが良い出てゐる歌です。次は前の歌とは少し違つた気持ちの歌です。

ハワイへ行けと先生達は言ふけれど俺の気持ちも判つて欲しい

本当は長い乗船実習は嫌なのだが、先生は行けと言ふ。そして到頭出港の時が来た。今はあきらめ半分の複雑な気持ちだ。そんな気持ちを分かちて欲しいと詠んでゐるのです。かうして博多港を出て関門橋をくぐり太平洋へ向かひます。外洋に出ますと波風が強くほとんどの生徒達は船酔ひをします。食事もとれない状態に陥ります。回復するのには、早い生徒で三、四日間、遅い生徒では一週間ほどかかります。そのやうな時の歌です。

船酔ひに早く慣れればいいのにな早く慣れれば楽しくなるのに

友達はどうどん船酔ひが治つて楽しさうにしてゐる。その姿を見てみると自分自身が情けないやうな気持ちにさせられるのでせう。早く治つたら皆と一緒に過ごせるのにと云ふ気持ちがよく出てゐます。次は漁場に行つて頑張るぞと云ふ気持ちを詠んだ元氣のよい歌です。

初めての太平洋に夢乗せて「玄洋丸」は漁場へ向かふ

このやうにしてハワイまで約十一日間の航海を行います。二、三日間は船酔ひで何も出来ませんが、それでは実習になりませんから、少々酔つてゐてもそれぞれの仕事に就かせます。

次はさうした中で航海当直の時の歌です。

眠い目をむりやり開けてブリッジへ闇夜に光る北斗七星

外は真つ暗で星が空一杯に輝いてゐる。この生徒は前直者に起こされて眠い目をこすりながら船橋に向かひ、そこで満天の星を見たのでせう。その中に見知つた北斗七星を見つけた時の感動を詠んだわけです。

当直を船酔ひのまま交代し気分が悪く仕事にならず

生徒達は船酔ひで気分が悪くても当直を勤めなければなりません、立つてゐるだけで精一杯ですので、本人にとつてはこの時の当直は本当に辛いものです。

四―八の機関当直終了しデッキに出れば朝日がまぶしい

早朝三時半の真暗なうちに機関室へ当直に入ります。外の景色が見えるでもなし、昼か夜

かも判らない中でやつとのことで当直が終はりデッキに出てみる。すると洋上に燦々と朝日が降り注いでゐる。その景色を見てこの生徒は、まぶしい程の朝日を受けながら仕事が終はつた後の充実感を感じてゐるのです。

さて、いよいよ操業実習に入ります。生徒にとつて大仕掛の漁法で魚を捕るなど全く初めての経験です。縄入れ初日には全員朝早くから起床し、揚げ縄が始まると作業班以外の生徒もコンパスブリッジに鈴なりに並んでどんな魚が揚がつてくるか興味津々と見学してゐます。初めて見るマグロ類やカジキ類の大きさに驚く生徒の姿を見てゐますと、身体は大きくてもまだ子供だなど、可愛ささへ感じさせられます。次はさういふ操業実習にまつはる歌です。

太陽の陽射しを浴びて汗をかき仕事の疲れシャワーで流す

真夏のやうな熱気の中でヘルメットを被りゴム長ズボンと長靴を身につけ、日中四時間も五時間もデッキに出てゐると汗が噴き出てくる。さうした汗にまみれて疲れた身体もシャワーで流せば、なんて爽快な気分なのだらうと感じた歌です。陸では味はへない貴重な経験です。

厳しいな船員さんが仕事するあの真剣な目僕も負けない

大人の船員さんが一所懸命に頑張つてゐる姿を直に見て、この生徒も負けてはゐられない、「よし、僕も頑張る」と意欲に燃えた気持ちが出てきたのです。

揚げ縄で魚見たさにワクワクしボンデン引く手に力が入る

ボンデンと云ふのは浮き玉のことです。直接縄にかかった魚は危険ですから、生徒には引かせません。魚がかかつてゐる枝縄の間にこのボンデンがありますので、早く引き上げないと逃がしてしまふかもしれない。そこで生徒も期待しながら懸命に引くわけです。この操業実習中の歌が一番生き生きとしてゐるのも頷けるものと思ひます。

皆さんにかうした水産高校生の歌を御紹介したのは何も実践発表の積りではありません。人は何事であれ、心に残るやうな感動をした時には必ず歌が詠めるのだと云ふ実例をお伝えしたかつたからなのです。

短歌の作り方

それでは、次に短歌を作る時の約束事について簡単に説明しておきます。

◎「短歌の形式上の原則」

まづ、「五、七、五、七、七」の三十一文字の定型詩になつてゐると云ふことが前提です。しかも「一首一文」となるやう努めることです。一首一文と云ふのは一首の歌が一つの文章になるやうに詠むことを言ひます。つまり、焦点をひとつに絞つて詠むことが大切です。一首二文や三文になるやうなことは避けて下さい。

◎「字余り」「字足らず」について

なるべく定型詩となるやうに作りますが、どうしても字余りや字足らずになる場合があります。まず、「字余り」については、自然な歌のリズムになつてさへゐれば、さほど気にしなくても構ひません。ところが「字足らず」については、内容が舌足らずになつてしまひますので、避けて下さい。短歌としての語調も崩れ、字足らずは不自然な歌になりますから、十分に気をつけて欲しいと思ひます。

◎「題材と用語」について

「題材」は何でも構ひませんが、自分の体験を詠むことが大切です。そして素直な感情を詠むことです。人の眼を意識して言葉を飾らうとすると、心まで飾つてしまひかねません。

「用語」については、本来文語体です。長い歴史の中で伝統を守りながら詠み継がれてきた短歌には、やはり文語体が最も相応しいと云へるでせう。口語では、その情感が伝へにくく、文語でなければ表現できないものもあるのです。しかし、全て文語体で詠みなさいと云はれてもなかなか難しいでせうから、そのやうな時には、無理をしないで口語体で詠んで下さい。但し、本来文語体で詠むべきものですから、これから勉強していただきたい。また仮名遣ひについては、ぜひ正仮名遣ひを用ひていただきたいと思います。

◎「連作短歌」について

複雑な思ひを一首の歌に詠まうとすると無理が生じます。そのやうな時には一つの体験を数首に分けて詠むと、一つ一つの心の動きが明確になります。さういふ風にあふれる感動を数首に分けて詠む短歌の形態を連作短歌と言ひます。ぜひ試みて下さい。

合宿教室で詠まれた短歌の数々

最後に、過去の合宿教室において詠まれた短歌を紹介しておきます。まづ参加学生が詠んだ歌（大学名や学年はその当時のまま）を挙げてをります。初めに、亜細亜大学経四年の松吉基光君の歌です。

合宿地につきて

来年も必ず来ると言ひし友の姿見いだし走りゆくなり
近寄りて顔合はすればお互ひに変はらぬ姿に喜び話す
約束を守りて来にし我が友を我はうれしくたのもしと思ふ

到着したばかりの合宿地で友に再会した懐かしさと喜びが、連作のなかに的確に表現されて
ゐます。

次は同じく亜細亜大学経一年の濱田雄一君の歌で、班別相互批評の場面が詠まれてゐます。
わがうたを心合はせてともどちの直したまひし心ありがたし

「ともどち」と云ふのは「友達」のことを指します。続いて、レクリエーションにおける友と
の交流を詠んだものです。福岡教育大学教三年の柳池圭伊子さんの歌です。

山あひにかかりし虹をながめつつ友らと歌をうたふぞたのし

本当に楽しさうな様子がうたはれてゐます。

締めくくりに加納祐五先生の連作短歌を御紹介いたします。加納先生は、国文研の前身である旧制第一高等学校にあつた一高昭信会からの大先輩でいらつしやいまして、次のやうな素晴らしい短歌を詠んでをられます。

班別討論にて

くさぐさの思ひもちよりつどひこし友ら語らふ心へだてず

思ひかたみにかよふなるべしはりつめし顔かへばせしなごめる見れば

へだてなくとも語ればくさぐさの思ひひとつにとけゆくごとし

もろびとの心ひとつにつながるを国のいのちのくしびといはむ

一首目の「くさぐさ」とは「たくさんの」と云ふ意味です。様々の思ひを持つてこの合宿教室に参加した友達同士が心を隔てずに語らひ合つてゐる姿が見事に表現されてゐます。

二首目の歌は倒置法で表現されてゐます。「顔ばせ」とは「顔」のこと、「かたみに」とは「お互ひに」と云ふ意味です。「はりつめた表情が束の間和んだのを見ると、お互ひの気持ち

が通ひ合つてゐるからだ」といふ内容のお歌です。

そして三首目は、「心の隔てを取り去つてお互ひに語り合へば、それぞれの思ひがまるで一つに溶け合つていくやうだ」といふ意味でせう。

四首目の「くしび」とは、辞書を引きますと「靈妙なこと」とあります。「国のいのち」とありますが、それは決して理屈や観念ではなく「多くの人の心が一つにつながる」具体的な姿だと見てをられるところに心を留めて、このお歌を味はつていただきたいと思います。

創作短歌全体批評

福岡市立奈多小学校教諭

是
松
秀
文



阿蘇の牧場

はじめに

批評と添削

をはりに

はじめに

先程、皆さんの手元に歌稿が配られた時に、「すごいな」といふ声が聞こえて参りましたが、この歌稿はいろいろな人たちの努力のおかげで出来上がったものです。昨晩国文研の先生方が、皆さんが創られた短歌を選歌され、さらに若手の会員のほうがワープロで入力して、今朝の午前四時に出来上がりました。その後アルバイトの高校生たちが印刷して綴りました。多くの人たちの協力で今皆さんの手元にあるといふわけです。このやうにして出来上がった歌稿ですから、大切に扱っていただきたいと思ひます。

まづ相互批評で大切なことは何かと申しますと、それは、「相互批評」であつて、相互批判とか相互非難ではないといふことです。友達の短歌の粗捜しをしたり、冷たい第三者的な態度で接したりすることは慎んでいただきたいと思ひます。また、別に優劣を競ふとか、誰の歌が上手で誰のが下手かといふことを競つてゐるわけでもありません。一番大切なことは、短歌に表れてゐるその人の気持ちをとれだけ推し量ることができるかといふことです。

さうした態度で相互批評を行なふことによつて初めて、正確な表現に近付けていくことが可能になりますし、また、班の中で友達の心が一つになるやうな体験を味はふこともできる

のではないかと思ひます。

批評と添削

それでは、第一班の高橋卓哉君（拓殖大・外四）の歌です。

連日の講義と暑さと寝不足で日々疲れ果て疲労困憊

本当に実感がこもつてゐる歌だと思ひます。ただこの歌の問題点は、「連日」と「日々」といふ言葉、また、「疲れ果て」と「疲労困憊」といふ言葉、つまり同じ意味を表す言葉がだぶつて使はれてゐるところです。短歌はわづか三十一文字ですので無駄な言葉はできるだけ省いて、必要な言葉を選んでいくといふことが大切です。それから、最後を「疲労困憊」とすると、堅い感じがします。ですから、そこを大和言葉を用ゐて軟らかく表現したらいと思ひます。また、初日から疲れ果てたわけではなく、だんだんと疲れがたまつていつたといふことだと思ひますので、次のやうに添削してみました。



連日の講義と暑さと寝不足で日を追ふごとに疲れ
ましきぬ

次は、第二班の田中泰行君（専修大・経四）の歌で
す。

手をたたく友を見つめてゆつくりと神社の門で心
たひらかなり

「ゆつくりと」といふ言葉がどの言葉にかかつて
ゐるのかがはつきりしません。また、「心たひらかな
り」といふ言ひ方はあまりしませんから、ここでは
「心安らぐ」とか「心しづまる」といふやうな表現に
した方が、わかりやすいと思ひますし、「心たひらか
なり」では字余りになつてしまひます。

全体の意味も明確に表現すべきです。友達を見て

みて心が安らいだのか、それとも田中君自身も友達と一緒にお参りをして心が安らいだのか、どちらにも考へられるわけです。やはり、他人が読んでもわかるといふことが大切なことです。前者の場合であらうと憶測して、直してみますと、

柏手を打ちて拝むわが友を見れば心の安らぎ覚ゆ

また後者の場合だとしますと、自分も一緒にお参りをしてみて心が安らいだといふことです。すから、次のやうに表現したら如何でせうか。

御社の門に友らと柏手を打ち拝めば心やすけし

次は、第四班の塚本将史君（大阪芸術大・芸術二）の歌です。

限りなく続く平野の片隅の清い小川も草に隠るる

この短歌は、どこが感動の中心なのかよくわかりません。菅原亨二先生が「短歌創作導入

「講義」で話されたやうに短歌を詠む時には、自分が一体何を詠みたいのかといふ焦点をはつきりさせることが大切です。

塚本君の気持ちや夏草の繁つてゐる勢いといふものを感じて詠まれたと憶測して次のやうに直してみました。

夏草は今を盛りと繁りたり小川の水もおほひ隠して

次は、第九班の丸山忠一郎君（亜細亜大・法三）の歌です。

真剣に御講話される先生の熱き思ひの心に迫りく

読んでみて、せつかくの丸山君の気持ちや具体的に伝はつてきません。概括した表現になつてゐるのです。やはり細かい心の動きまでわかるやうに努めていただきたいと思ひます。

例へば、次の與島誠央さん（福岡県立春日高等学校教諭）の歌のやうに具体的に詠むと、その感動がよくわかるのです。

徳岡孝夫先生の御講義を聞きて

ヒュルヒュルと飛び来る砲弾かいくぐりへりまで必死に駆けゆきしとぞ
駆け込みしへりゆ後方振りむけば煙の中に近づく人影
駆け出せぬ老人の手をとり悠然と歩き来るとふ英国記者はも
己が身を捨つる覚悟で老人の手を取る記者よ益荒男ぞああ

次は、第十一班の大西寛人君（明星大・日本文化二）の歌です。

風そよぐ阿蘇のふもとの庵にて今が楽しき友と語らば

大西君の詠みたいことは、後半の「今が楽しき友と語らば」といふところにあると思ひますので、そこを生かすと歌がもつとよくなると思ひます。

例へば、久保田真さん（熊本県立天草高等学校教諭）の歌も友達のことを思つてゐる歌です。

「合宿に来られて本当によかつたです」とこみ上げる様に君は語れり

学び舎で思ひを語れぬいらだちを語る言の葉力強しも
合宿の喜び語る友どちの言の葉聞けば我も嬉しき

友と向かひ合つて語り合つてゐる様子がよく伝はつてきます。是非、参考にして下さい。
次は、第十三班の小島尚貴君（西南大・経済一）の歌です。

頼り無き私の意見を真剣に論じる友に心打たれり

開会式のあとのオリエンテーションで運営委員長の白浜裕さんが「是非、生涯の友達を作つて帰つて下さい」とお話になりましたが、小島君は、まさにさういふ体験をして歌に詠んだわけです。ただし「私の意見を真剣に論じる」といふ言ひ方はあまりしません。意見を聞いてそれを真剣にみんな語り合ふ、といふことではないでせうか。また「頼り無き」といふ言ひ方は人から見てあの人は頼りないといふ時に使ひますので、ここは自信なきとか拙いとかいふ表現の方がびつたりくるのではないでせうか。

拙かる私の意見にわが友は心を込めて答へくれたり

次は女子班、第二十二班の武内倫子さん（尚綱短期大学・家政科助手）の歌です。

親馬にびたりと寄り添ふ子馬見て幼き頃の吾を思ひ出す

身近な素材ですが、とても素直な気持ちで伝はつてくるいい歌だと思ひます。最後の「思ひ出す」といふのは字余りになりますので、ここは「思へり」がいいでせう。

親馬にびたりと寄り添ふ子馬見て幼き頃の吾を思へり

次に、武内さんと同じ素材で、連作で詠まれてゐる歌に、白石由美子さん（長崎大・教育二）の歌があります。

母親のあとをつけゆく子馬みて幼き頃の我思ひ出す

我もまた二十年を父母に守られて育てられしと思ひて涙す

二首の連作にすることで、感動がより具体的に詠まれてゐます。

次は、第二十七班の伊藤佳恵さん（早稲田大・教育二）の歌です。

はじめての班長なれど班員の笑顔にいつしか心も和む

本当に班長さんは、みんなの心を一つにまとめようと苦労されてゐると思ひます。さういふ中で、同じ班の友達が少しでもこやかにしてくれたら、それが自分のことのやうに嬉しいといふ、とてもいい歌だと思ひます。つぎのやうな表現にすると、もつと気持ちが表れるのではないでせうか。

はじめての班長なれば班員の笑顔ことさら心和ます

次は、第三十四班の養田誠一さん（芦北町佐敷小学校教諭）の歌です。養田さんは、合宿二日に素晴らしいお話をされました。この時のお話の中では触れられなかつたのですが、教へ子に「短歌集」を作らせてそれを長内俊平先生に送られたのです。それで、長内先生がとても喜ばれてその子どもたち一人一人に歌で返事を書かれたさうです。さういふ長内先生と

子供たちの交流があつたのです。そして、その時の子供たちが合宿の初日に長内先生に会いにきたのです。この歌は、この時の心の交流を詠まれた歌です。

「おはいりなさい」と優しい大人の声を聞き頬を赤らむ教へ子三人

をはりに

それでは最後に、国文研の先生方の歌をご紹介しますと思ひます。

最初は、この合宿の運営委員長をされてゐる白浜裕先生（熊本県立第二高等学校教諭）の歌です。

幾人の参加あるかと案ぜしが多数の友を迎へてうれし
心知る友らと準備すすめこしこの一歳を思ひ出だすも

この合宿が開かれるまで、一年近くかけて準備をされてきたその御苦労が偲ばれる歌だと思ひます。

次は、きのう慰霊祭の説明をされました小柳左門先生（国立病院九州医療センター循環器センター長）のお歌です。

斎場の笹の葉ゆらし風吹きて雲間にとほく神鳴りひびく

くもりたる空ながめつつみまつりの今宵は雨な降りそと祈りつ

合宿に年ごと見ゆる師の君の姿を今年は見ずてさびしき

み病にふせ給ひたる師の君のはやいえませと心に祈る

次は、小田村寅二郎先生（国民文化研究会理事長）のお歌です。

三十九年を積み重ね来しこの合宿いま中つ日の夕べを迎へぬ

お二人の大人はそれぞれ心の丈を傾け訴へたまひき

お二人のことばゆ溢るる誠心を二百五十人はいかに受けしか

み国いまおそるべきほど亡国のきざし日増しに高まりゆく時

力なき我にしあれど光輝ある皇御国を守らでやむべき

次は、長内俊平先生（国民文化研究会事務局長）のお歌です。

妻への便りのはしに

眼にしみる阿蘇山のなだりの緑原に浮雲のかけうつりゆくかな
その景色えも言はれずといふ孫のことばを妻に伝へてやらむ

国造神社参拝（白浜君の案内にて）

谷川のさやけき流れ御手洗みたらしに引ける水音神代ながらに

みたらしに口を清めてあかざればなほ掌に受けて頂きまつる

二千年の神杉あるにも知られけりこの御社の古き由来を

宮川のせせらぎききつつことそげる尊き宮に祈りささぐる

心知る友のあたたかきはからひに尊き宮に詣づるをえき

以上御紹介した以外にも素晴らしい歌がありますので、班別相互批評の時に、是非、皆で声を出して読んでいただきたいと思ひます。



青年の言葉

今、
地域の学校に戻るとき

熊本県芦北郡芦北町立佐敷小学校教諭

養
田
誠
一



阿蘇の草花ーリンドウー

私が教師として初めて赴任した学校は、熊本市内にある一二〇〇人程度の大規模校でした。そこに三年間過ごした後、今度は一日にバスが三本しか来ないやうなところに位置する丸米まるよね小学校に転勤致しました。全校生徒が六十人ばかりの小規模校でして、生徒の祖父や父親のほとんどもその小学校の卒業生といふ校区でした。そしてこの小学校こそ私にとつて教師としての自分を振り返つて考へ直す場所となつたのです。

この丸米小学校に赴任して四年目に、三年生と四年生併せて十二人の複式学級を担当したとき、子供たちに俳句をつくりに行かうと呼びかけ、学校の裏山を晩秋のひととき一緒に散策したことがあります。そのときの俳句に子供たちの姿がよく表れてゐると思ひますので、ご紹介します。こんな句をつくつてゐます。

いねかりのすんだ田んぼはさみしそう

途中にはぜの木が立つてゐました。すると、この木を一番元気のいい子供が俳句に詠みました。

真つ赤だなはぜの葉っぱはまけちゃうぞ

次にいよいよ山に登りはじめます。ある子供は、このときの体験を、

山登り景色がよくてきもちいい

ああ秋は山が秋いろきれいだなあ

と表現してをります。山に登ると、下の方に学校が見えました。その光景を、

学校がとてよく見えない気持ち

遠くからチャイムの音が聞こえるよ

と詠んだ子供もみました。散策に出たのは午後からでしたので、五校時が終り六校時の始まりを告げるチャイムも聞こえてきたのです。

裏山には牛小屋があり、それまでも時々子牛を見に来てゐたのですが、めぐみちゃんといふ女の子はその子牛を俳句に詠みました。

牛さんは大きい体がかわいいね

先へ進んで行くと、ひとりの生徒のおばあちゃんが田んぼで私たちがやつて来るのを見てをられたやうで、みかんを下さつたのです。そこで田んぼの畦道に座つてみかんをいただき、さらに近くの川にも足を運びました。

みかんがねすごくおいしいな

川に来て水を飲もうとしているよ

かうして裏山を中心に二時間程度散策して帰校したのです。これらの子供たちがつくりました俳句をご覧いただきますと、私の学校の生徒たちの様子が少しはお分りいただけるのではないでせうか。



さて、五月頃になりますと家庭訪問がありますが、それぞれの訪問先にはお母さんのみならずお父さんがいらつしやることもあるし、お祖父ちゃんお祖母ちゃんまで玄関に出てこられて、「先生、よう来なさいつたあ」と言つて迎へて下さるのです。また何かあるたびに地域の公民館では焼酎を飲まされました。さうした時、生徒のお父さんやお祖父ちゃんたちの昔話をよく伺ひました。「以前は、校長先生は学校の側にご家族で住まはれてゐたので、わしたちは毎晩のやうに校長宅に飲みに行きよつたよ。独身の先生たちも宿直があるからよく集まつてなあ」などと語つてくれるのです。

○ それまで私は学校と自宅を往復してゐただけのやうでした。よく考へて見ると、その間には地域が存在してゐるといふことに気づかなかつたのです。

次に学校における青少年赤十字活動についてお話してみたいと思ひます。この活動には「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」といふ三つの大きな目標があります。この目標に対して子供たちが「気づき、考へ、行動する」ことを目当てに活動するわけです。あるとき、学校長からやつてみたらどうかと提案があり、これはチャンスだと思ひ、取り組み始めました。この青少年赤十字活動を始めた頃から、私は学校と自宅だけを往復できなくなつたのです。すなはち学校を囲む地域に心が向き、足が向くやうになつたのです。

地域には湯の浦温泉といふ旅館街がありまして、その地域の人と語り合ふうちに「芦北小さな地球家族」といふ会ができました。すでに三年ほど続いてゐます。例へば留学生や外国から来日した人たちを受け入れて交流し合ひ、地域の方の自宅に泊つていただく。さらに学校にも留学生を招いて子供たちと交流していただくわけです。子供たちにとつては外国の方に触れる貴重な機会となります。

かうして地域と学校が近づいてくるやうな実感がしてきました。ややもすると、山の子供たちは、おとなしくて人柄はいいのですが、人前に立つたら緊張して自分の思ふところがなかなか言へない面があります。ところが、留学生との交流を通じて次第に自信がついてくるのです。

あるとき、留学生から「あなたの故郷の話をして下さい」といふ質問が出ました。すると

子供たちの間には「あれつ、僕たちは丸米のことをどれだけ知つてゐるのかなあ。芦北や熊本のこと、それから日本のこともどれだけ知つてゐるんかなあ」といふやうな疑問が湧いてきたのです。あらためて振り返つてみると、子供たちも私も自分の足もとをほとんど見てゐなかつたやうに思ひ知らされました。この地域はほとんどが三世代同居でして、中には四世代家族もありますから、子供たちも次第に自分のお祖母ちゃんやひいお祖母ちゃんたちの経験に心を向けるやうになつてきたのです。

さて、先ほどの学校における青少年赤十字活動が四年目の活動に入つたとき、九州各県の赤十字大会が宮様をお迎へして熊本で行はれることになりました。その大会で私の学校の二人の生徒が、二〇〇〇人の聴衆を前に一所懸命に発表をしたのです。もちろん私も嬉しかつたのですが、お祖父ちゃん、お祖母ちゃんたちの喜びやうといつたらありませんでした。

私は、かうした複式学級の子供たちや地域との交流の日々を過ごしてきたのですが、いよいよ転勤することになりました。そこで子供たちと別れる前に再び一緒に山に登つたのです。そして、転任式を明日に控へた夜に次のやうな短歌を詠みましたので、最後にご紹介させていただきます。

丸米を去るにあたつて

まるよね
よとせ
丸米の四年に及ぶ年月を思ひ返して夜の更けゆく

丸米の人に自然に教へられ育まれ来しこの四年間

あたたかき先輩仲間のみ情けにここまで来られし我は涙す
教へ子とそこご家族の皆様の一人一人を思ひ浮かぶる

雨の日も風の日も通ひ来し丸米まるよねへの道も今日が最後なり

有難きかな心やさしき丸米まるよねの人々との出会ひ決して忘れじ
いつの日か再び訪はむ丸米を心のふるさとこの丸米を

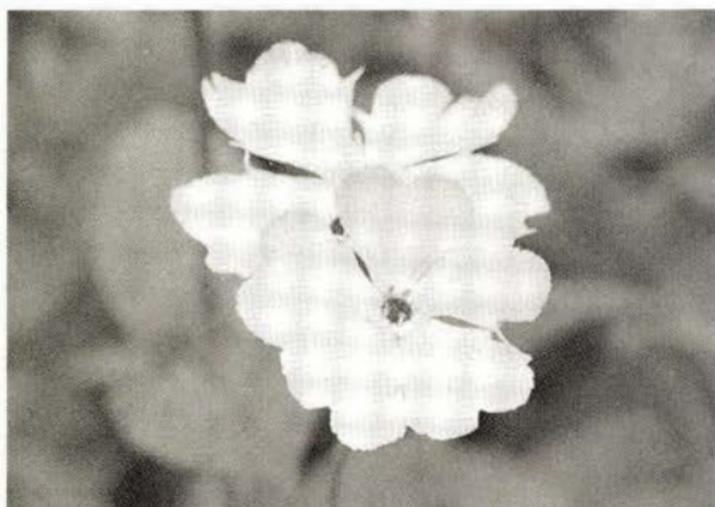
新たなる学び舎で待つ子供らのことを思ひて今宵眠らむ

もつと幸福になる二つの秘訣

㈱福武書店人財組織部勤務

大 島 伸

一



阿蘇の草花—ツクシマツモト—

本日は「もつと幸福になる三つの秘訣」といふ大それたテーマを掲げましたが、私が「幸せだなあ」と感じるときについて話をさせて頂きます。私は、一日の中で自分の心が生き生きと満たされてゐる時間を少しでも多く持ちたいと心がけてゐます。そして今、私は三つのときにすごく自分の充実感を感じてゐます。

一つ目は周囲の方に支へられてゐる、愛されてゐるなあと感じるときです。私は社会人になつて三年目なのですが、実は上司が全然考へ方が違ふ方でなかなか馴染めませんでした。その上司は学生時代に全共闘のリーダーをやつてゐた方で、非常にラチカルといふか、恐いのです。感情の起伏が激しく、毎日怒られます。それも「ちよつと来い！」と呼び出されて、社員みんなの前で怒鳴るのです。「なんでこんなに怒られなきやいけないんだ。僕は一所懸命やつてゐるのに」とか、「何だ、こん畜生！」と言葉には出さなけれど常に思つてゐました。

それでも色々仕事を任せて頂きまして、今年の春、ある大きな仕事を私が担当し終へたときに、飲みに連れていつてもらひました。そのとき、「お前は自分で大きな仕事をした気になつてゐるけれども、お前を支へてゐる人達のことをもつと考へるやうにしなきや駄目だよ」といつた内容のことをお父さんのやうな優しい顔で話して下さいました。それまですごく厳しくて恐くて、震へながら怒られてゐましたが、自分を本当に成長させてやりたいといふ上

司の思ひが伝はつてきました。学生時代に健康を害されたこともあり、今も体調が思はしくないこともありながら、部下のことを考へて下さるのを見て、自然に「自分もかういふ上司のやうな生き方がしたい。自分だけのことではなく、周囲の人や部下にこの上司のやうな思ひで接していきたい」と思ふやうになりました。本当に仕事を通じていい経験をさせてもらつてゐます。

二つ目は、私がこの合宿に参加して一番学ばせて頂いた財産とも云へるやうなことです。人と心が通ひ合ふことが、社会人になつて自分の支へになつてゐるなと感じるときです。

私は大学二年のときに初めてこの合宿に参加したのですが、はつきりいつて人の話が面白くなかつたのです。知識だけはありませんので、人の話を聞かずに、自分の言ひたいことをひたすら言つて帰つたといふ感じでした。そんな風で全然面白くありませんでしたが、何かしら心に残ることがあり、三年生、四年生と参加しました。

印象深かつたのは、班別討論や短歌の相互批評の時間です。短歌の相互批評といふのは、明後日皆さんも経験するのですが、班員の歌をどういふ気持ちで詠んだのかと全員で心を寄せて語り合ふのです。ある班員が長内先生をはじめとする先生方の心に響くお話に感動して、自分を本当に悔いて、「今まで自分は本当に駄目だったんだ」と涙ながらに語ると、こちらもジンとして涙が流れてくる。さういふ経験をさせて頂いたことは、自分にとつて本当に大



きなものでした。

それが、日常生活のなかでどれだけ生かされてゐるかは覚束ないので、苦手ながらも人の話をよく聞くことには一所懸命努めてゐます。よく聞くといふことはとても難しく、私の場合は邪念や疑ふ心が働いてしまひがちですが、しつかりと相手の目を見つめ、時には素晴らしい本を読んで心を澄ますやうに努めてゐますと、相手の喜びなどを受けとめる事が少しづつですが、出来るやうになりました。

例へばあまり教師になる気が無かつた後輩が、二週間の教育実習に行つて、生徒の喜ぶ顔や心が通ひ合つた経験を輝かんばかりの笑顔で話し、「本当に教師になりたい」と言ふのを聞くと、こちらも嬉しくてたまらなくなる。ささやかな経験ですが、日常のなかで大事に考へていきたいと思ひます。自分が辛いときや苦しいときでも相手のことを考へる、例へ

は後輩のことを考へて、どうしてゐるか一枚葉書きを書いたり電話を掛けたり、直接家に行つて励ますなどの地道なことをする中で、自分の悩みや苦しみがいつの間にか消えてしまふことも時々あります。相手と心を通ひ合はせるといふ事はこれからも続けていきたいと思ひます。

三つ目ですが、私はいいい意味でも悪い意味でもストレートに突つ走つてしまふところがあります。大きな夢を描いて、その実現の為に自分を駆り立てていき、実現していく道が見えてくるとすごく嬉しいのです。

自分のことは後で少々話させて頂くとしまして、レジメに取り上げた三浦知良といふサッカー選手の話をしていただきます。彼は夢と努力の人なんです。十五歳の時には県でもほとんど知られてゐなかつた選手なのですが、中学の進路希望調査のとき、第一志望にブラジルと書いたんです。「どんなことがあつてもプロになる」と。サッカーの監督は九九パーセント無理だと止めたのですが、志を変へずに一人でブラジルへ渡り、様々な逆境に耐へて地道な努力をしたのです。今や日本、アジアの代表的な選手ですが、そして今度は世界的な選手を目指して頑張つてゐる彼ですが、その華やかなスター性の背後に地道な努力があるのです。資料を見て下さい。

「僕は努力です。体力とかそういうことでは僕は普通だと思ひます。走る能力とかジャンプ力

だつたらみんなの方が上だと思う。でも、サッカーはそれだけじゃない。自信とか気持ちだとかが大きいんです。ただ、いずれにしても運動能力という面では全然だと思う。だから全部のレベルをもうワンランク上げたいいつも思っているんです。今が一番努力しているんじゃないかと思うときがありますよ。いま考えたと十五、十六歳の頃は本当に努力しているなかつたんじゃないかなつて。でも三〇歳になつたらまた、二十五、六のときは努力が足りなかつたと思うんじゃないかな。努力していなかつたんじゃないかな、いつ一番努力したかなと思ふと、今じゃないかな、そんな感覚です。」

私はこの文章を読むまでは、彼は天才的なプレーヤーで、恵まれた才能を持つてゐる人と思つてゐましたので、とても意外な感じがしました。

私も自分なりに大きな夢を持つてゐます。今の仕事の延長として、人の向上意欲を支援するため、南米へ行つて未知の場所でひたすら動いて何かを掴んでみたいといふ熱い思ひを持つてゐます。誰も何もやつたことが無い所で、自分の可能性を思ひ切り試し、視野を広げていきたいと思つてゐます。なぜ南米かと言ふと、行つた事は無いのですが、こちらが熱意を込めてぶつかればその反応がダイレクトに返つて来る所だと何人もの知人から聞くからです。自分を高めることの出来る環境の中でもつと成長したいと思ふのです。三浦選手の心境には遠く及ばないけれども、夢の実現の為に、英語やポルトガル語を勉強し、何よりも今の

仕事をしつかりとやつて、会社の方に認めて頂き、自分の未来を切り開いていきたいと思つてゐます。

最後に、今年から学生の採用の仕事にも関はり、多くの学生と面接しながら、寂しい感じを持ちます。型破りで熱意溢れる人になかなか出会へません。私自身も大きな事は言へませんが、大きな夢に果敢に挑戦し、失敗しても何度でも挑んでゆく行動力を持ちたいと思ふのです。この合宿で知り合つた友達同士が、それぞれの夢を実現するために切磋琢磨し合へるやうな関係になることを願つてをります。若者らしいエネルギーを持つて共に生きていきたいと思ひます。

世界の現実と
日本人としての生き方

大成建設国際事業本部推進部企画室長

山口秀範



阿蘇の草花—ユウスゲ—

海外で仕事をし、生活をするといふことは、日本での生活経験とはずいぶん違ふものです。場合によってはビジネス自体が立ち行かなくなるといふことも体験致しました。今日はさうした体験をいくつかご紹介してみたいと思ひます。

私は今年の三月までアメリカに八年半在住しましたが、そのうち五年間は中西部のシカゴにゐました。そこで三十階建てのビルを建設し、経営するといふ事業に当たつてまゐりました。五大湖の一つミシガン湖から続く川沿ひの一等地に私が手がけたビルはあります。

このビルを建てる事業のためにシカゴの地元のデイベロップと呼ばれる不動産事業家グループと一九八六年の夏から折衝をはじめ、毎週のやうに打合せを持つたのです。まづプロジェクトの基本的な持ち分比率や配分方法、責任や役割の分担などを謳つた覚書を作成しようとしたのですが、すれ違ひやぶつかり合ひがしよつちゆう起つて思ふやうに前進しませんでした。

大体二ヵ月もあればできる筈だと思つて始めた作業は、結局クリスマス過ぎ、翌年の春にも間に合はず、折衝を開始してから九ヵ月後の一九八七年五月にやうやく調印できさうなところまでこぎつけました。

私は「うまく行つたら今日こそサインできるな」と期待して会議に臨みました。ところが、冒頭に相手方は、出資金の額や利益の配分順位、彼らが提供するサービスに対する対価引き

上げなど、それまで九ヵ月間ひとつひとつ積み上げてきた基本合意を突然変更したいと要求して来ました。土壇場になつてそれまでの双方の努力を無視するやり方に怒り心頭に発した私は、「いい加減にしろ。今まで我々が積み上げて出来上がったこの覚書案は何なのだ」と声を荒げました。それに対してグループの中心パーマー氏は「サインするまでは単なる紙きれに過ぎない」と平然と言ひ放ちました。

しかし後で考へると、実は彼らほどこれまで我々が譲る気があるのか、或いはどこまで本気なのかを試すつもりだつたやうなのです。私が「馬鹿にするな。このやうな交渉のやり方は、今後とても共同事業を進められるとは思へない。打ち切つて我々はすぐ日本に引き上げる」と言つて席を立つたところ、弁護士を通じて、もう一度席につくやう要請があり、その場で一言、パーマー氏は「今晚、パートナーとして一緒に飯でも食はないか」と言つてきたのです。

彼らももちろん必死でビジネスをやつてゐるんですが、一面ゲームを楽しんでゐるやうな雰囲気もあります。ですから、いくら先ほどのやうな喧嘩をしても、その後はまつたくしこりを残さず楽しく食事ができる。どうもこれがアメリカ人のビジネスのやうです。契約についても彼らアメリカ人は、細かなところまですべて文書に規定しようとしています。しかしサインを交した途端に次は少しでも自分たちに有利にその契約を変更しようと思へる。それが彼



らの契約社会の実態です。

例へば、事務所でアシスタントが計算ミスをする
ことがある。そんなとき「この書類は何だ。計算が
間違つてゐるぢやないか」と問責すると、「いやあ、
計算機が間違つてみました」と応へる。しかも、さ
ういふ対応の仕方が、むしろ彼らのビジネス風土の
中では当たり前といふやうな面があります。

かういふ事例はあげたらキリがありませんが、ビ
ジネスの領域だけではありません。当然、日米の貿
易交渉にも、その他の政治的問題にも、以上のやう
な考へ方の違ひといふのは、昔も今も数多くありま
す。

端的な例が日本国憲法です。占領下においてマツ
カーサー司令部が草案を作つたもので、押しつけら
れた憲法であるといふことははつきりしてゐるにも
拘らず、占領解除後も主体的な憲法作りは行はれて

るません。一方アメリカ自身は、独立戦争で勝ち取った憲法を、二世紀の間に二十六回も改訂してをり、現在も次の二十七回目の改訂を国会で審議中です。つまり部分的ではありませんが、平均八年か九年に一度づつ憲法を修正してきてゐるのです。日本国憲法の草案を作つた占領軍も、日本人がまさか五十年間に亘つて何ら変へもせず墨守しつづけるとは思はなかつたといふ氣が致します。

また、アメリカでは一般の社会のシステムが自分の否は認めない傾向が強いわけですから、戦争問題についても、謝罪すれば当然自分の方が悪いことを認めたことになつてしまふ。自分が悪いと認めることは、自分が持つてゐるものを相手に譲り渡すといふ意味であります。ビジネスにおいては「アイ・アム・ソーリー」と言つた途端に、「ぢやあ、過ちを認めた君は私にいくらくれるのか」といふのが常識です。ですから「謝りはしましたが、補償はしません」と言ふのは、彼らの常識からするとアンフェアなことになります。つまり補償する氣がないのに何故謝つたのかといふのが、彼らの常識なのです。

いづれにせよ、仲間内のことだけなら大きな問題にはならないでせうが、価値観を異にする国際社会では、何が常識なのかといふことを考へて行動しなければならぬのです。



ところで私は十四年間ほど世界を見てまゐりましたが、いつたん外国に出ますと、祖国日

本のことを懐かしく誇りに思ひたくなるものです。その祖国を外から見たとき、これだけは改めて貰ひたいと思ふことがありますので、申し上げておきます。一つは、各国とも例外なく無名戦士の墓や碑を一番大切にしていふこととです。ギリシャでもベルギーでもスコットランドの田舎においても、きれいに掃除され花が供へられて自分たちの祖先や先輩の努力、偉業を偲んでをります。ナイジェリアでもさうでした。ナイジェリアのやうな若い国では、クーデタが頻発し指導者が代ります。代つた途端に今まで大事にされてゐた指導者の墓は壊されたりします。しかし、その場合でも無名戦士の墓は変わらずに大事にされてゐます。アジア諸国についてももちろん同様です。

さうした見聞をするたびに、唯一例外としてわが国だけが靖国神社を国民みんなで大事にできてゐないといふことは非常に残念に思ひます。

二つ目は、物を大切にすること、物の豊富さでは恐らく世界一でせう。ところが、それに負けて物を大切に使うことができなくなつてゐる。さういふ状況を黙つて見てゐる外人の眼を意識するときもあります。経済的には成功したけれども、本当に信頼され尊敬される国になるためには、やはり改めなければいけないことだと思ふのです。

そして三つ目に言ひたいのは大学の現状についてです。日本の大学が「レジャーランド」

と呼ばれて久しいわけですが、アメリカの新聞にもこの言葉を用ひて日本の大学の実態が紹介されることがあります。

アメリカでは高校を卒業するときに、みんな着飾つて参加するプロムといふパーティがあります。そのパーティを境目に各人は、一人前の大人として扱はれます。一人前に扱はれるといふことは、責任を持つてといふことです。従つてほとんどの学生が親元から出て一人で下宿したり寮に入つたりする。学費も自分で稼ぎ、そして自分の目的のために勉強してをります。

一方、途上国の大学では大学に進学すること自体が至難の技で、入学できた者は超エリートなのです。ですから彼ら学生は、自分の国を支へる気概を持つて学んでゐます。特に東南アジアの諸国では、大学が市内の一番恵まれた場所に広い敷地を占有して設けられてゐるところを見れば、その位置づけがよく分かります。

さうした諸外国に比して日本では、大学の中にあつて火花が散るやうな学問の場が果たしてあるのかと思はれてなりません。どうか皆さんの力で「レジャーランド」ではない大学にしていたいただきたいのです。

○

さて最後に、十四年に及ぶ海外体験の中で私を支へてくれた三つとは何かをお話しておき

ませう。まづそれは家族でした。海外に出ると、外に對して團結して守り合はうとする単位は家族なのです。私がそれなりの仕事を為し遂げることができたのも、子供たちが外国のローカルな学校でイギリス人やアメリカ人に伍して学ぶことができたのも、家族のきづなだつたと誇りに思つてをります。

次に支へてくれたのは、それぞれの土地でできた新しい友だちです。アメリカで大切にされてゐるサンクス・ギビング・デイの祝日に家族みんなを招いてくれて、その祝日の由来を語り七面鳥の料理をふるまつてくれたユダヤ人の一家族がをりました。またイギリス滞在中に隣に住んでゐた警察官の家庭は、イギリスを離れて七年後に再び訪ねたとき、快く部屋を用意して我々を泊めてくれました。さういふそれぞれの国でできた友だちは私にとつて得がたい宝であり財産です。

そしてもう一つ、私が学生るときから培つてきた友情であります。遠くアフリカの地でも契約交渉中のアメリカでも、毎月送られて来る『国民同胞』誌上で友だちが時々の日本の問題について論じてゐるのを読みながら、力づけられることが度々ありました。

私は折にふれて短歌を作り続けてまゐりましたが、詠む対象は家族のことであつたり、仕事であつたり、或いは旅行などです。短歌とは不思議なもので、自分で作つたときに、それを批評してくれるであらう友だちの顔が浮かんでくるのです。ですから私にとつて異国の地

で一人で短歌を作るといふことは、かつて共に学んだ友だちを思ひ出すことと同じでした。昨日来、私たちは現代日本の抱えてゐる課題についてあれこれ論じたり批判したりしてゐますが、それ自体は実はたやすいことなのです。大切なことは、その課題を自分の外に置くのではなく、自分自身の生き方として隣にゐる友と語り合ひ、考へ続けていくことです。そのやうに努めることが皆さんの今後の一生においてきつと大きな力になると思ひます。

一年の歩み

神奈川県立津久井高等学校教諭

大 日 方 学



朝のつどひ

平成五年八月十日、第三十八回全国学生青年合宿教室が大詰めの四日目を迎へた日、非自民連立政権が誕生し、最初の記者会見に臨んだ細川護熙首相は、先に日本が行った戦争について、「私自身は侵略戦争であった。間違った戦争であったと認識している」と語った。

個人的見解とはいへ、総理大臣として自国の歴史、及び祖国のために命を捧げて戦った先人らの行動を「侵略戦争」として断罪する以上、その発言は、根拠となる歴史事実を提示しての責任ある発言でなくてはならないはずである。然るに細川首相の発言は、あまりに漠然としたものであり、それだけに戦後日本の社会の中で培われてきた自虐的歴史観からにじみ出てきた象徴的な言葉として響いた。

戦後五十周年を迎へようとしてゐる今日、「侵略戦争史観」が世に蔓延するままにしておいて良いのか。合宿教室を終へ、各地に戻った参加者は、切実な問題として昭和史の勉強に取り組んでいったのである。

東京の学生活動の中心となつてゐる正大寮では月に一度、「大東亜戦争」についての勉強会が持たれた。また亜細亜大学では東中野修道先生（亜細亜大学教授）のご指導の下、各週の勉強会が持たれ、主に「短歌のすすめ」の輪読を中心に進められた。合宿も月に一度行はれ、記録が冊子「翌檜」としてまとめられてゐる。関西地区・北九州・熊本・鹿児島においても合宿教室に参加した学生・社会人が集ひ、『日本への回帰』や『日本思想の系譜』（編者・小田

村寅二郎（時事通信社刊）などから適宜文章を選び、輪読を行つていった。鹿児島大学では、農学部三年の葉棚幸輝君を中心とした「しきしまの道研究会」が短歌誌『あかげら』の継続発行を行つた。

秋も深まつた十一月十二日（金）から十四日（日）にかけて佐賀県多久市にある「東原庠舎」（日本最古の孔子廟）において、第二回九州セミナーが開催された。今回のセミナーは「学ぼう！昭和史の真実」をテーマに行はれ、学生・社会人合はせて三十二名が参加した。

導入講義においては與島誠央氏（福岡県立春日高校教諭）が、明治・大正・昭和の歴史概要について発表を行ひ、二日目には坂口秀俊氏（福岡県立門司高校教諭）により日韓問題のポイントとその背景にある歴史事実についての解説、また昭和初期に日本が抱へてゐた重要課題と満州事変についての説明がなされた。引き続き川井修治先生（宮崎産業大学経済学部教授）による「大東亜戦争を正しく理解するために」と題する御講義が行はれた。先生はまづ、「大東亜戦争における日本の行動を一括して侵略と言ふのは、歴史事実に反する」と言はれ、「侵略戦争」の定義を明確にされた。次に大東亜戦争を考察する上での注意点として「時代的考察・大局的考察・相対的考察」の三つの観点が必要であると教示された後、満州事変から日米開戦に至るまでの経緯を丁寧に通つてゆかれた。参加者一同は、先生の緻密な研究方法に感銘を受け、「大東亜戦争といふ史実の眞の姿が、このやうな形で明らかにされて行くなら

ば、「侵略戦争」といふ安易な表現はそれだけで否定されて行くのではないか」との感想を抱く者もゐた。

時を同じくして、東京地区では亜細亜大学法学部三年の松田裕幸君の呼掛けにより、幕末の志士・吉田松陰の輪読を中心とした秋季合宿が開催された。吉田松陰は大東亜戦争の淵源である洋夷来航にあたり、「国の独立」を守る具体的な方策を立てながら、自ら欧米諸国を見聞せんと渡航を企てた。その確固たる志に触れ、今の時代を我々はどのやうに考へ、生きて行くべきかを学ぼうと『講孟箚記』の中の「尽心上篇首章」を心を込めて輪読していった。

北陸地区においては、平成六年二月十八日（金）から二十日（日）にかけて、中田一義氏（株 BBS金明代表取締役）の呼掛けにより「第一回輪読会北陸合宿」が開催され、学生及び社会人合はせて三十六名が参加した。この合宿では、名越二荒之助先生（高千穂商科大学教授）による御講義、今林賢郁氏（株新日本製鉄勤務・国民文化研究会理事）による体験発表、また岸本弘氏（富山県立富山工業高校教諭）指導の下に、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読が行はれた。この合宿の記録は、冊子『雪と酒と立山と』にまとめられてゐる。

このやうに全国各地で合宿教室参加者が協力し合ひ、輪を広げながら、合宿教室で学んだことを更に深めるべく研鑽を積んでいった。そして、その集大成として平成六年三月十九日（土）から二十一日（月）にかけて「春季合宿セミナー」が熊本の阿蘇において開催され、全

平成六年 春期合宿セミナー 一日 日程表	3月19日(土)		3月20日(日)	3月21日(月)
	7:00			朝の集ひ
8:00			朝食	朝食
10:00			講義 坂口秀俊氏 質疑応答	班別研修
12:00			班別研修	全体研修 感想発表
13:00			昼食	昼食
14:30			散策 短歌創作	閉会式
15:00	開会式		講義 名越二荒之助 先生 質疑応答	解散
17:00	所懐表明			
19:00	夕食 入浴		夕食 入浴	
20:30	講義 絹田洋一氏		班別研修	
21:30	全体研修			
22:00			懇親会	
23:00	就寝		就寝	

国から学生十四名、社会人二十三名が参集した。

この春季合宿セミナーのテーマは、「昭和史・大東亜戦争を学ぶ」であり、先の第二回九州セミナーにひき続き、大東亜戦争についての理解を深めることが主眼であった。

導入講義は、絹田洋一氏による「昭和天皇と昭和史」であった。氏は大東亜戦争の経緯を辿りながら、「立憲君主制」をあくまでも守らうとなされた昭和天皇がそのときどきの時局において、どのやうなお考へを抱かれ、そして対応されていかれたのかを克明に語つてゆかれた。二日目の午前には、坂口秀俊氏により「大東亜戦争を考へる」と題する講義が行はれた。氏は大東亜戦争を考察する上での留意点として、一面的な見方をするのではなく、世界的な観点から捉へること、東京裁判史観を払拭すること、既成の歴史観に囚はれず歴史事実をおさへることを指摘された。そして、この視点に立つて日露戦争から開戦に至るまでの経緯を詳しく説明してゆかれた。

二日目の午後には、名越二荒之助先生による御講義が行はれた。先生の御講義は大東亜戦争における日本軍・及び日本人の美談を中心としたもので、スライドを交へながらの視覚的なものであった。特にパラオにおける日本の守備隊の戦ひぶり、またシドニー湾攻撃における日本軍人の敢闘が現地の人々に感動を持つて受け止められ、今なほ賞賛されてゐることを語られた。そして、我々日本人自身がいかにさうした誇り得べき事実を閑却してしまつてゐる

るかを訴へられた。先生のお話は、当時の中国の情勢、インド独立の経緯、また各国の教科書における大東亜戦争についての記述のされ方など広範囲に及ぶものであった。参加した学生の中には「大東亜戦争を考へる上で重要なことは、その当時の世界情勢などのデータを慎重に見ることも大事ではあるが、それに加へてその時代に生きた人々に共感し、御亡くなりになられた方々への慰霊の心を持つ、さういふことが勉強していく原動力になり、私たちの歴史に対する取り組み姿勢の支へになるのだといふことを強く思ひました」といふ感想を抱く者もあつた。

参加学生は合宿終了後、葉棚君の案内で鹿児島を巡訪し、知覧にある特攻記念館や南洲神社を訪れるなどし、親睦を深めた。そして、夏に阿蘇で開催される第三十九回全国学生青年合宿教室での再会を約し、春からの新たな勉学に胸を膨らませつつ各地に散つて行つたのである。

〈地区合宿〉

主 催	年 月 日	場 所	参 加 大 学
亜細亜大学 日本文化研究会	平成五年九月四 日～五日	神奈川 津久井 「相模湖ユースホテル」	亜細亜大
亜細亜大学 日本文化研究会	平成五年十月九 日～十一日	東京 西多摩 「亜大セミナーハウス」	亜細亜大
九州・中国地区 有志	平成五年十一月 十二日～十四日	佐賀 多久 「東原庵舎」	九州国際大・鹿児島大・ 宮崎産業経営大
東京地区信和会	平成五年十一月 十二日～十四日	神奈川 厚木 「七沢自然教室」	亜細亜大・中央大・ 東京大・横浜国立大
北陸地区有志	平成六年二月十 八日～二十日	富山 「富山県立青年の家」	福井大・福井工業大・ 金沢大・金沢工業大・ 富山大・上田女子短大

亜細亜大学 日本文化研究会	亜細亜大学 日本文化研究会
平成六年二月二 六日～二七日	平成六年五月七 日～八日
東京 「高尾ユースホステル」	東京 「東京国際ユースホステル」
亜細亜大	亜細亜大

合宿教室のあらまし

関西学院大学文学部三年

竹岡淳



合宿参加者記念撮影

第三十九回全国学生青年合宿教室は、平成六年八月六日から十日までの四泊五日、熊本県阿蘇町にある阿蘇の司・ピラパークホテルにおいて開催された。合宿会場は世界一の広さを誇るカルテラの真只中に位置し、雄大な阿蘇の山々を臨んでゐた。近年に無い記録的な猛暑の中、開会二日前には国民文化研究会会員数名と学生数名が現地入りし、事前の準備作業を行なつた。作業は着々と進み、「友よ！と呼べば 友は来りぬ」の垂れ幕も張られ、開会式を待つのみとなつた。

合宿教室の参加者の内訳は次の通りである。

（学生班 五八大学）

（数字は参加学生数）

拓殖大14、尚綱大7、福井工業大6、富山大5、金沢大5、金沢工業大5、熊本大5、宮崎産業経営大5、防衛大4、早稲田大4、長崎大4、東京大3、亜細亜大3、専修大3、熊本学園大3、中央大2、日本大2、明星大2、青山学院大2、九州大2、西南学院大2、福岡大2、中村学園大2、佐賀大2、鹿児島大2、尚綱短期大2、東北女子短期大2、山形大1、京都市大1、京都外語大1、奈良大1、奈良県立商科大1、大阪市立大1、県立山口女子大1、愛媛大1、福岡教育大1、東北女子大1、駒沢大1、文化女子大1、明治学院大1、東京農工大1、創価大1、学習院大1、国学院大1、明治大1、東京理科大1、立教大1、大阪国際大1、関西大1、大阪芸術大1、佛教大1、龍谷大1、関西学院大1、久留米大1、

日本デザイナー学院1、九州国際大1、第一経済大1、九州造形短期大1。

計一三一名(うち女子四一名)

(社会人・教員参加者) 三一名

(招聘講師) 二名

(国民文化研究会) 八三名

(事務局) 五名

(写真) 一名

総計 二五三名

8月9日(火) (第四日)	8月10日(水) (第五日)
(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ・朝食
(講義) 小田村寅二郎先生	(合宿を顧みて) 白濱裕氏
班別輪読	参加者感想 自由発表 感想文執筆及び 第2回短歌創作
昼食	班別懇談・清掃
(講話) 長内俊平先生	閉会式
班別研修	昼食・解散
(短歌全体批評) 是松秀文先生	
地区別懇談	
夕食 入浴 休憩	
班別 短歌相互批評	
夜の集ひ	
就床	

		8月6日(土) (第一日)	8月7日(日) (第二日)	8月8日(月) (第三日)
		6:30		(起床) 朝の集ひ 朝食
8:30			(講義) 徳岡孝夫先生	(講義) 小堀桂一郎先生
10:00			質疑応答	質疑応答
11:00			班別研修	記念写真撮影 班別研修
12:30			昼食	昼食
2:00	開会式 オリエンテーション		(講義) 山内健生先生	短歌創作導入講義 菅原亨二先生
3:30				レクレーション
5:00	自己紹介 班別研修	班別研修	班別研修	短歌創作
7:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩
8:30	(合宿導入講義) 絹田洋一先生	(所感発表) 義田誠一氏 大山島口秀範氏		映画鑑賞
10:00	班別研修	班別研修	班別研修	慰霊祭説明
				慰霊祭
				班別懇談
	就床	就床	就床	就床

第三十九回「合宿教室」日程表

参加者は合宿申込書のアンケートに基づいて六名から八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加者や過去の合宿参加者、国民文化研究会会員が班長となつた。男子学生は十三箇班、女子学生は七箇班、社会人は一般三箇班、教員一箇班に分けられた。

第一日（八月六日）

〈開会式〉

午後二時、全国各地から集まつて来た参加者が一堂に会し、まづ九州国際大学法経学部四年佐藤公治君によつて開会宣言がなされ、第三十九回全国学生青年合宿教室が始まつた。国歌を二度斉唱した後、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。次に主催者を代表して、国民文化研究会副理事長小柳陽太郎先生が登壇され、「先人を偲び、その身になつて考へようとすることは、古今東西を問はず大切にされてきた。それは友情を育むことにも、真の学問を身につけることにも、現代の世界情勢を見ることにもつながる。合宿では心を開いて語り、耳を傾け合つて生涯の友人を見つけてほしい」と述べられた。最後に参加者を代表して、熊本学園大学商学部三年の喜多村純君が「自分自身を見つめ直す機会にしよう」と呼び掛けた。



続くオリエンテーションでは、まづ熊本県立第二高等学校教諭、白濱裕合宿運営委員長より「心を開いて聞く、そして語るといふ心構へで、相互に学び合ふ友として四泊五日の日程に参加させよう」と合宿の趣旨説明がなされた。続いて熊本県立天草高校教諭久保田真指揮班長によつて合宿期間中の細部にわたる注意事項が伝達された。

この後、直ちに参加者は各自班室に戻り、合宿に参加した動機や理由あるいは普段の生活などを交へながらお互ひに自己紹介し、昨年の合宿教室の記録である『日本への回帰 第二十九集』の輪読を行なつた。

〈講義〉

合宿導入講義として、大阪府立交野高校教諭絹田洋一先生が「運命の大東亜戦争」と題して話された。

先生はまづ、現在の日本について、湾岸戦争の際の狼狽ぶり、謝罪外交、学校での国旗・国歌の指導拒否などの例を挙げ、「この様に異様な状況になつた原因は、敗戦後の米軍の占領政策にある」と語られた。その代表的なものとして、神道指令と東京裁判を挙げられ、前者には「大東亜戦争」といふ呼称を禁止することで日本の大義名分を抹殺する目的があり、後者は「一部の軍国主義者が侵略戦争を引き起こした」といふ觀念を国民に植ゑ付けた欺瞞に満ちた裁判であつたことを指摘された。最後に、終戦を決定した御前会議での天皇の御言葉や当時の国民の心情を丁寧に紹介していかれた。

〈班別研修〉

講義の後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行つた。まづ皆で講義の内容を確認し合ひ、続いて講師が一番伝へたかつたことは何か、各自が最も感銘を受けたことは何かを中心に討論が行はれた。最初はやはり緊張の為か沈黙の続く班が多く、また活発に意見が飛びかつた班でも独善的意見のぶつかり合ひに終始するきらひがあつた。しかし、いづれの班も班員同士が打ち解け合ふに従ひ、「互ひに心を開いて語り合ふ」といふ合宿の趣旨に添つた研修が進められていつた。

第二日目（八月七日）

合宿参加者は、毎朝六時半に起床し、各自洗面・清掃を済ませた後、阿蘇の山並みを望む広場に集合し、「朝の集ひ」に参加する。国歌斉唱に合はせて、国旗の掲揚、ラジオ体操、連絡事項の伝達などが行はれ、一日の研修を心新たに迎へた。

〈講義〉

午前中には、ジャーナリストの徳岡孝夫先生が「国際情勢をどう見るか——マスコミを信じるべきか」と題して話された。先生はかつて米国の大学院で、「言論は自由だが、それには責任が伴ふ」といふことを学ばれた体験を話され、それに比して、ヤラセ報道が横行し、見識のある独立した新聞記者がゐなくて、新聞社員ばかりになつてしまつてゐる日本のジャーナリズムを痛烈に批判された。そして、「かうしたマスコミに対処するには、みづからの経験に照らした世間智や大人の判断こそ必要」と述べられた。

〈講義〉

午後からは、神奈川県立厚木南高校教諭山内健生先生が、「其は『義眼』なるや『肉眼』な

るや—『本然の我』に立ち戻る日はいつか」と題して話された。先生は個人の幸福のみが最優先され、国家の自立がないがしろにされてゐるわが国の現況について話された。さらに所謂、「南京大虐殺」について、真相の究明に立ち上がらうとしない新聞各紙の報道姿勢を厳しく非難された。次に戦後の占領軍の「ウォー・ギルド・インフォメーション・プログラム」といふ恐るべき政策を紹介された。また戦後の賠償問題についても触れられ、日本は全ての連合国と条約を結び、必要な場合は賠償等の支払ひを済ませてをり、その努力が国連加盟といふ形で認められたことを話され、さうした経緯を無に帰するやうな言論界や政界の動きを厳しく批判された。

〈所感発表〉

初めに、熊本県芦北町立佐敷小学校教諭の蓑田誠



一氏が登壇された。氏は丸米小学校に勤務されてゐたときの、地域の人々との交流や児童との青少年赤十字活動、教育訪華団への参加の体験を語られ、「誇りを持つて自分の故郷や国を語ることの出来る人づくりを目指して、学校と地域が連帯を深め、同じ方向性をもつて教育に当たりたい」と話された。続いて、(株)福武書店人財組織部に勤務されてゐる大島伸一氏が登壇された。氏は自分が幸せだと感じるのは、自分の心が満たされ、生き生きとしてゐる時だと言はれ、採用担当者として出会ふ若者で熱意に満ち溢れた者がゐないと語られ、我々に夢を持ち、その実現の為に切磋琢磨して頑張つてほしいと言はれた。最後に、大成建設(株)国際事業本部室長の山口秀範氏が登壇された。氏は外国と日本の常識、文化の違いを、海外滞在十余年の経験を通して語られ、「現代日本の課題を自分自身の生き方の問題として、隣にゐる友と語り合ひ、考へ続けていくことが我々に出来ることです」と話された。

第三日目（八月八日）

〈講義〉

三日目の午前、明星大学教授・東京大学名誉教授小堀桂一郎先生が「一神教的価値観と日本人——日本における超越者の思想の系譜」と題して話された。先生はまづ、「明治、大正期

に日本の個人主義観や近代的倫理は完成されたやうに見えたが、大東亜戦争の敗北により、さうした見方に懐疑的な風潮が広まった」と話された。続いて「四百年前、我々の先祖はキリスト教文化の攻勢に勝利を収めたのに対し、現在の我々は敗北の過程にあるのではないかと危惧され、わが国の「文化防衛」の為には、キリスト教の唯一神に相当するものとして、古来より受け継がれてきた「天」といふものを改めて認識する必要があると述べられた。

へ短歌導入講義・レクリエーション

午後からは短歌創作の手引きとして、福岡県立水産高校教諭菅原亨二先生が講義をされた。先生はまづ、歌を創ることで自分の物の見方が鍛へられ、適切な表現を得たときの喜びは何物にも代へがたいものがあると言はれながら、乗船実習に出たときの生徒の歌を紹介された。そして、素直な気持ちのままに詠むこと、長い歴史を持つ文語体表現に親しむこと、歴史的仮名遣ひに心がけることなどの作法を説明されて、誰にでも短歌は必ず創れます、と皆を励まされた。

その後の散策は贄塚が予定されてみたが、天候が悪くなつたために止むなくホテル近くの熊牧場・阿蘇神社などに出ていった。中には諦め切れずに贄塚へ向ふ班もあつたが、幸ひ雨にたたられる事もなく、丘の上からは雄大な阿蘇の景色が展望できたやうである。初めての

短歌創作に苦勞する者も見られたが、夕食後には各班毎に全員の短歌が提出された。

〈映画鑑賞〉

夜は大分県立日田高校教諭石井雅晴氏により映画「皇室と日本人——現代に生きる伝統の心」の説明とその上映が行はれた。氏は上映に先立ち、皇室と国民の理想的な関係、なぜ皇室は永く引き継がれてきたのか、神話に語られた理想とは何か、大嘗祭の意義、等に心を留めて見てほしいと話された。参加者の多くは、初めて皇室の伝統的儀式や神話に触れ、日本に息づく太古の命を感じたやうであつた。

〈慰霊祭〉

三日目の夜は慰霊祭が執り行はれたが、それに先立ち国立病院九州医療センター循環器センター長小柳左門先生がその意義や作法を説明された。先生は初めて慰霊祭に臨む参加者に対し、古代から全国津々浦々の神社で行はれてきた厳粛な儀式であつて、一宗一派に偏したものではないことを話された。また、文化勲章を受賞された洋画家・田崎広助氏の「自分は阿蘇山の絵を描くときは、いつも最初にお祈りをします。この阿蘇を描かして頂いてありがたいと思ひながら描く。そして描いた後はまたお祈りをします」といふ言葉を紹介され、日

本の風景や私たち自身の命も父母、祖父母、さらに祖先の祈りのなかに存在してゐることを説いてゆかれた。そして、かけがへの無い命を祖国に捧げられた方々を偲びながら慰霊祭に臨んで下さいと結ばれた。

参加者はその後、朝の集ひの広場に設営された齋庭に整列した。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

と和歌朗詠の後、深い警蹕の声、最敬礼。戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊をお迎へする。献饌の後、参加者を代表して橋本フォーミング(株)営業部長古川修氏が祭文を奏上、日商岩井(株)ガス・石炭本部・副本部長澤部壽孫氏が明治天皇・昭和天皇・今上陛下の御製を拝誦された。

〈祭文〉

平成六年八月八日われら第三十九回全国学生青年合宿教室に集ひ学べる者らこそぞりてここ火の国阿蘇の根子岳・高岳・中岳をはじめとする秀峰の麓さやけき草原を齋庭と定めきよめまつりてとこしへにみ国まもります遠つみ祖たちまたみ国のために尊きみいのちをささげま

ししあまたのはらから達のみ霊を招きまつりなぐさ
めまつらむとみ祭仕へまつらむとす

今宵み空はるけく神のみ霊うつしくわれらが上に
のぞみまします 願れば戦火をさまりて四十九年の
歲月矢の如く過ぎ去りわが国の世界における地位は
いよいよ高まりゆけどもことにこの一年の政治・外
交千々に乱れみ国の行末誠に危ふき道をさまよへる
がごときかと胸ふさがれ憂ひいやますばかりなり

されどわれらここに集へるものたちはみなこの美
しき大和島根の遠き古へより今にいたる歴史を正し
く学びみ祖たちのきびしくもまたおほらかなるみ心
をしのびまつりおぞましき東京裁判史観をことごと
く打ちくだき学びのにはに教へのにはにまた言論の
分野に政治・法律・実業のすみずみにまで積もりな
す世のまがごとのことごとを打ちてしやまむと誓ひ
まつらむ



天がけるみ祖のみたまよ願はくはわれらのゆくてをまもらせ給へと合宿教室参加者一同に
代り古川修謹み敬ひ畏み畏みも白す

(明治天皇御製)

友

もろともなたすけかはしてむつびあふ友ぞ世に立つ力なるべき

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

蟲聲

さまさまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

（昭和天皇御製）

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

（今上陛下御製）

沖繩平和記念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

勤労奉仕の人々に会ひて

地方より奉仕作業に來し人に痛みつつ聞く長雨のわざ

第四日目（八月九日）

〈講義〉

合宿四日目の朝は国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が、「近・現代（二八四四―一九九四）百五十年間の日本の歩みの中で天皇と大部分の日本国民は、どのやうな思ひで相對して来たか」と題して話された。先生は明治から大東亜戦争に至る日本の歴史を惡として否定しようとする風潮が充満してゐることを遺憾なものとされ、近現代の日本の歴史を實際の史料を辿つてゆく中で、参加者に感得してほしいと話された。初めに先生は幕末の孝明天皇の御文章『御述懐一帖』を示された。激しい動乱の只中で、国内人心の一致をひたすら願はれる御心を御言葉に偲びながらの御講義によつて、参加者の胸には孝明天皇のお気持ち直に伝はつていつたやうであつた。更に孝明天皇の御製、それに應へる吉田松陰の『対策一道』と史料が読み進まれるにつれて、君民一体のわが国の姿が如実に現れていつた。その後、明治天皇の「五箇条の御誓文」「大日本帝国憲法の前文」「教育勅語」と展開するに従ひ、歴代の天皇方の祖靈に対する敬虔なお気持ちによつて幾多の苦難を乗り越えて今日まで来たことが強く感じられたのであつた。

〈講話〉

午後からは国民文化研究会事務局長内俊平先生が「若き友らへ語りかける言葉——物を観る眼」と題して話された。先生は二十年以上もの間「美しいものは、なぜ美しいと感じるのか」と考へ続けて、錦江湾を船で渡る際に夕日が落ちる風景を眺めてみて雷に撃たれるやうに分つた御経験を語られた。「一木一草が神そのものであり、その神と自分の心が感応するときに美を感じる」とのお話、時に和歌の朗詠を交へ、時に迷ひの心を打ち破るが如き獅子吼は参加者の心を揺さ振つた。さらに、「両親を思ふ幼な心」に立ち返ることの意味合ひを説かれるお話には、一同懐かしい思ひを強くしたのであつた。

〈創作短歌全体批評〉

前日に提出された参加者全員の和歌は先生方による選歌に始まり、原稿作成、印刷製本と夜を徹しての作業が進められ、歌稿にまとめられた。参加者は自分の短歌が載つた歌稿を手にして、福岡市立奈多小学校教諭是松秀文先生の御話を聞いた。先生は優劣を競ふ事無くお互ひの心情を温かく汲み取る姿勢で相互批評に臨むことの大切さを説かれ、各班から一首づつ和歌を取り上げて用語や文法の誤り、不正確な言葉遣ひを添削してゆかれた。講義は時に爆笑の渦となり、和やかなひとときを過ごした。参加者は次々と添削される事例に言葉遣ひ

の大切さを感じ取ったあと、夜の班別短歌相互批評に臨んだ。

また夕食前の時間を利用して、地区別の懇談会が行はれた。合宿中は班別に行動することが基本となるため、同じ地区出身の参加者との交流を少しでも実現しようといふものである。自己紹介や、地区別の活動案内などが行はれ、合宿終了後も共に学んでゆかうとの呼び掛けがなされた。

〈班別短歌相互批評〉

夕食後の相互批評は、各班室で和やかな雰囲気のもと行はれた。お互ひに素直なところで臨まうとするこのひとときは、時に自己主張に陥りがちであったそれまでの班別研修から一歩進んで、お互ひの心を寄せ合ふ時間となる。班室からは和やかな笑ひ声がよく聞こえてくる。一方では、心を開けなかつた



班員の苦しい胸のうちが語られ、励まし合ひ、涙する班員が出た班もあつた。いづれにしても和歌を通じて得られる共感の世界を体験したのであつた。

〈夜の集ひ〉

四日目の夜は参加者一同が心待ちにしてゐた夜の集ひが行はれた。今年もアサヒビール飲料(株)取締役坂東一男氏のご好意によるビールの差し入れがあつた。小田村寅二郎理事長の乾杯によつて始まり、各班や名大学は僅かな時間を利用して準備してきた出し物を披露した。また指揮班によるクイズもあり、会場は爆笑や喝采で大いに盛りあがつた。本会の会歌である「神州不滅」「進めこの道」の由来の説明や歌唱指導も行はれ、全員の合唱のうちに夜の集ひは幕を閉じた。この後、参加者は各班室に戻つたが、尽きる事のない語らひに夜を更かした班もあつたやうである。

第五日 (八月十日)

〈合宿を顧みて〉

最終日の朝はまづ、熊本県立第二高校教諭白濱裕合宿運営委員長から合宿全体を振り返つ

ての所感が語られた。氏はこの四泊五日が今ではずるぶん長い時が経過したやうに思はれると語り、我々の過ごした時間が緊張した精神生活であつたからであると指摘された。普段の生活ではいつも緊張してゐる訳にはいれないが、時として真面目になり、人生や国の行く末を真剣に語り合ふことの大切さを身を以つて経験してきたことを強調された。また、物の見方や考へ方を誰かが与へてくれるのを待つのではなく、自ら探し求め、生涯の友となつてゆかうと激励された。

〈全体感想自由発表〉

司会者の呼び掛けにより、最初はやや間があつたが、参加者は合宿で得た熱い思ひを次々と登壇して語つていった。「恩師に誘はれるままに参加したこの合宿は本当に掛けがへないのであつた」と涙ながらに語る学生を初めとして、「普段使ひ慣れない頭を一生懸命使ひ、良い勉強をさせて頂いた」と明るく語る者もゐて、ある時は共に笑ひ、またある時は共に胸の熱くなる時間を過ごした。「これから大いに勉強しようといふ意欲が湧いて来た」「短歌をつくつてみて言葉の大切さが実感できた」「故郷の父母がとても恋しくなつた」等々、次々に登壇者は合宿参加の感想を発表した。

まだまだ登壇者の話を聞きたい気持ち振りきり、一同は班室に帰り最後の懇談や感想文

執筆、第二回の和歌創作に取り組んだ。

〈閉会式〉

いよいよ閉会式となつた。国歌斉唱の後、早稲田大学政経学部四年伊藤華恵さんが参加学生を代表して登壇し、「私にとつてこの合宿は、年に一度自分の大切な場所に帰つてきて、自分をもう一度確認し、新たに一年間頑張つていく力を与へてくれる所です。私は日本の国が好きです。なぜかと問はれば、今はこの国に生まれたから好きですとしか答へられませんが、長内先生の御言葉のやうに、日本について聞かれたら、恥づかしながら私を見てください、と言へるやう自分を高めてゆきたいと思ひます。私が生まれる前から三十九年間もこの合宿を開いてきてくださった先生方に本当に感謝してゐます」と声をつまらせつつ話した。引き続き主催者を代表して国民文化研究会副理事長・榎千代田コンサルタント代表取締役専務の上村和男氏が、「心知る友とかたれば心なごみながるる涙とどめかねつも」といふ三井甲之先生の和歌を紹介され、「本当に日本は素晴らしい国であると思ひます。私達は共に手を携へてこの国を守り受け継いでゆきませう」と呼び掛けられた。

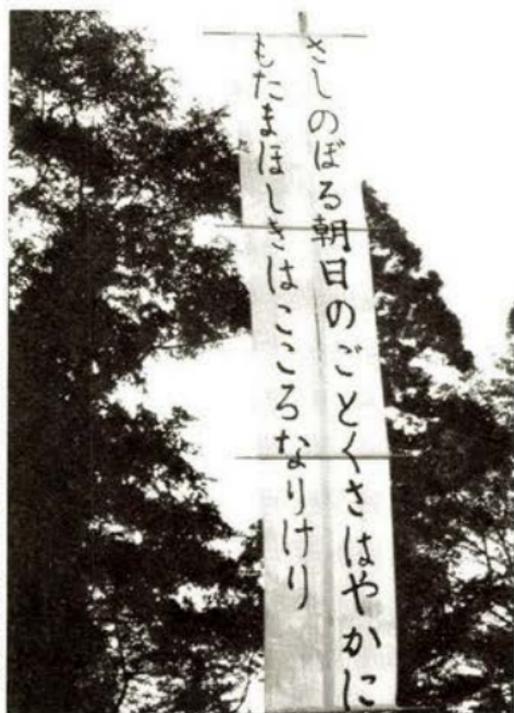
参加者は「神州不滅」を斉唱し、関西学院大学文学部三年竹岡淳が閉会宣言を行ひ閉会式を終へた。最後に互ひの今後の活躍を期して「進めこの道」を高らかに歌ひ合宿教室は全日

程を終了した。

参加者は大きな荷物を携へて帰路についたが、ホテルのロビーや班室では名残り尽きない別れの風景が見られた。来年の神奈川県厚木で開かれる合宿での再会を誓ひ合ふ姿も見られ、しばらくはカメラのシャッターの音が絶えなかつた。



合宿詠草



広場に掲げられた明治天皇御製

〈合宿に臨む〉

阿蘇までの道のり重きこれからの不安を胸にタクシーに乗る
東北女子大 家政四 寺山知寿

肩たたたく音に気がつきふりむけば目に飛び込みぬ友の笑顔の
関西学院大 文三 竹岡 淳

胸張つて声出し歌ふ君が代のうたの美しさあらたに感ず
学習院大 法四 山内將生

この国に伝はるものの美しさしかと学ばむ心すまして
早稲田大 政経四 伊藤華恵

○ 朝の集ひ

風をうけ陽に照らされて美しくはためくさまに言葉いでこず
青山学院大 理工二 山内眞起子

荒尾市立第五中学校教諭 坂本 順子

風さそふラベンダー香せり吾れもまたすがし心をもたむとぞ思ふ

拓殖大 外国語二 坪井 健

集ふ我ら見守ることく朝空に立ちたる山にわが父思ふ

熊本学園大 商三 濱口 知久

日の丸を尊ぶ心学ぶこと一つだけでも得たもの多し

講義

長内先生の御講話を聞いて

日本大 農獣医二 安東 高明

清らなる幼心を持ちてこそ美しさ見ゆと師はのたまひぬ

九州大 文二 井野口 武志

小田村先生の御講義を聞きて

若人に切に語ります師の君の叱咤の声は痛々しくも

「僕の目を見なさい」といふお言葉に伝はりて来るは師の願ひなり

師の君のあつき思ひに応へ得る生き方したし若人なれば

宮崎産業経営大 経三 丸田 武史
床につき今日一日を振り返りふとよみがへる先生の声

壇上で外国のこと語ります我が父の姿誇らしく思ふ

東京大 文三 山口 花子
社会人 小馬谷 秀吉

○ 養田誠一さんの所感発表を聞きて

丸米の地域と子らの交流を愛こめ語る友に涙す

交流

自らの悩みを友に言ひ出せばみな真剣に耳傾ける

明星大 日文二 大屋 淳

頼り無き私の意見を真剣に論じたる友に心打たれたり

西南大 経一 小島 尚貴

思ふことうまく言へねど真顔にて聞きくれる友はありがたきかな

宮崎 神宮 川越 篤

尚綱大 文一 鳥飼 美智子

内にある思ひを言葉になすことの難しくしてはがゆく思ふ

早稲田大 教育二 伊藤佳恵

はじめての班長なれど班員の笑顔にいつしか心も和む

中央大 文四 草野直樹

一日を振り返りつつ班友等とくつろぎ語らふときぞ楽しき

九州大 文三 別府秀俊

悩みたるころのうちの語りたる班友とものころにこたへざらめや

生くるべき道定めむとひたすらにおもふころはまなざしに見ゆ

他は他われはわれとふ友どちの言の葉聞くはさびしかりけり

傷つかむころおそれ人々とき合ふことをいとふとふ班友

もろともにころかよはし生きたしと君の思ひの伝はりて来ぬ

東京大 文一 東中野多聞

己が心まよひしこともありたれど人と打ちとけ心安まる

中村学園大 家政四 松隈香代子

何事も心尽くして励みます友と語れば力沸きくる

○

レクリエーション

こまやかな雨の降り落つ宮前のおごそかにして美しく見ゆ
しづかなる宮居の中をみ友らと語らひ歩みて心なごみぬ
亜細亜大 法四 松田裕幸

ドイツ銀行勤務 川手 和 恵

いにしへの祭りの跡や贄山の馬頭観音風に吹かるる
にえ山の馬頭観音涼やかに風吹きわたる阿蘇の青山

金沢大 工三 森田康之

阿蘇の地に群れて飛びたる赤トンボ失はれゆく故郷を思ふ

厚木市教育委員会七沢自然教室 井上 聡

ひぐらしの声を聞きつつ阿蘇の山に時を忘れて友と語らふ

長崎大 教育二 白石 由美子

母親の後をつけゆく子馬みて幼き頃の我思ひ出す

我也また二十年を父母に守られて育てられしと思ひて涙す

防衛大 国際関係四 二宮 充 史

丘の上そよぐ夏風すがすがしはるかにかすむ阿蘇の山々

市ヶ谷漢方クリニック院長 桑木崇彦

もくもくと湧き立つ煙わが立てる地球はげにや生きてあるらし

五和町立御領小学校教諭 田苗安希子

歩きつつ話もはづむ長き道語らふ友の声高らかに

熊本大 法二 江原紀子

風の吹く頂きに立ちて眺むれば霞みてそびゆ阿蘇の山々

富山大 工三 腰原健

友どちと酒くみかはしつつ語らひしこの一時を我は忘れじ

○
慰霊祭

祭場の定まりぬれば青竹に注連しづめをめぐらし御祭を待つ

乃木神社勤務 松吉宣和
福岡大 経四 別府正寛

しづけさの中に聞こゆる蟲の音を御霊も共に聞き入りますらむ

○
閉会・別れ

後輩よ「不請の友」をもちたるかと声つまらせて大人は語られり
大矢野町立大矢野中学校教諭 松岡幹男

がくもんはりっぱなひとになるためとのちちのことのはいまわかりけり
立教大 文二 奥富さくや

東北女子短大 生活二 松橋綾

故郷は皆それぞれに違へども会へし不思議に感動おほゆ

尚綱短大 家政科助手 武内倫子

ゆく雲に時の流れを感じつつ今日が最後と仰ぐ日の丸

防衛大 国際関係三 大谷三穂

共に泣き笑ひし友との再会を心に誓ひ阿蘇を背にする

大学教官有志協議会・国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎

三十九年を積重ね来しこの合宿いま中つ日の夕べを迎へぬ

お二人の大人はそれぞれみ心の丈を傾け訴へたまひき

お二人のことばゆ溢るる誠心を二百五十人はいかに受けしか

み国いまおそるべきほど亡国のきざし日増しに高まりゆく時
力なき我にしあれど光輝ある皇御国を守らでやむべき

前九州造形短大教授 小柳陽太郎

白濱裕運営委員長の「合宿を顧みて」を聞く

一年のおもひかたむけ語りゆく君が言葉に力こもれり
阿蘇の地に友らの心ひゞきあふ場所つくらむとの一念に生く
学間にとりくむ姿勢かくあれと切々と語る君がみことば
はげしきたたかひの一年なりけむ語りゆく君がことばの途絶えがちなる
胸押へ語りゆく友よこの若き友のたふときをしみじみと思ふ

日商岩井 ガス・石炭本部副本部長 澤部壽孫

徳岡先生の御講義を聴きて

若きらにみ思ひこめて語ります師のみ姿に胸をうたるる
御話は活き活きとして集ひたる若きら聴きぬ眼を輝かせ
マスコミを信ずべからずおのがじし考ふべしと師は説き給ふ

百武学園専門学校講師 関口靖枝

うら若く心の直き乙女らと国の行く末語りすごしぬ

先達の心を共にしのびつつ学びてゆかむ若き友らと

みどり児をかひなに抱き育てゆく母となるべきこの乙女らと

「涵養」の文字調べむとすぐさまに辞書をひく友らのありがたきかな

励みませ養ひゆきませをみなこの直くやさしき大和心を

日の本のみおやのいのち伝へゆかむすめらみくにのをみなごなれば

元サンデン交通 取締役 加藤善之

入院中の寶邊先輩を偲びて

大手術終へ早や一月越えにける寶邊先輩如何あるらむ

欠席は初めてならむ四十年の合宿教室に師の影はなく

やつれ給ふ面影今もまなかひをよぎりてやまず阿蘇の旅路に

先輩も若き友らもこもごもに病状如何にと我に問ひかく

くさぐさに思ひはめぐりやまさらむ阿蘇の集ひを偲びたまへば

歌三首届きましぬと運営の白浜委員長知らせくれたり

点滴の側に座しつつ歌詠まるやつれし姿の偲ばれやまず

さはあれど経過は良しと安らぎて我また詠まむ火の国阿蘇に

夕陽さし日は傾きて高原の空をみやればひぐらしの鳴く

ひぐらしの鳴く木の下影を小柳さん岡棟さんの連立ちてゆく

BBS金明代表取締役 中田 一義

それぞれの生き方照らし語りたる言の葉重く心に響く

大成建設 国際事業本部 山口 秀範

小田村先生の御講義

八十路とはとても思へず若きらに注ぐまなざし強きみ言葉は

御述懐一帖・勅語・勅諭と大部なる史料整へ語ります師は

工夫こめ作り給ひし「年表」に師のみ心ばへほのみゆるごとし

二十五年過ぎしその夏初参加の合宿の様思ひ出さるる

その夏の御講義の折も手づくりの「年表」をもとに講義し給ひし

過ぎし日に返るごとしも師の君のみ姿遠く拝しつつ聴けば

この気迫この憂国のみ思ひの若きらに届けと祈りつつ聴く

熊本県立第二高校教諭 白濱 裕

幾人の参加あるかと案ぜしに多数の友を迎へてうれし

心知る友らと準備すすめこしこの一年を思ひ出だすも

山口県立高森高校教諭 寶邊 矢太郎

小堀先生が御講義で亡き村松剛先生のことにふれられて

壇上に颯爽と登りたまひたる師のみすがたのまなかひ去らず

台風の来りし年もみやまひにふせましし年もかけつけたまひき

吾の話をきく人あらば行きますとふ強きいらへをきくもかしこし

こやせる身をかへりみもせで皇室を案じたまふ師のみこころしのびぬ

はやすでにおのが生も死もすてただに国の行末を念じらるるなり

神奈川県立津久井高校教諭

大日方

学

贄塚散策

雷のとどろく音に風さへも強く吹ききて稲穂さざめく

夕立ちの降りこぬことを祈りつつ友らと共に丘を登りぬ

帰らむと丘を下れば雲晴れて杵島の岳の美しく見ゆ

第三十九回合宿教室は、昨年八月上旬の四泊五日の間、熊本県阿蘇の「阿蘇の司・ピラパークホテル」において大学生・社会人を対象に営まれた。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味読いただき、人生の葉として活用されんことを願ふ次第である。

なほ本書の各講義録の中には合宿地「阿蘇」にちなんだ写真を掲載してゐるが、その中の数葉については阿蘇町役場のご好意によつて転載させていただいたものである。ここに記して謝意を表したい。

さて、今夏で四十回目を迎へる合宿教室は、八月四日（金）から八日（火）の日程で、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」を会場として開催される予定である。招聘講師としては、評論家・埼玉大学教授の長谷川三千子先生、宮大工で鶴工舎・舎主の小川三夫先生をお招きすることに決定してゐる。全国の学生、青年諸氏の御参加を願ひつつ筆を擱く。

平成七年三月二十日

編集委員

山内 健生
占部 賢志

—— 日本への回帰 ——

(第30集)

平成七年三月三十日発行

定価 九〇〇円

下 二四〇円

編 者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小 田 村 寅 一 郎

発 行 所

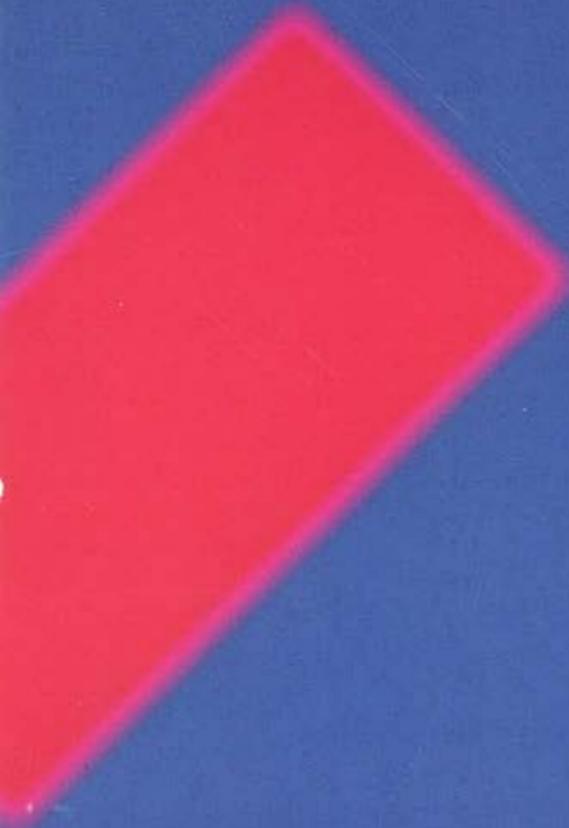
社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七・〇一・八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします



大学教官有志協議会編
社団法人 国民文化研究会